

源氏物語

花散里

紫式部

與謝野晶子訳

【テキスト中に現れる記号について】

〈 〉：ルビ

（例）橘たちばな

「#」：入力者注 主に外字の説明や、傍点の位置の指定

（例）「#地から3字上げ」

「#地から3字上げ」橘たちばなも恋こひのうれひも散りかへば香かをなつ

「#地から3字上げ」かしみほととぎす鳴く （晶子）

みずから求めてしている恋愛の苦は昔もこのごろも変わらない源氏であるが、ほかから受ける忍びがたい圧迫が近ごろになってますます加わるばかりであったから、心細くて、人間の生活というものからのがれたい欲求も起こるが、さてそうもならない絆ほだしは幾つもあった。

麗景殿れいげいでんの女御にょごといわれた方は皇子女もなくて、院いんがお崩れかになつて以後はまったくたよりない身の上になっているのであるが、源氏

の君の好意で生活はしていた。この人の妹の三の君と源氏は若い時代に恋愛をした。例の性格から関係を絶つこともなく、また夫人として待遇することもなしにまれまれ通っているのである。女としては煩悶はんもんをすることの多い境遇である。物哀れな心持ちになっているこのごろの源氏は、急にその人を訪とうてやりたくなつた心はおさえきれないほどのものだったから、五月雨さみだれの珍しい晴れ間に行った。目だたない人数を従えて、ことさら簡素なふうをして出かけたのである。中川辺を通つて行くと、小さいながら庭木の繁しげりようななどのおもしろく見える家で、よい音のする琴を和琴わこんに合わせて派手はでに弾く音がした。源氏はちよつと心が惹ひかれて、往来にも近い建物のことであるから、なおよく聞こうと、少しからだを車から出してながめて見ると、その家の大木の桂かつらの葉のにおいが風に送られて来て、加茂の祭りのころが思われた。なんとなく好奇心の惹ひかれる家であると思つて、考えてみると、それはただ一度だけ来たことのある女の子の家であつた。長く省みなかつた自分が訪たずねて行つても、もう忘れていかもしれないがなどと思ひながらも、通り過ぎる気にはなれないで、じつとその家を見ている時に杜鵑ほととぎすが啼ないて通つた。源氏に何事かを促すようであつたから、車を引き返させて、こんな役に馴なれた惟光これみつを使いによつた。

「#ここから2字下げ」

をちかへりえぞ忍ばれぬ杜鵑ほの語らひし宿の垣根かきねに

「#ここで字下げ終わり」

この歌を言わせたのである。惟光がはいつて行くと、この家の寝

殿ともいうような所の西の端の座敷に女房たちが集まって、何か話をしていた。以前にもこうした使いに来て、聞き覚えのある声であったから、惟光は声をかけてから源氏の歌を伝えた。座敷の中で若い女房たちらしい声で何かささやいている。だれの訪れであるかわからないらしい。

「#ここから2字下げ」

ほととぎす語らふ声はそれながらあなおぼつかさみだれな五月雨の空

「#ここで字下げ終わり」

こんな返歌をするのは、わからないふうをわざと作っているらしいので、

「では門違いなのでしょうよ」

と惟光が言つて、出て行くのを、主人あるじの女だけは心の中でくやくしく思い、寂しくも思った。知らぬふりをしなければならぬのである。もっともである。源氏は思いながらも物足らぬ気がした。この女と同じほどの階級の女としては九州に行っている五節ごせちが可憐かれんであったと源氏は思った。どんな所にも源氏の心を惹ひくものがあって、それがそれ相応に源氏を悩ましていたのである。長い時間を中に置いていても、同じように愛し、同じように愛されようと望んでいて、多数の女の物思いの原因は源氏から与えられているとも言えるのである。

目的にして行った家は、何事も想像していたとおりで、人少なで、寂しくて、身にしむ思いのする家だった。最初に女御の居間のほうへ訪ねて行って、話しているうちに夜がふけた。二十日月が上って、

大きい木の多い庭がいつそう暗い蔭かげがちになって、軒に近い橋たちはなの木がなつかしい香を送る。女御はもうよい年配になっているのであるが、柔らかい気分の受け取れる上品な人であった。すぐれて時めくようなことはなかったが、愛すべき人として院が見ておいでになったと、源氏はまた昔の宮廷を思い出して、それから次々に昔恋しいいろいろなことを思って泣いた。杜鵑がさつき町で聞いた声なで啼いた。同じ鳥が追って来たように思われて源氏はおもしろく思った。「いにしへのこと語らへば杜鵑いかに知りてか」という古歌を小声で歌ってみたりもした。

「#ここから1字下げ」

「橋の香をなつかしみほととぎす花散る里を訪ねてぞとふ

「#ここで字下げ終わり」

昔の御代みよが恋しくてならないような時にはどこよりもこちらへ来るのがよいと今わかりました。非常に慰められることも、また悲しくなることもあります。時代に順応しようとする人ばかりですから、昔のことを言うのに話し相手がだんだん少なくなっただけです。しかしあなたは私以上にお寂しいでしょう」と源氏に言われて、もともと孤独の悲しみの中に浸っている女御も、今さらのようにまた心がしんみりと寂しくなっていく様子が見える。人柄も同情をひく優しみの多い女御なのであった。

「#ここから2字下げ」

人目なく荒れたる宿は橋の花こそ軒のつまとなりけれ

「#ここで字下げ終わり」

とだけ言うのであるが、さすがにこれは貴女きじょであると思つた。さっきの家の女以来幾人も女性を思い出していたのであるが、それとこれとが比べ合わせられたのである。

西座敷のほうへは、静かに親しいふうではいって行った。忍びやかに目の前へ現われて来た美しい恋人を見て、どれほどの恨みが女にあつても忘却してしまつたに違いない。恋しかつたことをいろいろな言葉にして源氏は告げていた。嘘うそではないのである。源氏の恋人である人は初めから平凡な階級でないせいであるか、何らかの特色を備えてない人は稀まれであつた。好意を持ち合つて長く捨てない、こんな間柄でいることを肯定のできない人は去つて行く。それもしかたがないと源氏は思っているのである。さっきの町の家の女もその一人で、現在はほかに愛人を持つ女であつた。

底本：「全訳源氏物語 上巻」角川文庫、角川書店

1971（昭和46）年8月10日改版初版発行

1994（平成6）年12月20日56版発行

このファイルは、古典総合研究所（<http://www.genji.co.jp/>）で入力されたものを、青空文庫形式にあらためて作成しました。

校正には、2002（平成14）年4月5日71版を使用しました。

入力：上田英代

校正：kumi

2003年7月13日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫(<http://www.aozora.gr.jp/>)で作られました。入力、校正、制作にあたっては、ボランティアの皆さんです。

源氏物語

須磨

紫式部

與謝野晶子訳

【テキスト中に現れる記号について】

〈 〉：ルビ

（例）禍わざわいが起こって来る

—：ルビの付く文字列の始まりを特定する記号

（例）御一挨拶あいさつを伝えた

「#」：入力者注 主に外字の説明や、傍点の位置の指定

（数字は、JIS X 0213の面区点番号、または底本のページと

行数）

（例）「#「糸+兼」、第3水準1-90-17」

「#地から3字上げ」人恋ふる涙をわすれ大海へ引かれ行く

「#地から3字上げ」べき身かと思ひぬ （晶子）

当帝の外戚の大臣一派が極端な圧迫をして源氏に不愉快な目を見せることが多くなって行く。つとめて冷静にはしていても、このま

まで置けば今以上な禍わざわいが起こって来るかもしれぬと源氏は思うよ
 うになった。源氏が隠栖いんせいの地に擬なしている須磨すまという所は、昔は相
 当に家などもあつたが、近ごろはさびれて人口も稀薄きはくになり、漁夫
 の住んでいる数もわずかであると源氏は聞いていたが、田舎いなかといっ
 ても人の多い所で、引き締まりのない隠栖いんせいになつてしまつてはいや
 であるし、そうかといつて、京にあまり遠くへは、人には言えぬこ
 とではあるが夫人のことが気がかりでならぬであろうしと、煩悶はんもん
 した結果須磨へ行こうと決心した。この際は源氏の心に上つてくる過
 去も未来も皆悲しかった。いとわしく思つた都も、いよいよ遠くへ
 離れて行こうとする時になつては、捨て去りがたい気のするもの
 多いことを源氏は感じていた。その中でも若い夫人が、近づく別れ
 を日々に悲しんでいる様子の哀れさは何にもまさつていたましかつ
 た。この人とはどんなことがあつても再会を遂げようという覚悟は
 あつても、考えてみれば、一日二日の外泊をしていても恋しさに堪
 えられなかつたし、女王にょおうもその間は同じように心細がつていたそん
 な間柄であるから、幾年と期間の定まつた別居でもなし、無常の人
 世では、仮の別れが永久の別れになるやも計られないのであると、
 源氏は悲しくて、そつといつしよに伴つて行こうという気持ちにな
 ることもあるのであるが、そうした寂しい須磨のような所に、海岸
 へ波の寄つてくるほかは、人の来訪することもない住居すまいに、この華
 麗きじやうな貴女きよめと同棲どうせいしていることは、あまりに不似合いなことではある
 し、自身としても妻のいたましましさに苦しまねばならぬであろうと源
 氏は思つて、それはやめることにしたのを、夫人は、
 「どんなひどい所だつて、ごいっしよでさえあれば私はいい」
 と言つて、行きたい希望のこぼまれるのを恨めしく思つていた。

花散里はなぢるりの君も、源氏の通つて来ることは少なくとも、一家の生活

は全部源氏の保護があつてできているのであるから、この変動の前に心をいためているのはもつともなことと言わねばならない。源氏の心にたいした愛があつたのではなくても、とにかく情人として時々通つて来ていた所々では、人知れず心をいためている女も多数にあつた。入道の宮からも、またこんなことで自身の立場を不利に導く取り沙汰が作られるかもしれぬという遠慮を世間へあそばしながらの御慰問が始終源氏にあつた。昔の日にこの熱情が見せていただけたことであつたならと源氏は思つて、この方のために始終物思いをせねばならぬ運命が恨めしかつた。三月の二十幾日に京を立つことにしたのである。世間へは何とも発表せずに、きわめて親密に思つている家司七、八人だけを供にして、簡単な人数で出かけることにしていた。恋人たちの所へは手紙だけを送つて、ひそかに別れを告げた。形式的なものでなくて、真情のこもつたもので、いつまでも自分を忘れさすまいとした手紙を書いたのであつたから、きつと文学的におもしろいものもあつたに違いないが、その時分に筆者はこのいたましい出来事に頭を混乱させていて、それらのことを注意して聞いておかなかつたのが残念である。

出発前二、三日のことである、源氏はそつと左大臣家へ行つた。簡単な網代車あじろぐるまで、女の乗っているようにして奥のほうへ寄つていることなども、近侍者には悲しい夢のようにばかり思われた。昔使つていた住居すまいのほうは源氏の目に寂しく荒れているような気がした。若君の乳母めのとたちとか、昔の夫人の侍女で今も残っている人たちとか、源氏の来たのを珍しがって集まつて来た。今日の不幸な源氏を見て、人生の認識のまだ十分できていない若い女房なども皆泣く。

かわいい顔をした若君がふざけながら走って来た。

「長く見ないでいても父を忘れないのだね」

と言つて、膝ひざの上へ子をすわらせながらも源氏は悲しんでいた。

左大臣がこちらへ来て源氏に逢あつた。

「おひまな間に伺つて、なんでもない昔の話ですがお目にかかつてしたくてなりませんでしたものの、病気のために御奉公もしないで、官庁へ出ずにいて、私人としては暢のんき気に人の交際もすると言われるようでは、それももうどうでもいいのですが、今の社会はそんなことでもなんらかの危害が加えられますから恐こわかつたのでございます。あなたの御失脚を拝見して、私は長生きをしているから、こんな情けない世の中も見るのだと悲しいのでございます。末世です。天地をさかさまにしてもありうることでない現象でございます。何もかも私はいやになつてしまいました」

としおれながら言う大臣であつた。

「何事も皆前生の報いなのでしようから、根本的にいえば自分の罪なのです。私のように官位を剥奪はくたつされるほどのことでなくても、勅ちよく勤かんの者は普通人と同じように生活していることはよろしくないといされるのはこの国ばかりのことでもありません。私などは遠くへ追放するといふ条項もあるのですから、このまま京におりましてはなおなんらかの処罰を受けることと思われます。冤罪えんざいであるという自信を持って京に留まっていますことも朝廷へ濟まない気がしますし、今以上の嚴罰にあわない先に、自分から遠隔の地へ移つたほうがいいと思つたのです」

などと、こまごま源氏は語つていた。大臣は昔の話をして、院がどれだけ源氏を愛しておいでになつたかと、その例を引いて、涙を

おさえる直衣のうしの袖そでを顔から離すことができないのである。源氏も泣いていた。若君が無心に祖父と父の間を歩いて、二人に甘えることを楽しんでいるのに心が打たれるふうである。

「亡なくなりました娘のことを、私は少しも忘れることができずに悲しんでおりましたが、今度の事によりまして、もしあれが生きておりましたなら、どんなに歎なげくことであろうと、短命で死んで、この悪夢を見ずに済んだことではじめて慰めたのでございます。小さい方が老祖父母の中に残っておいになつて、りっぱな父君に接近されることのない月日の長かろうと思われまことが私には何よりも最も悲しゅうございます。昔の時代には眞実罪を犯した者も、これほどの扱いは受けなかつたものです。宿命だと見るほかはありません。外国の朝廷にもずいぶんありますように冤罪にお当たりになつたのでございます。しかし、それにしてもなんとか言い出す者があつて、世間が騒ぎ出して、処罰はそれからのものですが、どうも訳がわかりません」

大臣はいろいろな意見を述べた。三位中將さんみも来て、酒が出たりなとして夜がふけたので源氏は泊まることにした。女房たちをその座敷に集めて話し合うのであつたが、源氏の隠れた恋人である中納言の君が、人には言えない悲しみを一人でしている様子を源氏は哀れに思えてならないのである。皆が寝たあとに源氏は中納言を慰めてやろうとした。源氏の泊まった理由はそこにあつたのである。翌朝は暗い間に源氏は帰ろうとした。明け方の月が美しく、いろいろな春の花の木が皆盛りを失つて、少しの花が若葉かへの蔭かげに咲き残つた庭に、淡く霧がかかつて、花を包んだ霞かすみがぼうとその中を白くしている美は、秋の夜の美よりも身にしむことが深い。隅すみの欄干により

かかって、しばらく源氏は庭をながめていた。中納言の君は見送るうとして妻戸をあけてすわっていた。

「あなたとまた再会ができるかどうか。むずかしい気のすることだ。こんな運命になることを知らないで、逢えば逢うことのできたころにのんきでいたのが残念だ」

と源氏は言うのであったが、女は何も言わずに泣いているばかりである。

若君の乳母めのとの宰相の君が使いになって、大臣夫人の宮の御一あいさつ挨拶を伝えた。

「お目にかかってお話も伺いたかったのですが、悲しみが先だちまして、どうしようもございませんでしたうちに、もうこんなに早くお出かけになるそうです。そうならならぬことになっておりますことも何という悲しいことでございます。哀れな人が眠りからさめますまでお待ちになりませんで」

聞いていて源氏は、泣きながら、

「#ここから2字下げ」

鳥部山燃えし煙もまがふやと海人あまの塩焼く浦見にぞ行く

「#ここで字下げ終わり」

これをお返事の詞ことばともなく言っていた。

「夜明けにする別れはみなこんなに悲しいものだろうか。あなた方は経験を持っていらっしやるでしょう」

「どんな時にも別れは悲しゅうございますが、今朝けさの悲しゅうございますことは何にも比較ができると思えません」

宰相の君の声は鼻声になっていて、言葉どおり深く悲しんでいるふうであった。

「ぜひお話ししたく存じますことでもありますのですが、さてそれも申し上げられませんか煩悶はんもんをしております心をお察しください。ただ今よく眠っております人に今朝また逢ってまいることは、私の旅の思い立ちを躊躇ちゅうちゆさせることになるでございましょうから、冷酷であるでしょうがこのまままいります」

と源氏は宮へ御一挨拶あいさつを返したのである。帰って行く源氏の姿を女房たちは皆のぞいていた。落ちようとする月が一段明るくなった光の中を、清艶せいえんな容姿で、物思いをしながら出て行く源氏を見ては、虎とらも狼おおかみも泣かずにはいられないであろう。ましてこの人たちは源氏の少年時代から侍していたのであるから、言いようもなくこの別れを悲しく思っただのである。源氏の歌に対して宮のお返しになった歌は、

「#ここから2字下げ」

亡なき人の別れやいとど隔たらん煙となりし雲井ならでは

「#ここで字下げ終わり」

というのである。今の悲しみに以前の死別の日の涙も添って流れる人たちばかりで、左大臣家は女のむせび泣きの声に満たされた。

源氏が二条の院へ帰って見ると、ここでも女房は宵よいからずっと歎なげき明かしたふうで、所々にかたまつて世の成り行きを悲しんでいた。家職の詰め所を見ると、親しい侍臣は源氏について行くはずで、その用意と、家族たちとの別れを惜しむために各自が家のほうへ行つ

ていてだれもいない。家職以外の者も始終集まって来ていたものであるが、訪ねて来ることは官辺の目が恐ろしくてだれもできないのである。これまで門前に多かつた馬や車はもとより影もないのである。人生とはこんなに寂しいものであつたのだと源氏は思った。食堂の大食卓なども使用する人数が少なくて、半分ほどは塵を積もらせていた。畳は所々裏向けにしてあつた。自分がいるうちにすでにこうである、まして去ってしまったあとの家はどんなに荒涼たるものになるだろうと源氏は思った。西の対へ行くと、格子を宵のままおろさせないで、物思いをする夫人が夜通し起きていたあとであつたから、縁側の所々に寝ていた童女などが、この時刻にやっと皆起き出して、夜の姿のまま往來するのも趣のあることであつたが、気の弱くなっている源氏はこんな時にも、何年かの留守の間にはこつした人たちも散り散りにほかへ移つて行つてしまふだろうと、そんなはずのないことまでも想像されて心細くなるのであつた。源氏は夫人に、左大臣家を別れに訪ねて、夜がふけて一泊したことを言つた。

「それをあなたはほかの事に疑つて、くやしがつていませんでしたか。もうわずかしかかない私の京の時間だけは、せめてあなたといつしよにいたいと私は望んでいるのだけれど、いよいよ遠くへ行くことになると、ここにもかしこにも行つておかねばならない家が多いのですよ。人間はだれがいつ死ぬかもしれませんから、恨めしいなどと思わせたままになつては悪いと思うのですよ」

「あなたのことがこうなつた以外のくやしいことなどは私にない」とだけ言っている夫人の様子にも、他のだれよりも深い悲しみの見えるのを、源氏はもつともであると思つた。父の親王は初めから

この女王にょおうに、手もとで育てておいでになる姫君ほどの深い愛を持つておいでにならなかつたし、また現在では皇太后派をはばかって、よそよそしい態度をおとりになり、源氏の不幸も見舞いにおいでにならないのを、夫人は人聞きも恥ずかしいことであると思つて、存在を知られないまままでいたほうがかえつてよかつたとも悔やんでいた。継母である宮の夫人が、ある人に、

「あの人が突然幸福な女になつて出現したかと思うと、すぐにもうその夢は消えてしまふじゃないか。お母かあさん、お祖母ばあさん、今度は良人あつとという順にだれにも短い縁よりない人らしい」

と言つた言葉を、宮のお邸やしきの事情をよく知つている人があつて話したので、女王は情けなく恨めしく思つて、こちらからも音信をしない絶交状態であつて、そのほかにはだれ一人たよりになる人を持たない孤独の女王であつた。

「私がいつまでも現状に置かれるのだつたら、どんなひどい侘わび住居すまであつてもあなたを迎えます。今それを実行することは人聞きが穏やかでないから、私は遠慮してしないでだけです。勅勘の人というもの、明るい日月の下へ出ることも許されていませんからね。のんきになつていては罪を重ねることになるのです。私は犯した罪のないことは自信しているが、前生の因縁か何かでこんなことにされているのだから、まして愛妻といつしよに配所へ行つたりすることはないことだから、常識では考えることもできないようなことをする政府にまた私を迫害する口実を与えるようなものですからね」

などと源氏は語っていた。昼に近いころまで源氏は寢室にいたが、そのうちに帥そうの宮がおいでになり、三位中将も来邸した。面会をす

るために源氏は着がえをするのであったが、

「私は無位の人間だから」

と言つて、無地の直衣のっしにした。それでかえつて艶えんな姿になつたよ
うである。鬢びんを搔かくために鏡台に向かつた源氏は、瘦やせの見える顔
が我ながらきれいに思われた。

「ずいぶん衰えたものだ。こんなに痩せているのが哀れですね」

と源氏が言つと、女王は目に涙を浮かべて鏡のほうを見た。源氏
の心は悲しみに暗くなるばかりである。

「#ここから2字下げ」

身はかくてさすらへぬとも君があたり去らぬ鏡のかけははなれじ

「#ここで字下げ終わり」

と源氏が言つと、

「#ここから2字下げ」

別れても影だにとまるものならば鏡を見てもなくさめてまし

「#ここで字下げ終わり」

言つともなくこう言いながら、柱に隠されるようにして涙を紛ら
している若紫の優雅な美は、なおだれよりもすぐれた恋人であると
源氏にも認めさせた。親王と三位中将は身にしむ話をして夕方帰つ
た。

花散里はなぢるさとが心細がつて、今度のことが決まって以来始終手紙をよこ
すのも、源氏にはもつともなことと思われて、あの人ももう一度逢

いに行つてやらねば恨めしく思うであろうという気がして、今夜もまたそこへ行くために家を出るのを、源氏は自身ながらも物足らず寂しく思われて、気が進まなかったために、ずっとふけてから来たのを、

「ここまで別れにお歩きになる所の一つにしてお寄りくださいましたとは」

こんなことを言つて喜んだ女御にょごのことなどは少し省略して置く。

この心細い女兄弟は源氏の同情によつてわずかに生活の体面を保っているのであるから、今後はどうなつて行くかというような不安が、寂しい家の中に漂つているように源氏は見た。おぼろな月がさしてきて、広い池のあたり、木の多い築山つきやまのあたりが寂しく見渡された時、まして須磨の浦は寂しいであろうと源氏は思った。西座敷にいる姫君は、出発の前二日になつてはもう源氏の来訪は受けられないものと思つて、気をめいらせていたのであつたが、しめやかな月の光の中を、源氏がこちらへ歩いて来たのを知つて、静かに膝行いざつて出た。そしてそのまま二人は並んで月をながめながら語つているうちに明け方近い時になつた。

「夜が短いのですね。ただこんなふうになつてもいつしよにいられることがもうないかもしれませぬ。私たちがまだこんないやな世の中の渦中かちゅうに巻き込まれないでいられたころを、なぜむだにばかりしたのでしょう。過去にも未来にも例の少ないような不幸な男になるのを知らないで、あなたといつしよにいてよい時間をなぜこれまでにたくさん作らなかつたのだらう」

恋の初めから今日までのことを源氏が言い出して、感傷的な話の尽きないのであるが、鶏ももうたびたび鳴いた。源氏はやはり世間

をはばかって、ここからも早暁に出て行かねばならないのである。月がすっとはいつてしまふ時のような気がして女心は悲しかった。月の光がちょうど花散里はなぢりの袖の上にさしているのである。「宿る月さへ濡ぬるる顔なる」という歌のようであった。

「#ここから2字下げ」

月影の宿れる袖そでは狭くともとめてぞ見ばや飽かぬ光を

「#ここで字下げ終わり」

こう言つて、花散里の悲しがっている様子があまりに哀れで、源氏のほうから慰めてやらねばならなかつた。

「#ここから1字下げ」

「行きめぐりつひにすむべき月影のしばし曇らん空ながめそ

「#ここで字下げ終わり」

はかないことだ。私は希望を持っているのだが、反対に涙が流れてきて心を暗くされますよ」

と源氏は言つて、夜明け前の一時的に暗くなるころに帰つて行つた。

源氏はいよいよ旅の用意にかかつた。源氏に誠意を持って仕えて、現在の権勢に媚こびることを思わない人たちを選んで、家司けいしとして留る守中の事務を扱う者をまず上から下まで定めた。随行するのは特にまたその中から選ばれた至誠の士である。隠栖いんせいの用に持つて行くのは日々必要な物だけで、それも飾りけのない質素な物を選んだ。そ

れから書籍類、詩集などを入れた箱、そのほかには琴を一つだけ携えて行くことにした。たくさんにある手道具や華奢な工芸品は少しも持つて行かない。一平民の質素な隠栖者になろうとするのである。源氏は今まで召し使っていた男女をはじめ、家のこと全部を西の対へ任せることにした。私領の莊園、牧場、そのほか所有権のあるものの証券も皆夫人の手もとへ置いて行くのであった。なおそのほかに物資の蓄蔵されてある幾つの倉庫、納殿などのことも、信用する少納言の乳母を上にして何人かの家司をそれにつけて、夫人の物としてある財産の管理上の事務を取らせることに計らったのである。

これまで東の対の女房として源氏に直接使われていた中の、中務、中将などという源氏の愛人らは、源氏の冷淡さに恨めしいところはあつても、接近して暮らすことに幸福を認めて満足していた人たちで、今後は何を楽しみに女房勤めができようと思つたのであるが、「長生きができてまた京へ帰るかもしれない私の所にいたいと思う人は西の対で勤めているがいい」

と源氏は言つて、上から下まですべての女房を西の対へ来させた。そして女の生活に必要な絹布類を豊富に分けて与えた。左大臣家にいる若君の乳母たちへも、また花散里へもそのことをした。華美な物もあつたが、何年間に必要な実用的な物も多くそろえて贈つたのである。源氏はまた途中の人目を気づかないながら尚侍の所へも別れの手紙を送つた。

「#ここから1字下げ」

あなたから何とも言つてくださらないのも道理なようには思えますが、いよいよ京を去る時になつてみますと、悲しいと思われれることも、恨めしさも強く感ぜられます。

「#ここから2字下げ」

逢瀬あふせなき涙の川に沈みしや流るるみをの初めなりけん

「#ここから1字下げ」

こんな人への執着が強くては仏様に救われる望みもありません。

「#ここで字下げ終わり」

間で盗み見されることがあやぶまれて細かには書けなかったのである。手紙を読んだ尚侍は非常に悲しかった。流れて出る涙はとめどもなかった。

「#ここから2字下げ」

涙川みなわ浮ぶ水沫も消えぬべし別れてのちの瀬をもまたずて

「#ここで字下げ終わり」

泣き泣き乱れ心で書いた、乱れ書きの字の美しいのを見ても、源氏の心は多く惹かれて、この人と最後の会見をしないで自分に行かれるであろうかとも思ったが、いろいろなことが源氏を反省させた。恋しい人の一族が源氏の排斥を企てたのであることを思って、またその人の立場の苦しさも推し量って、手紙を送る以上のことはしなかった。

出立の前夜に源氏は院のお墓へ謁するため北山へ向かった。明け方にかけて月の出るころであったから、それまでの時間に源氏は入道の宮へお暇いとまご乞いに伺候した。お居間の御簾みすの前に源氏の座が設けられて、宮御自身でお話しになるのであった。宮は東宮のことを

限りもなく不安に思召す御様子である。聡明な男女が熱を内に包んで別れの言葉をかわしたのであるが、それには洗練された悲哀というようなものがあつた。昔に少しも変わつておいでにならないつかしい美しい感じの受け取れる源氏は、過去の十数年にわたる思慕に対して、冷たい理智の一面よりお見せにならなかつた恨みも言つてみたい気になるのであつたが、今は尼であつて、いつそう道義的になつておいでになる方にうとましいと思われまいとも考え、自分ながらもその口火を切つてしまえば、どこまで頭が混乱してしまうかわからない恐れもあつて心をおさえた。

「こういたしました意外な罪に問われますことになりましても、私は良心に思い合わされることが一つございまして空恐ろしく存じます。私はどうなりましても東宮が御無事に即位あそばせば私は満足いたします」

とだけ言つた。それは真実の告白であつた。宮も皆わかつておいでになることであつたから源氏のこの言葉で大きな衝動をお受けになつただけで、何ともお返辞はあそばさなかつた。初恋人への怨恨、父性愛、別離の悲しみが一つになつて泣く源氏の姿はあくまでも優雅であつた。

「これから御陵へ参りますが、お言づてがございませんか」と源氏は言つたが、宮のお返辞はしばらくなかつた。躊躇をしておいでになる御様子である。

「#ここから2字下げ」

見しは無く有るは悲しき世のはてを背きしかひもなくぞ経る

「#ここで字下げ終わり」

宮はお悲しみの実感が余って、歌としては完全なものがおできに
ならなかった。

「#ここから2字下げ」

別れしに悲しきことは尽きにしをまたもこの世の憂さは勝れる

「#ここで字下げ終わり」

これは源氏の作である。やっと月が出たので、三条の宮を源氏は
出て御陵へ行こうとした。供はただ五、六人つれただけである。下
の侍も親しい者ばかりにして馬で行った。今さらなことではあるが
以前の源氏の外出に比べてなんと寂しい一行であろう。家従た
ちも皆悲しんでいたが、その中に昔の齋院の御禊の日に大将の飯の
隨身になって従って出た蔵人を兼ねた右近衛将曹は、当然今年の上
がるはずの位階も進められず、蔵人所の出仕は止められ、官を奪わ
れてしまったので、これも進んで須磨へ行く一人になっているので
あるが、この男が下加茂の社がはるかに見渡される所へ来ると、ふ
と昔が目に浮かんで来て、馬から飛びおりとすぐに源氏の馬の口
を取って歌った。

「#ここから2字下げ」

ひきつれて葵かざせしそのかみを思へばつらし加茂のみづがき

「#ここで字下げ終わり」

どんなにこの男の心は悲しいであろう、その時代にはだれよりも

すぐれてはなやかな青年であったのだから、と思うと源氏は苦しかった。自身もまた馬からおりて加茂の社を遙拝してお暇乞いを神にした。

「#ここから2字下げ」

うき世をば今ぞ離るる留まらん名をばただすの神に任せて

「#ここで字下げ終わり」

と歌う源氏の優美さに文学的なこの青年は感激していた。

父帝の御陵に来て立った源氏は、昔が今になったように思われて、御在世中のごことが目の前に見える気がするのであったが、しかし尊い君王も過去の方になっておしまいになっては、最愛の御子の前へも姿をお出しになることができないのは悲しいことである。いろいろのことを源氏は泣く泣く訴えたが、何のお答えも承ることができない。自分のためにあそばされた数々の御遺言はどこへ皆失われたものであると、そんなことがまたここで悲しまれる源氏であった。御墓のある所は高い雑草がはえていて、分けてはいる人は露に全身が潤うのである。この時は月もちょうど雲の中へ隠れていて、前方の森が暗く続いているためにきわまりもなくものすごい。もうこのまま帰らないでもいいような気がして、一心に源氏が拝んでいる時に、昔のままのお姿が幻に見えた。それは寒けがするほどはつきりと見えた幻であった。

「#ここから2字下げ」

亡き影やいかで見らんよそへつつ眺むる月も雲隠れぬる

「#ここで字下げ終わり」

もう朝になるころ源氏は二条の院へ帰った。源氏は東宮へもお暇乞いの御一挨拶あいさつをした。中宮は王命婦おつみやうめいぶを御自身の代わりに宮のおそばへつけておありになるので、その部屋のほうへ手紙を持たせてやったのである。

「#ここから1字下げ」

いよいよ今日京を立ちます。もう一度伺って宮に拝顔を得ませぬことが、何の悲しみよりも大きい悲しみに私は思われます。何事も胸中を御推察くだすって、よろしきように宮へ申し上げてください。

「#ここから2字下げ」

いつかまた春の都の花を見ん時うしなへる山がつにして

「#ここで字下げ終わり」

この手紙は、桜の花の大部分は散った枝へつけてあった。命婦は源氏の今日の出立を申し上げて、この手紙を東宮にお目にかけると、御幼年ではあるがまじめになって読んでおいでになった。

「お返事はどう書きましたらよろしゅうございましょう」

「しばらく逢わないでも私は恋しいのであるから、遠くへ行つてしまつたら、どんなに苦しくなるだろうと思うとお書き」

と宮は仰せられる。なんとという御幼稚さだろうと思つて命婦はいたましく宮をながめていた。苦しい恋に夢中になつていた昔の源氏、そのある日の場合、ある夜の場合を命婦は思い出して、その恋愛がなかつたならお二人にあの長い苦勞はさせないでよかつたのである

うと思うと、自身に責任があるように思われて苦しかった。返事は、

「#ここから1字下げ」

何とも申しようがございません。宮様へは申し上げました。お心細
 そうな御様子を拝見いたします私も非常に悲しゅうございます。

「#ここで字下げ終わり」

と書いたあとは、悲しみに取り乱してよくわからぬ所があった。

「#ここから2字下げ」

咲きてとく散るは憂^うけれど行く春は花の都を立ちかへり見よ

「#ここから1字下げ」

また御運の開けることがきつとございました。

「#ここで字下げ終わり」

とも書いて出したが、そのあとでも他の女房たちといっしょに悲
 しい話をし続けて、東宮の御殿は忍び泣きの声に満ちていた。一日
 でも源氏を見た者は皆不幸な旅に立つことを悲しんで惜しまぬ人も
 ないのである。まして常に源氏の出入りしていた所では、源氏のほ
 うへは知られていない長女^{おさめ}、御厠人^{みかやうと}などの下級の女房までも源氏の
 慈愛を受けていて、たとえ短い期間で悪夢は終わるとしても、その
 間は源氏を見ることのできないのを歎^{なげ}いていた。世間もだれ一人今
 度の当局者の処置を至当と認める者はないのであった。七歳から夜
 も昼も父帝のおそばにいて、源氏の言葉はことごとく通り、源氏の
 推薦はむだになることもなかった。官吏はだれも源氏の恩をこうむ
 らないものはないのである。源氏に対して感謝の念のない者はない

のである。大官の中にも弁官の中にもそんな人は多かつた。それ以下は無数である。皆が皆恩を忘れていっているのではないが、報復に手段を選ばない恐ろしい政府をはばかりて、現在の源氏に好意を表示しに来る人はないのである。社会全体が源氏を惜しみ、陰では政府をそしめる者、恨む者はあつても、自己を犠牲にしてまで、源氏に同情しても、それが源氏のために何ほどのことにもならぬと思うのであるが、恨んだりすることは紳士らしくないことであると思ひながらも、源氏の心にはつい恨めしくなる人たちもさすがに多くて、人生はいやなものであると何につけても思われた。

当日は終日夫人と語り合つていて、そのころの例のとおりに早暁に源氏は出かけて行くのであつた。狩衣かりぎぬなどを着て、簡単な旅装をしていた。

「月が出てきたようだ。もう少し端のほうへ出て来て、見送つてだけでもください。あなたに話すことがたくさん積もつたと毎日毎日思わなければならぬでしょうよ。一日二日ほかにいても話がたまり過ぎる苦しい私なのだ」

と言つて、御簾みすを巻き上げて、縁側に近く女王こみづを誘つと、泣き沈んでいた夫人はためらいながら膝行いざつて出た。月の光のさすところに非常に美しく女王はすわつていた。自分が旅中に死んでしまえばこの人はどんなふうになるであろうと思つと、源氏は残して行くのが気がかりになつて悲しかったが、そんなことを思い出せば、いつそうこの人を悲しませることになると思つて、

「#ここから1字下げ」

「生ける世の別れを知らず契りつつ命を人に限りけるかな

「#ここで字下げ終わり」

はかないことだった」

とだけ言った。悲痛な心の底は見せまいとしているのであった。

「#ここから2字下げ」

惜しからぬ命に代へて目の前の別れをしばしとどめてしかな

「#ここで字下げ終わり」

と夫人は言う。それが真実の心の叫びであろうと思うと、立って行けない源氏であったが、夜が明けてから家を出るのは見苦しいと思つて別れて行つた。

道すがらも夫人の面影が目に見えて、源氏は胸を悲しみにふさがらせたまま船に乗つた。日の長いころであつたし、追い風でもあつて午後四時ごろに源氏の一行は須磨に着いた。旅をしたことのない源氏には、心細さもおもしろさも皆はじめての経験であつた。大江殿という所は荒廃していて松だけが昔の名残なごりのものらしく立っていた。

「#ここから2字下げ」

唐国からくにに名を残しける人よりもゆくへ知られぬ家居いへをやせん

「#ここで字下げ終わり」

と源氏は口ずさまれた。渚なぎさへ寄る波がすぐにまた帰る波になるのをながめて、「いとどしく過ぎ行く方の恋しきにうらやましくも帰

る波かな」これも源氏の口に入った。だれも知った業平朝臣なりひらあそんの古歌であるが、感傷的になつてゐる人々はこの歌に心を打たれてゐた。来たほうを見ると山々が遠く霞かすんでいて、三千里外の旅を歌つて、權かゐの雫しずくに泣いた詩の境地にゐる氣もした。

「#ここから2字下げ」

ふる里を峯かすみの霞は隔つれど眺ながむる空は同じ雲井か

「#ここで字下げ終わり」

総てのものが寂しく悲しく見られた。隠栖いんせいの場所は行平ゆきひらが「藻塩もしほ垂たれつつ侘わぶと答へよ」と歌つて住んでいた所に近くて、海岸からはやはいつたあたりで、きわめて寂しい山の中である。めぐらせた垣根かきねも見馴みなれぬ珍しい物に源氏は思った。茅葺かやぶきの家であつて、それに葺あし葺きの廊にあたるような建物が続けられた風流な住居すまいになつてゐた。都会の家とは全然変わったこの趣も、ただの旅にとどまる家であつたならきつとおもしろく思われるに違ちがひない平生の趣味から源氏は思つてながめてゐた。ここに近い領地の預かり人などを呼び出して、いろいろな仕事を命じたり、良清朝臣よしきよあそんなどが家職の下役しかせぬことにも奔走するのも哀れであつた。きわめて短時日のうちにその家もおもしろい上品な山荘になつた。水の流れを深くさせたり、木を植えさせたりして落ち着いてみればみるほど夢の氣がした。摂津守せつつのかみも以前から源氏に隷屬してゐた男であつたから、公然ではないが好意を寄せてゐた。そんなことで、準配所であるべき家も人出入りは多いのであるが、はかばかしい話し相手はなくて外国にでもいるように源氏は思われるのであつた。こうしたつれづれ

な生活に何年も辛抱しんぼうすることができるとか源氏はみずから危あやぶんだ。

旅一住居すまいがようやく整った形式を備えるようになったころは、もう五月雨さみだれの季節になっていて、源氏は京の事がしきりに思い出された。恋しい人が多かった。歎なげきに沈んでいた夫人、東宮のこと、無心に元気よく遊んでいた若君、そんなことばかりを思つて悲しんでいた。源氏は京へ使いを出すことにした。二条の院へと入道の宮へとの手紙は容易に書けなかった。宮へは、

「#ここから2字下げ」

松島まつしまのあまの苦屋くまやもいかならん須磨の浦人しほたる頃ころ

「#ここから1字下げ」

いつもそうでございますが、ことに五月雨にはいりましてからは、悲しいことも、昔の恋しいこともひとときわ深く、ひとときわ自分の世界が暗くなった気がいたされます。

「#ここで字下げ終わり」

というのであった。尚侍ななしのかみの所へは、例のように中納言の君への私信のようにして、その中へ入れたのには、

「#ここから1字下げ」

流人るにんのつれづれさに昔の追想されることが多くなればなるほど、お逢いしたくてならない気ばかりがされます。

「#ここから2字下げ」

こりずまの浦のみるめのゆかしきを塩焼くあまやいかが思はん

「#ここで字下げ終わり」

と書いた。なお言葉は多かった。左大臣へも書き、若君の乳母の宰相の君へも育児についての注意を源氏は書いて送った。

京では須磨の使いのもたらした手紙によって思い乱れる人が多かった。二条の院の女王は起き上がることもできないほどの衝撃を受けたのである。焦れて泣く女王を女房たちはなだめかねて心細い思いをしていた。源氏の使っていた手道具、常に弾いていた楽器、脱いで行った衣服の香などから受ける感じは、夫人にとっては人の死んだ跡のようにはげしいものらしかった。夫人のこの状態がまた苦勞で、少納言は北山の僧都に祈祷のことを頼んだ。北山では哀れな肉親の夫人のためと、源氏のために修法をした。夫人の歎きの心が静まっていくことと、幸福な日がまた二人の上に帰ってくることを仏に祈ったのである。二条の院では夏の夜着類も作って須磨へ送ることにした。無位無官の人の用いる「#「糸+兼」、第水準、第水準の絹の直衣、指貫の仕立てられていくのを見ても、かつて思いも寄らなかつた悲哀を夫人は多く感じた。鏡の影ほどの確かさで心は常にあなたから離れないだろうと言った、恋しい人の面影はその言葉のとおり目から離れなくても、現実のことでないことは何にもならなかつた。源氏がそこから出入りした戸口、よりかかっていることの多かつた柱も見ては胸が悲しみでふさがる夫人であった。今の悲しみの量を過去の幾つの事に比べてみる事ができたりする年配の人であつても、こんなことは堪えられないに違いないのを、だれよりも睦まじく暮らして、ある時は父にも母にもなつて愛撫された保護者で良人だつた人々にわかにかに引き離されて女王が源氏

を恋しく思うのはもつともである。死んだ人であれば悲しい中にも、時間があきらめを教えるのであるが、これは遠い十万億土ではないが、いつ帰るとも定めて思えない別れをしているのであるのを夫人はつらく思うのである。

入道の宮も東宮のために源氏が逆境に沈んでいることを悲しんでおいでになった。そのほか源氏との宿命の深さから思っても宮のお歎きは、複雑なものであるに違いない。これまではただ世間が恐ろしくて、少しの憐みを見せれば、源氏はそれによって身も世も忘れ た行為に出ることが想像されて、動く心もおさえる一方にして、御自身の心までも無視して冷淡な態度を取り続けられたことによって、うるさい世間であるにもかかわらず何の噂も立たないで済んだのである。源氏の恋にも御自身の内の感情にも成長を与えなかったのは、ただ自分の苦しい努力があったからであると思召される宮が、尼におなりになって、源氏が対象とすべくもない解放された境地から源氏を悲しくも恋しくも今は思召されるのであった。お返事も以前のものに比べて情味があった。

「#ここから1字下げ」

このごろはいっそう、

「#ここから2字下げ」

しほたることをやくにて松島に年一経るあまもなげきをぞ積む

「#ここで字下げ終わり」

というのであった。尚侍のは、

「#ここから2字下げ」

浦にたくあまたにつつむ恋なれば燻る煙よ行く方ぞなき

「#ここから1字下げ」

今さら申し上げるまでもないことを略します。

「#ここで字下げ終わり」

という短いので、中納言の君は悲しんでいる尚侍の哀れな状態を報じて来た。身にしむ節々もあつて源氏は涙がこぼれた。紫の女王のは特別にこまやかな情のこめられた源氏の手紙の返事であったから、身にしむことも多く書かれてあつた。

「#ここから2字下げ」

浦人の塩一汲む袖にくらべ見よ波路隔つる夜の衣を

「#ここで字下げ終わり」

という夫人から、使いに託してよこした夜着や衣服類に洗練された趣味のよさが見えた。源氏はどんなことにもすぐれた女になった女王がうれしかった。青春時代の恋愛も清算して、この人と静かに生を楽しもうとする時になっていたものと思うと、源氏は運命が恨めしかった。夜も昼も女王の面影を思うことになって、堪えられぬほど恋しい源氏は、やはり若紫は須磨へ迎えようという気になった。左大臣からの返書には若君のことがいろいろと書かれてあつて、それによってまた平生以上に子と別れている親の情は動くのであるが、頼もしい祖父母たちがついていられるのであるから、気がかりに思う必要はないとすぐに考えられて、子の闇という言葉も、愛妻

を思う煩惱ぼんのうの闇に比べて薄いものらしくこの人には見えた。

源氏が須磨へ移った初めの記事の中に筆者は書き洩もらしてしまつたが伊勢いせの御息所みやすどころのほうへも源氏は使いを出したのであつた。あちからからもまたはるばると文ふみを持って使いがよこされた。熱情的に書かれた手紙で、典雅な筆つきと見えた。

「#ここから1字下げ」

どうしましても現実のことと思われませんような御一隠栖いんせいのことを承りました。あるいはこれもまだ私の暗い心から、夜の夢の続きを見ているのかもしれない。なお幾年もそうした運命の中にあなたがお置かれになることはおそらくなかろうと思われます。それを考えますと、罪の深い私は何時をはともなくこの海の国にさすらえていなければならぬことかと思われます。

「#ここから2字下げ」

うきめかる伊勢をの海人あまを思ひやれもしほ垂たるてふ須磨の浦にて

「#ここから1字下げ」

世の中はどうなるのでしよう。不安な思ひばかりがいたされます。

「#ここから2字下げ」

伊勢島や潮干しほひのかたにあさりても言ふかひなきはわが身なりけり

「#ここで字下げ終わり」

などという長いものである。源氏の手紙に衝動を受けた御息所はあとへあとへと書き続ついで、白い支那しなの紙四、五枚を巻き続けてあ

った。書風も美しかった。愛していた人であったが、その人の過失的な行為を、同情の欠けた心で見えて恨んだりしたことから、御息所も恋をなげうって遠い国へ行ってしまったのであると思うと、源氏は今も心苦しうて、済まない目にあわせた人として御息所を思っているのである。そんな所へ情のある手紙が来たのであったから、使いまでも恋人のゆかりの親しい者に思われて、二、三日滞留させて伊勢の話侍臣たちに問わせたりした。若やかな気持ちのよい侍であった。閑居のことであるから、そんな人もやや近い所でほのかに源氏の風貌ふうぼうに接することもあつて侍は喜びの涙を流していた。伊勢の消息に感動した源氏の書く返事の内容は想像されないこともない。

「#ここから1字下げ」

こうした運命に出逢う日を予知していましたが、どこよりも私はあなたとごいっしょの旅に出してしまうべきだったなどと、つれづれさから癖になりました物思いの中にはそれがよく思われます。心細いのです。

「#ここから2字下げ」

伊勢人の波の上漕ぐ小船せぶねにもうきめは刈らで乗らましものをあまがつむ歎なげきの中にしほたれて何時いつまで須磨の浦に眺ながめんであります。

「#ここから1字下げ」

いつ口ずからお話ができるであろうと思つては毎日同じように悲しんであります。

「#ここで字下げ終わり」

というのである。こんなふうには、どの人へも相手の心の慰むに足るような愛情を書き送っては返事を得る喜びにまた自身を慰めてい
る源氏であつた。花散里はなぢりも悲しい心を書き送つて来た。どれにも個性が見えて、恋人の手紙は源氏を慰めぬものもないが、また物思いの催たねされる種ともなるのである。

「#ここから2字下げ」

荒れまさる軒のしのぶを眺めつつ繁しげくも露のかかる袖かな

「#ここで字下げ終わり」

と歌っている花散里は、高くなつたという雑草のほかには後見しんみをする者のない身の上なのであると源氏は思いやつて、長雨に土塀どべいがところどころ崩れたことも書いてあつたために、京の家司けいしへ命じてやつて、近国にある領地から人夫を呼ばせて花散里の邸やしきの修理をさせた。

尚侍なしのかみは源氏の追放された直接の原因になつた女性であるから、世間からは嘲笑ちやうしやう的に注視され、恋人には遠く離れて、深い歎なげきの中に溺おぼれているのを、大臣は最も愛している娘であつたから憐あわれに思つて、熱心に太后へ取りなしをしたし、帝みかどへもお詫びを申し上げたので、尚侍は公式の女官長であつて、燕寝えんしんに侍する女御にょご、更衣こういが起こした問題ではないから、過失として勅免があればそれでよいということになつた。帝の御一愛寵あいちやうを裏切つて情人を持った点をお憎みになつたのであるが、赦免の宣旨せんじが出て宮中へまたはいることになつても、尚侍の心は源氏の恋しさに満たされていた。七月になつてその事が実現された。非常なお気に入りであつたのであるから、人の

譏りも思召さずおほしめに、お常御殿の宿直所とのいどころにばかり尚侍は置かれていた。お恨みになったり、永久に変わらぬ愛の誓いを仰せられたりする帝の御一風采ふうさいはごりつぱで、優美な方なのであるが、これを飽き足らぬものとは自覚していないが、なお尚侍には源氏ばかりが恋しいというのはもつたいたいない次第である。音楽の合奏を侍臣たちにさせておいでになる時に、帝は尚侍へ、

「あの人がないことは寂しいことだ。私でもそう思うのだから、ほかにはもつと痛切にそう思われる人があるだろう。何の上にも光というものがなくなつた気がする」

と仰せられるのであつた。それからまた、

「院の御遺言にそむいてしまつた。私は死んだあとで罰せられるに違いない」

と涙ぐみながらお言いになるのを聞いて、尚侍は泣かずにいられなかつた。

「人生はつまらないものだという気がしてきて、それとともにもう決して長くは生きていられないように思われる。私がなくなつてしまつた時、あなたはどう思いますか、旅へ人の行った時の別れ以上に悲しんでくれないでは私は失望する。生きている限り愛し合おうという約束をして満足している人たちに、私のあなたを思う愛の深さはわからないだろう。私は来世に行つてまであなたと愛し合いたいのだ」

となつかしい調子で仰せられる、それにはお心の底からあふれるような愛が示されていることであつたから、尚侍の涙はほろほろとこぼれた。

「そら、涙が落ちる、どちらのために」

と帝はお言いになった。

「今まで私に男の子のいないのが寂しい。東宮を院のお言葉どおりに自分の子のように私は考えているのだが、いろいろな人間が間にいて、私の愛が徹底しないから心苦しくてならない」

などとお語りになる。御意志によらない政治を行なう者があって、それを若いお心の弱さはどうなされようもなくして御一煩悶が絶えないらしい。

秋風が須磨の里を吹くころになった。海は少し遠いのであるが、須磨の関も越えるほどの秋の波が立つと行平が歌った波の音が、夜はことに高く響いてきて、堪えがたく寂しいものは謫居の秋であった。居間に近く宿直している少数の者も皆眠っていて、一人の源氏だけがさめて一つ家の四方の風の音を聞いていると、すぐ近くにまで波が押し寄せて来るように思われた。落ちるともない涙にいつか枕は流されるほどになっている。琴を少しばかり弾いてみたが、自身ながらもすぐ聞こえるので、弾きさして、

「#ここから2字下げ」

恋ひわびて泣く音に紛ふ浦波は思ふ方より風や吹くらん

「#ここで字下げ終わり」

と歌っていた。惟光たちは凄惨なこの歌声に目をさましてから、いつか起き上がって訳もなくすすり泣きの声を立てていた。その人たちの心を源氏が思いやるのも悲しかった。自分一人のために、親兄弟も愛人もあって離れがたい故郷に別れて漂泊の人に彼らはなっているのであると思うと、自分の深い物思いに落ちたりしているこ

とは、その上彼らを心細がらせることであろうと源氏は思つて、昼間は皆といつしよに戯談を言つて旅愁を紛らそうとしたり、いろいろの紙を継がせて手習いをしたり、珍しい支那の綾などに絵を描いたりした。その絵を屏風に貼らせてみると非常におもしろかつた。源氏は京にいたころ、風景を描くのに人の話した海陸の好風景を想像して描いたが、写生のできる今日になつて描かれる絵は生き生きとした生命があつて傑作が多かつた。

「現在での大家だといわれる千枝とか、常則とかいう連中を呼び寄せて、ここを密画に描かせたい」

とも人々は言つていた。美しい源氏と暮らしていることを無上の幸福に思つて、四、五人はいつも離れずに付き添つていた。庭の秋草の花のいろいろに咲き乱れた夕方に、海の見える廊のほうへ出てながめている源氏の美しさは、あたりの物が皆一素描の画のような寂しい物であるだけいつそう目に立つて、この世界のものとは思えないのである。柔らかい白の綾に薄紫を重ねて、藍がかった直衣を、帯もゆるくおおように締めた姿で立ち「釈迦牟尼仏弟子」と名のつて経文を暗誦みしている声もきわめて優雅に聞こえた。幾つかの船が唄声を立てながら沖のほうを漕ぎまわつていた。形はほのかで鳥が浮いているほどにしか見えぬ船で心細い気がするのであつた。上を通る一列の雁の声が楫の音によく似ていた。涙を払う源氏の手の色が、掛けた黒木の数珠に引き立つて見える美しさは、故郷の女恋しくなつてゐる青年たちの心を十分に緩和させる力があつた。

「#ここから2字下げ」

初雁は恋しき人のつらなれや旅の空飛ぶ声の悲しき

「#ここで字下げ終わり」

と源氏が言う。良清、

「#ここから2字下げ」

かきつらね昔のことぞ思ほゆる雁はそのよの友ならねども

「#ここで字下げ終わり」

民部大輔惟光、

「#ここから2字下げ」

心から常世を捨てて鳴く雁を雲のよそにも思ひけるかな

「#ここで字下げ終わり」

前右近丞が、

「#ここから1字下げ」

「常世出でて旅の空なるかりがねも列に後れぬほどぞ慰む

「#ここで字下げ終わり」

仲間がなかったらどんなだろうと思います」

と言った。常陸介になった親の任地へも行かずに彼はこちらへ来て
いるのである。煩悶はしているであろうが、いつもはなやかな誇
りを見せて、屈託なくふるまう青年である。明るい月が出て、今日
が中秋の十五夜であることに源氏は気がついた。宮廷の音楽が思い

やられて、どこでもこの月をながめているであろうと思うと、月の顔ばかりが見られるのであった。「二千里外故人心へにせんりぐわいこじんのこころ」と源氏は吟じた。青年たちは例のように涙を流して聞いているのである。

この月を入道の宮が「霧や隔つる」とお言いになった去年の秋が恋しく、それからそれへといろいろなる場合の初恋人への思い出に心が動いて、しまいには声を立てて源氏は泣いた。

「もうよほど更ふけました」

と言う者があっても源氏は寢室へはいろうとししない。

「#ここから2字下げ」

見るほどぞしばし慰むめぐり合はん月の都ははるかなれども

「#ここで字下げ終わり」

その去年の同じ夜に、なつかしい御調子で昔の話をいろいろあそばすふうが院によく似ておいでになった帝も源氏は恋しく思い出ししていた。「恩賜御衣今在此へおんしのぎよいいまここにあり」と口ずさみながら源氏は居間へはいった。恩賜の御衣もそこにあるのである。

「#ここから2字下げ」

憂うれしとのみひとへに物は思ほえで左右にも濡ぬるる袖そでかな

「#ここで字下げ終わり」

とも歌われた。

このころに九州の長官の大貳だいにが上つて来た。大きな勢力を持っていて一門郎党の数が多く、また娘たくさんな大貳でもあったから、婦人たちにだけ船の旅をさせた。そして所々で陸に行く男たちと海の一行とが合流して名所の見物をしながら来たのであるが、どこよりも風景の明媚めいびな須磨の浦に源氏の大將が隠栖いんせいしていられるということを知り、若いお洒落しゃれな年ごろの娘たちは、だれも見ぬ船の中にいながら身なりを気に病んだりした。その中に源氏の情人であった五節ごせちの君は、須磨に上陸ができるのでもなくて哀愁の情に堪えられないものがあつた。源氏の弾ひく琴の音ねが浦風の中に混じつてほかに聞こえて来た時、この寂しい海へと薄倅はっこうな貴人とを考え合わせ、人並みの感情を持つ者は皆泣いた。大貳は源氏へ挨拶あいさつをした。

「はるかな田舎いなかから上つてまいりました私は、京へ着けばまず伺候いたしましたして、あなた様から都のお話を伺わせていただきますことを空想したものでございました。意外な政変のために御一いんせい隠栖いんせいになつております土地を今日通つてまいります。非常にもつたいないことと存じ、悲しいことと思うのでございます。親戚と知人とがもう京からこの辺へ迎えにまいつておりまして、それらの者がうるそうございますから、お目にかかりに出ないのでございますが、またそのうち別に伺わせていただきます」

というのであつて、子の筑前守ちくぜんのかみが使いに行つたのである。源氏が蔵人くらうどに推薦して引き立てた男であつたから、心中に悲しみながらも人目をばかつてすぐに帰ろうとしていた。

「京を出てからは昔懇意にした人たちともなかなか逢あえないことになつていたのに、わざわざ訪ねて来てくれたことを満足に思う」

と源氏は言った。大貳への返答もまたそんなものであつた。筑前

守は泣く泣く帰って、源氏の住居すまいの様子などを報告すると、大弐をはじめとして、京から来ていた迎えの人たちもいつしよに泣いた。五節ごせちの君は人に隠れて源氏へ手紙を送った。

「#ここから2字下げ」

琴の音にひきとめらるる綱手つなてなは縄たゆたふ心君知るらめや

「#ここから1字下げ」

音楽の横好きをお笑いくださいますな。

「#ここで字下げ終わり」

と書かれてあるのを、源氏は微笑しながらながめていた。若い娘のきまり悪そうなところのよく出ている手紙である。

「#ここから2字下げ」

心ありてひくでの綱のためたはば打ち過ぎましや須磨の浦波

「#ここから1字下げ」

漁村の海人あまになつてしまふとは思わなかつたことです。

「#ここで字下げ終わり」

これは源氏の書いた返事である。明石あかしの駅長に詩を残した菅公のように源氏が思われて、五節は親兄弟に別れてもここに残りたいたいと思うほど同情した。

京では月日のたつにしたがつて光源氏のない寂寥せきりょうを多く感じた。陛下もそのお一人であった。まして東宮は常に源氏を恋しく思召おほしめして、人の見ぬ時には泣いておいでになるのを、乳母めのとたちは哀れに拝

見していた。王命婦おうみよつばはその中でもことに複雑な御同情をしているのである。入道の宮は東宮の御地位に動揺をきたすようなことのないかが常に御不安であった。源氏までも失脚してしまった今日では、ただただ心細くのみ思っておいでのになった。源氏の御弟の宮たちそのほか親しかった高官たちは初めのころしきりに源氏と文通をしたものである。人の身にしむ詩歌が取りかわされて、それらの源氏の作が世上にほめられることは非常に太后のお気に召さないことであつた。

「勅勅を受けた人というものは、自由に普通の人らしく生活することができないものなのだ。風流な家に住んで現代を誹謗ひぼうして鹿しかを馬だと言おうとする人間に阿おもねる者がある」

とお言いになって、報復の手の伸びて来ることを迷惑に思う人たちは警戒して、もう消息を近來しなくなつた。二条の院の姫君は時がたてばたつほど、悲しむ度も深くなつていった。東の対にいた女房もこちらへ移された初めは、自尊心の多い彼女たちであるから、たいしたこともなく、ただ源氏が特別に心を惹ひかれているだけの女性であろうと女王を考えていたが、馴なれてきて夫人のなつかしく美しい容姿に、誠実な性格に、暖かい思いやりのある人扱いに敬服して、だれ一人一暇いとまを乞こう者もない。良い家から来ている人たちには夫人も顔を合わせていた。だれよりも源氏が愛している理由がわかつたように彼女たちは思うのであつた。

須磨のほうでは紫の女王むらさきのにょおうとの別居生活がこのまま続いて行くことは堪えうることでないと源氏は思っているのであるが、自分でさえ何たる宿命でこうした生活をするのかと情けない家に、花のような姫君を迎えるという事はあまりに思いやりのないことであるとまた

思い返されもするのである。下男や農民に何かと人の小言こごとを言う事なども居間に近い所で行なわれる時、あまりにもつたいないことであると源氏自身で自身を思うことさえもあつた。近所で時々煙の立つのを、これが海人の塩あまを焼く煙なのであると源氏は長い間思つていたが、それは山荘の後ろの山で柴しばを燻くべている煙であつた。これを聞いた時の作、

「#ここから2字下げ」

山がつの庵いほりに焚たけるしばしばも言問ひ来なむ恋ふる里人

「#ここで字下げ終わり」

冬になって雪の降り荒れる日に灰色の空をながめながら源氏は琴を弾ひいていた。良清よしきよに歌を歌わせて、惟光これみつには笛の役を命じた。細かい手を熱心に源氏が弾き出したので、他の二人は命ぜられたことをやめて琴の音に涙を流していた。漢帝かんていが北夷ほくゐいの国へおつかわしになつた宮女の琵琶びわを弾いてみずから慰めていた時の心持ちはましてどんなに悲しいものであつたであらう、それが現在のこと、自分の愛人などをそうして遠くへやるとしたら、とそんなことを源氏は想像したが、やがてそれが真実のことのように思われて来て、悲しくなつた。源氏は「胡角こかく一声霜後夢へこかくいつせいそうこのゆめ」と王昭君おうしやうくんを歌つた詩の句が口に上つた。月光が明るくて、狭い家は奥の隅々すみずみまで顕あらわに見えた。深夜の空が縁側の上にあつた。もう落ちるのに近い月がすごいほど白いのを見て、「唯是西行不左遷へただこれにしへゆくさせんにあらず」と源氏は歌つた。

「#ここから2字下げ」

何方いつかたの雲路にわれも迷ひなん月の見るらんことも恥はづかし

「#ここで字下げ終わり」

とも言った。例のように源氏は終夜眠れなかった。明け方に千鳥が身にしむ声で鳴いた。

「#ここから2字下げ」

友千鳥ともこ一諸声もろこゑに鳴く暁は一人一寢覚ねざめめの床とこも頼もし

「#ここで字下げ終わり」

だれもまだ起きた影がないので、源氏は何度もこの歌を繰り返して唱えていた。まだ暗い間に手水ぢよつすいを済ませて念誦ねんずをしていることが侍臣たちに新鮮な印象を与えた。この源氏から離れて行く気が起こらないで、仮に京の家へ出かけようとする者もない。

明石あかしの浦は這はつても行けるほどの近さであったから、良清朝臣よしきよあそん

は明石の入道の娘を思い出して手紙を書いて送ったりしたが返書は来なかった。父親の入道から相談したいことがあるからちよつと逢いに来てほしいと言って来た。求婚に応じてくれないことのわかった家を訪問して、失望した顔でそこを出て来る恰好かっこうは馬鹿ばかに見えるだろうと、良清は悪いほうへ解釈して行こうとしない。すばらしく自尊心は強くても、現在の国の長官の一族以外にはだれにも尊敬を払わない地方人の心理を知らない入道は、娘への求婚者を皆門外に追い払う態度を取り続けていたが、源氏が須磨いんせいに隠栖いんせいをしていることを聞いて妻に言った。

「桐壺きりつぼの更衣こういのお生みした光源氏の君が勅勘で須磨に来ていられるのだ。私の娘の運命についてある暗示を受けているのだから、どうかしてこの機会に源氏の君に娘を差し上げたいと思う」

「それはたいへんまちがったお考えですよ。あの方はりっぱな奥様を何人も持っていていらっしって、その上陛下の御愛人をお盗みになったことが問題になって失脚をなすったのでしよう。そんな方が田舎いなか育ちの娘などを眼中にお置きになるものですか」

と妻は言った。入道は腹を立てて、

「あなたに口を出させないよ。私には考えがあるのだ。結婚の用意をしておきなさい。機会を作って明石へ源氏の君をお迎えするから」

と勝手ほうだいなことを言うのにも、風変わりな性格がうかがわれた。娘のためにはまぶしい気がするほどの華奢かしゃな設備のされてある入道の家であつた。

「なぜそうしなければならぬのでしょうか。どんなにごりっぱな方でも娘のはじめての結婚に罪があつて流されて来ていらっしやる方を婿にしようなどと、私はそんな気がしません。それも愛してくださいればよろしゅうございますが、そんなことは想像もされない。戯シゴト談だんにでもそんなことはおっしゃらないでください」

と妻が言うと、入道はくやしがつて、何か口の中でぶつぶつ言つていた。

「罪に問われることは、支那しなでもここでも源氏の君のようなくれた天才的な方には必ずある災厄なのだ、源氏の君は何だと思う、私の叔父おじだつた按察使あせち大納言の娘が母君なのだ。すぐれた女性で、宮仕えに出すと帝王の恩寵おんちゆうが一人に集まつて、それで人の嫉妬しつとを多く

受けて亡なくなられたが、源氏の君が残っておいでになるということは結構なことだ。女という者は皆一桐壺きりつぼの更衣いじいになろうとすべきだ。私が地方に土着した田舎者だといつても、その古い縁故でお近づきは許してくださいさるだろう」

などと入道は言っていた。この娘はすぐれた容貌かみづらを持っているのではないが、優雅な上品な女で、見識の備わっている点などは貴族の娘にも劣らなかつた。境遇をみずから知って、上流の男は自分を眼中にも置かないであろうし、それかといって身分相当な男とは結婚をしようと思わない、長く生きていることになって両親に死に別れたら尼にでも自分はなろう、海へ身を投げてもいいという信念を持っていた。入道は大事がつて年に二度ずつ娘を住吉すみよしの社やしろへ参詣さんけいさせて、神の恩恵を人知れず頼みにしていた。

須磨は日の永ながい春になってつれづれを覚える時間が多くなった上に、去年植えた若木の桜の花が咲き始めたのにも、霞かすんだ空の色にも京が思い出されて、源氏の泣く日が多かった。二月二十幾日である、去年京を出た時に心苦しかった人たちの様子がしきりに知りたくなった。また院の御代みよの最後の桜花の宴の日の父帝、艶えんな東宮時代の御兄陛下のお姿が思われ、源氏の詩をお吟じになったことも恋しく思い出された。

「#ここから2字下げ」

いつとなく大宮人おほみやびとの恋しきに桜かざしし今日も来にけり

「#ここで字下げ終わり」

と源氏は歌った。

源氏が日を暮らし侘びているころ、須磨の謫居へ左大臣家の三位中將が訪ねて来た。現在は参議になっていて、名門の公子でりっぱな人物であるから世間から信頼されていることも格別なのであるが、その人自身は今の社会の空気が気に入らないで、何かのおりことに源氏が恋しくなるあまりに、そのことで罰を受けても自分は悔やまないと決心してにわかには源氏と逢うために京を出て来たのである。親しい友人であつて、しかも長く相見る時を得なかつた二人はたまたま得た会合の最初にまず泣いた。宰相は源氏の山荘が非常に唐風であることに気がついた。絵のような風光の中に、竹を編んだ垣がめぐらされ、石の階段、松の黒木の柱などの用いられてあるのがおもしろかつた。源氏は黄ばんだ薄紅の服の上に、青みのある灰色の狩衣指貫の質素な装いでいた。わざわざ都風を避けた服装もいっそう源氏を美しく引き立てて見せる気がされた。室内の用具も簡単な物ばかりで、起臥する部屋も客の座から残らず見えるのである。碁盤、双六の盤、彈棊の具なども田舎風のそまつにできた物が置かれてあつた。数珠などがさつきまで仏勤めがされていたらしく出ていた。客の饗応に出された膳部にもおもしろい地方色が見えた。漁から帰った海人たちが貝などを届けに寄つたので、源氏は客という座敷の前へその人々を呼んでみることにした。漁村の生活について質問をすると、彼らは経済的に苦しい世渡りをこぼした。小鳥のように多弁にさえずる話も根本になつてゐることは処世難である、われわれも同じことであると貴公子たちは憐んでいた。それぞれに衣服などを与えられた海人たちは生まれてはじめての生きがいを感じたらしかつた。山荘の馬を幾一疋も並べて、それもここから見える倉とか納屋とかいう物から取り出す稻を食わせていたりするのが源氏

にも客にも珍しかった。催馬楽さいばらの飛鳥井あすかいを二人で歌ってから、源氏の不在中の京の話を泣きもし、笑いもしながら、宰相はしだした。若君が何事のあるとも知らずに無邪気でいることが哀れでならないと大臣が始終一歎なげいているという話のされた時、源氏は悲しみに堪えないふうであつた。二人の会話を書き尽くすことはとうていできないことであるから省略する。

終夜眠らずに語って、そして二人で詩も作つた。政府の威厳を無視したとはいふものの、宰相も事は好まないふうで、翌朝はもう別れて行く人になつた。好意がかえつてあとの物思いを作らせると言つてもよい。杯を手にしながら「酔悲泪灑春杯裏へゑひのかなしみのなみだをそそくはるのさかづきのうち」と二人がいつしよに歌つた。供をして来ている者も皆涙を流していた。双方の家司たちの間に惜しまれる別れもあるのである。朝ぼらけの空を行く雁かりの列があつた。源氏は、

「#ここから2字下げ」

故郷ふるさとを何れいつの春か行きて見ん羨あやむましきは帰るかりがね

「#ここで字下げ終わり」

と言つた。宰相は出て行く気がしないで、

「#ここから2字下げ」

飽とほかなくに雁とこよの常世とこよを立ち別れ花の都に道やまどはん

「#ここで字下げ終わり」

と言つて悲しんでいた。宰相は京から携えて来た心をこめた土産^{みやげ}を源氏に贈った。源氏からはかたじけない客を送らせるために言つて、黒馬を贈った。

「妙なものを差し上げるようですが、ここの風の吹いた時に、あなたのそばで嘶^{いなな}くようにと思つうからですよ」

と言つた。珍しいほどすぐれた馬であつた。

「これは形見だと思つていただきたい」

宰相も名高い品になつてゐる笛を一つ置いて行つた。人目に立つて問題になるようなことは双方でしなかつたのである。上つて来た日に帰りを急ぎ立てられる気がして、宰相は顧みばかりしながら座を立てて行くのを、見送るために続いて立つた源氏は悲しそふであつた。

「いつまたお逢いすることができるとしよう。このまま無限にあなたが捨て置かれるようなことはありません」

と宰相は言つた。

「#ここから1字下げ」

「雲近く飛びかふ鶴^{たづ}も空に見よわれは春日の曇りなき身ぞ

「#ここで字下げ終わり」

みずからやましいと思つたことはないのですが、一度こうなつては、昔のりっぱな人でももう一度世に出た例は少ないのですから、私は都というものをぜひまた見たいとも願つていませんよ」

こう源氏は答えて言つのであつた。

「#ここから1字下げ」

「たづかなき雲井に独り音をぞ鳴く翅並べし友を恋ひつつ

「#ここで字下げ終わり」

失礼なまでお親しくさせていたいただいたころのことをもったいないことだと後悔される事が多いのですよ」

と宰相は言いつつ去った。

友情がしばらく慰めたあとの源氏はまた寂しい人になった。

今年は三月の一日に巳の日があつた。

「今日です、お試みなさいませ。不幸な目にあっている者が御禊をすれば必ず効果があるといわれる日でございます」

賢がつて言う者があるので、海の近くへまた一度行ってみたくて思つてもいた源氏は家を出た。ほんの幕のような物を引きまわして飯の御禊場を作り、旅の陰陽師を雇つて源氏は禊いをさせた。船にやや大きい禊いの人形を乗せて流すのを見ても、源氏はこれに似た自身のみじめさを思つた。

「#ここから2字下げ」

知らざりし大海の原に流れ来て一方にやは物は悲しき

「#ここで字下げ終わり」

と歌いながら沙上の座に着く源氏は、こうした明るい所ではまして水ぎわだつて見えた。少し霞んだ空と同じ色をした海がうらうらと凪ぎ渡っていた。果てもない天地をながめていて、源氏は過去未来のことがいろいろと思われた。

「#ここから2字下げ」

八百よろづ神も憐れと思ふらん犯せる罪のそれとなければ

「#ここで字下げ終わり」

と源氏が歌い終わった時に、風が吹き出して空が暗くなってきた。御禊みそぎの式もまだまったく終わっていないが人々は立ち騒いだ。

肱笠雨ひしがさあめというものらしくにわか雨が降ってきてこの上もなくあわただしい。一行は浜べから引き上げようとするのであったが笠を取り寄せる間もない。そんな用意などは初めからされてなかった上に、海の風は何も何も吹き散らす。夢中で家のほうへ走り出すころに、海のほうは蒲団ふとんを拡げひろたように腫れふくながら光っていて、雷鳴と電光が襲うてきた。すぐ上に落ちて来る恐れも感じながら人々はやっと家に着いた。

「こんなことに出あったことはない。風の吹くことはあっても、前から予告的に天気が悪くなるものであるが、こんなににわかにも暴風雨になるとは」

こんなことを言いながら山荘の人々はこの天候を恐ろしがつていたが雷鳴もなおやまない。雨の脚あしの当たる所はどんな所も突き破られるような強雨こつうが降るのである。こうして世界が滅亡するのかと皆が心細がっている時に、源氏は静かに経を読んでいた。日が暮れるころから雷は少し遠ざかったが、風は夜も吹いていた。神仏へ人々が大願を多く立てたその力の顕あらわれがこれであろう。

「もう少し暴風雨が続いたら、浪なみに引かれて海へ行ってしまうに違いない。海嘯つなみというものはにわか起こって人死ひとじにがあるものだ」と

聞いていたが、今日のは雨風が原因になっていてそれとも違うよう
だ」

などと人々は語っていた。夜の明け方になって皆が寝てしまっ
たころ、源氏は少しうとうととしたかと思うと、人間でない姿の者が
来て、

「なぜ王様が召していらっしやるのにあちらへ来ないのか」

と言いながら、源氏を求めするようにしてその辺を歩きまわる夢を
見た。さめた時に源氏は驚きながら、それではあの暴風雨も海の竜
王が美しい人間に心を惹かれて自分に見入ったの仕業であつたと気
がついてみると、恐ろしくてこの家にいることが堪えられなくな
った。

底本：「全訳源氏物語 上巻」角川文庫、角川書店

1971（昭和46）年8月10日改版初版発行

1994（平成6）年12月20日56版発行

このファイルは、古典総合研究所（<http://www.genji.co.jp/>）
で入力されたものを、青空文庫形式にあらためて作成しました。

校正には、2002（平成14）年4月5日71版を使用しました。

入力：上田英代

校正：砂場清隆

2003年7月2日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www>

.aozora.gr.jp)で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

源氏物語

明石

紫式部

與謝野晶子訳

【テキスト中に現れる記号について】

〈 〉：ルビ

（例）侘^{わび}しい

—：ルビの付く文字列の始まりを特定する記号

（例）眞実—垂^{すい}跡^{じやく}の神

「#」：入力者注 主に外字の説明や、傍点の位置の指定

（例）「#地から3字上げ」

「#地から3字上げ」わりなくもわかれがたしとしら玉の涙

「#地から3字上げ」をながす琴のいとかな （晶子）

まだ雨風はやまないし、雷鳴が始終することも同じで幾日かたつた。今は極度に侘^{わび}しい須^す磨^まの人たちであつた。今日までのことも明日からのことも心細いことばかりで、源氏も冷静にはしていられた。どうすればいいであろう、京へ帰ることもまだ免職になつ

たまままで本官に復したわけでもなんでもないのであるから見苦しい結果を生むことになるであろうし、まだもつと深い山のほうへはいってしまふことも波風に威嚇いかくされて恐怖した行為だと人に見られ、後世に誤られることも堪えられないことであるからと源氏は煩悶はんもんしていた。このごろの夢は怪しい者が来て誘おうとする初めの夜に見たのと同じ夢ばかりであった。幾日も雲の切れ目がないような空ばかりをながめて暮らしていると京のことも気がかりになって、自分という者はこうした心細い中で死んで行くのかと源氏は思われるのであるが、首だけでも外へ出すことのできない天気であったから京へ使いの出しようもない。二条の院のほうからその中を人が来た。濡れ鼠ぬねずみになった使いである。雨具で何重にも身を固めているから、途中で行き逢っても人間か何かわからぬ形をした、まず奇怪な者として追い払わなければならぬ下侍に親しみを感ずる点だけでも、自分のみじめな者になったと源氏はみずから思われた。夫人の手紙は、

「#ここから1字下げ」

申しようのない長雨は空までもなくしてしまうのではないかという気がしまして須磨の方角をながめることもできません。

「#ここから2字下げ」

浦風やいかに吹くらん思ひやる袖そでうち濡らし波間なき頃ころ

「#ここで字下げ終わり」

というような身にしむことが数々書かれてある。開封した時からもう源氏の涙は潮時しおどきが来たような勢いで、内から湧わき上がってくる

気がしたものであった。

「京でもこの雨風は天変だと申して、なんらかを暗示するものだと解釈しておられるようでございます。仁王会にんおうえを宮中であそばすようなことも承っております。大官方が参内さんだいもできないのでございますから、政治も雨風のために中止の形でございます」

こんな話を、はかばかしくもなく下士級の頭で理解しているだけのことを言うのであるが、京のことに無関心でありえない源氏は、居間の近くへその男を呼び出しているいろいろな質問を試してみた。

「ただ例のような雨が少しの絶え間もなく降っております、その中に風も時々吹き出すというような日が幾日も続くのでございますから、それで皆様の御心配が始まったものだと思存じます。今度のように地の底までも通るような荒い雷ひよが降ったり、雷鳴の静まらないことはこれまでにないでございます」

などと言う男の表情にも深刻な恐怖の色の見えるのも源氏をより心細くさせた。

こんなことでこの世は滅んでいくのでないかと源氏は思っていたが、その翌日からまた大風が吹いて、海潮が満ち、高く立つ波の音は岩も山も崩くずしてしまふように響いた。雷鳴と電光のさすことはげの烈しくなったことは想像もできないほどである。この家へ雷が落ちそうにも近く鳴った。もう理智りちで物を見る人もなくなっていた。

「私はどんな罪を前生で犯してこうした悲しい目に逢あうのだらう。親たちにも逢えずかわいい妻子の顔も見ずに死なねばならぬとは」

こんなふうに出て歎く者がある。源氏は心を静めて、自分にはこの寂しい海辺で命を落とさねばならぬ罪業つみごころはないわけであると自信するのであるが、ともかくも異常である天候のためにはいろいろ

の幣帛へいはくを神にささげて祈るほかがなかつた。

「住吉すみやしの神、この付近の悪天候をお鎮しずめください。真実一垂跡すいじゃくの神
 でおいでのなるのでしたら慈悲そのものであなたはいらつしやるは
 ずですから」

と源氏は言つて多くの大願を立てた。惟光これみつや良清よしきよらは、自身たち
 の命はともかくも源氏のような人が未曾有みそつな不幸に終わつてしまふ
 ことが大きな悲しみであることから、気を引き立てて、少し人心地ひとこころぢ
 のする者は皆命に代えて源氏を救おうと一所懸命いそけんめいになつた。彼らは
 声を合わせて仏神に祈るのであつた。

「帝王の深宮に育ちたまひ、もろもろの歡樂こゑに驕りたまひしが、絶
 大の愛を心に持ちたまひ、慈悲をあまねく日本国じゆうに垂たれたま
 い、不幸なる者を救いたまへること数を知らず、今何の報いにて風
 波なみの牲にえとなりたまわん。この理を明らかにさせたまへ。罪なくして
 罪に当たり、官位を剥奪はくだつされ、家を離れ、故郷を捨て、朝暮歎なげきに
 沈淪ちんりんしたもう。今またかかる悲しみを見て命の尽きなんとするは何
 事によるか、前生の報いか、この世の犯しか、神、仏、明らかにま
 しまさばこの憂うれいを息やすめたまへ」

住吉の御社のほうへ向いてこう叫ぶ人々はさまざまの願を立てた。
 また竜王をはじめ大海の諸神にも源氏は願を立てた。いよいよ雷鳴
 ははげしくとどろいて源氏の居間に続いた廊へ落雷した。火が燃え
 上がつて廊は焼けていく。人々は心も肝も皆失つたようになってい
 た。後ろのほうの廚その他に使っている建物のほうへ源氏を移転さ
 せ、上下の者が皆いっしょにいて泣く声は一つの大きな音響を作つ
 て雷鳴にも劣らないのである。空は墨を磨つたように黒くなって日
 も暮れた。そのうち風が穏やかになり、雨が小降りになつて星の光

も見えてきた。そうなるとこの人々は源氏の居場所があまりにもつたいたく思われて、寝殿のほうへ席を移そうとしたが、そこも焼け残った建物がすさまじく見え、座敷は多数の人間が逃げまわった時に踏みしだかれてあるし、御簾なども皆風に吹き落とされていた。今夜夜通しに後始末をしてからのことに決めて、皆がそんなことに奔走している時、源氏は心経しんきやうを唱えながら、静かに考えてみるとあわただしい一日であった。月が出てきて海潮の寄せた跡あとが顕あらわにながめられる。遠く退のいてもまだ寄せ返なみしする浪の荒い海へのほうを戸をあけて源氏はながめていた。今日までのこと明日からのことを意識していて、対策を講じ合うに足るような人は近い世界に絶無であると感じた。漁村の住民たちが貴人の居所を気にかけて、集まって来て訳のわからぬ言葉でしゃべり合っているのも礼儀のないことであるが、それを追い払う者すらない。

「あの大風がもうしばらくやまなかつたら、潮はもつと遠くへまで上って、この辺なども形を残してしまい。やはり神様のお助けじゃ」とであった。

「#ここから2字下げ」

海にます神のたすけにかからずば潮やほあひの八百会にさすらへなまし

「#ここで字下げ終わり」

と源氏は口にした。終日風の揉もみ抜いた家にいたのであるから、源氏も疲労して思わず眠った。ひどい場所であったから、横になっ

たのではなく、ただ物によりかかって見る夢に、お亡なくなりになった院がはいっておいでになったかと思うと、すぐそこへお立ちになつて、

「どうしてこんなひどい所にいるか」

こうお言いになりながら、源氏の手を取って引き立てようとあそばされる。

「住吉の神が導いてくださるのについて、早くこの浦を去つてしまふがよい」

と仰せられる。源氏はうれしくて、

「陛下とお別れいたしましたしてからは、いろいろと悲しいことばかりがございますから私はもうこの海岸で死のうかと思ひます」

「とんでもない。これはね、ただおまえが受けるちよつとしたことの報いにすぎないのだ。私は位にいる間に過失もなかつたつもりであつたが、犯した罪があつて、その罪の贖つくいをする間は忙せしくてこの世を顧みる暇がなかつたのだが、おまえが非常に不幸で、悲しんでいるのを見ると堪えられなくて、海の中を来たり、海へを通つたりまつたく困つたがやつとここまで来ることができた。このついでに陛下へ申し上げることがあるから、すぐに京へ行く」

と仰せになつてそのまま行つておしまいになろうとした。源氏は悲しくて、

「私もお供してまいります」

と泣き入つて、父帝のお顔を見上げようとした時に、人は見えないうで、月の顔だけがきらきらとして前にあつた。源氏は夢とは思われないで、まだ名残なごりがそこらに漂つていようように思われた。空の雲が身にしむように動いてもいるのである。長い間夢の中で見ること

もできなかつた恋しい父帝をしばらくだけではあつたが明瞭めいりょうに見ることのできた、その顔が面影に見えて、自分がこんなふう不幸の底に落ちて、生命いのちも危うくなつたのを、助けるために遠い世界からおいでになつたのであろうと思うと、よくあの騒ぎがあつたことであると、こんなことを源氏は思うようになった。なんとなく力がついてきた。その時は胸がはつとした思いでいっぱいになって、現実の悲しいことも皆忘れていたが、夢の中でももう少しお話をすればよかつたと飽き足らぬ気のする源氏は、もう一度続きの夢が見られるかとわざわざ寝入ろうとしたが、眠りえないままで夜明けになつた。

渚なぎさのほうに小さな船を寄せて、二、三人が源氏の家のほうへ歩いて来た。だれかと山荘の者が問うてみると、明石あかしの浦から前播磨守入道が船で訪ねて来ていて、その使いとして来た者であつた。

「源少納言げんさんがいられましたら、お目にかかつて、お訪ねいたしました理由を申し上げます」

と使いは入道の言葉を述べた。驚いていた良清よしきよは、
「入道は播磨での知人で、ずっと以前から知っておりますが、私との間には双方で感情の害されていることがあつて、格別くわくべつに交際じょうさいをしなくなつております。それが風波の害のあつた際に何を言つて来たのでしょうか」

と言つて訳がわからないふうであつた。源氏は昨夜の夢のことが胸中にあつて、

「早く逢あつてやれ」

と言つたので、良清よしきよは船へ行って入道に面会した。あんなにはげしい天気のとでどうして船が出されたのであろうと良清はまず不

思議に思った。

「この月一日の夜に見ました夢で異形の者からお告げを受けたので、信じがたいこととは思いましたが、十三日が来れば明瞭になる、船の仕度をしておいて、必ず雨風がやんだら須磨の源氏の君の住居へ行けというようなお告げがありましたから、試みに船の用意をして待っていますと、たいへんな雨風でしょう、そして雷でしょう、支那などでも夢の告げを信じてそれで国難を救うことができたりした例もあるのですから、こちら様ではお信じにならなくても、示しのあつた十三日にはこちらへ伺つてお話だけは申し上げようと思ひまして、船を出してみますと、特別なような風が細く、私の船だけを吹き送つてくれますような風でこちらへ着きましたが、やはり神様の御案内だったと思います。何かこちらでも神の告げというようなことがなかったでしようか、と申すことを失礼ですがあなたからお取り次ぎくださいませんか」

と入道は言うのである。良清はそつと源氏へこのことを伝えた。

源氏は夢も現実も静かでなく、何かの暗示らしい点の多かつたことを思つて、世間の譏りなどばかりを気にかけて神の冥助にそむくことをすれば、またこれ以上の苦しみを見る日が来るであろう、人間を怒らせることすら結果は相当に恐ろしいのである、気の進まぬことも自分より年長者であつたり、上の地位にいる人の言葉には随うべきである。退いて咎なしと昔の賢人も言った、あくまで謙遜であるべきである。もう自分は生命の危いほどの目を幾つも見せられた、臆病であつたと言われることを不名誉だと考える必要もない。夢の中でも父帝は住吉の神のことを仰せられたのであるから、疑うことは一つも残っていないと思つて、源氏は明石へ居を移す決心をして、

入道へ返辞を伝えさせた。

「知るべのない所へ来まして、いろいろな災厄さいやくにあつていまして、京のほうからは見舞いを言い送つてくれる者もありませんから、ただ大空の月日だけを昔一馴染なじみのものと思つてながめているのですが、今日船を私のために寄せてくださつてありがとうございます。明石には私の隠栖いんせいに適した場所があるでしょうか」

入道は申し入れの受けられたことを非常によるこんで、恐縮の意を表してきた。ともかく夜が明けきらぬうちに船へお乗りになるがよいということになつて、例の四、五人だけが源氏を護まもつて乗船した。入道の話のような清い涼しい風が吹いて来て、船は飛ぶように明石へ着いた。それはほんの短い時間のことであつたが不思議な海上の気であつた。

明石の浦の風光は、源氏がかねて聞いていたように美しかった。

ただ須磨に比べて住む人間の多いことだけが源氏の本意に反したことのようなのである。入道の持つてゐる土地は広くて、海岸のほうにも、山手のほうにも大きな邸宅があつた。渚なぎさには風流な小亭こていが作つてあり、山手のほうには、溪流けいりゅうに沿つた場所に、入道がこもつて後世ごせの祈りをする三昧堂さんまいどうがあつて、老後のために蓄積してある財物のための倉庫町もある。高潮を恐れてこのごろは娘その他の家族は山手の家のほうに移らせてあつたから、浜のほうの本邸に源氏一行は気楽に住んでいることができるのであつた。船から車に乗り移るころにようやく朝日が上つて、ほのかに見ることのできた源氏の美貌みほづに入道は老いを忘れることもでき、命も延びる気がした。満面に笑えみを見せてまず住吉の神をはるかに拝んだ。月と日を掌てのひらの中に得たような喜びをして、入道が源氏を大事がるのはもつともなことである。

おのずから風景の明媚な土地に、林泉の美が巧みに加えられた庭が座敷の周囲にあつた。入り江の水の姿の趣などは想像力の乏しい画家には描けないであろうと思われた。須磨の家に比べるとここは非常に明るくて朗らかであつた。座敷の中の設備にも華奢が尽くされてあつた。生活ぶりは都の大貴族と少しも変わっていないのである。それよりもまだ派手なところが見えないでもない。

明石へ移つて来た初めの落ち着かぬ心が少しなおつてから、源氏は京へ手紙を書いた。

「こんなことになるうとは知らずに来て、ここで死ぬ運命だつた」などと言つて、悲しんでいた京の使いが須磨にまだいたのを呼んで、過分な物を報酬に与えた上で、京でするいろいろの用が命ぜられた。頼みつけの祈りの僧たちや寺々へはこの間からのが言いやられ、新たな祈りが依頼されたのである。私人には入道の宮へだけ、稀有にして命をまつとうした須磨の生活の終わりを源氏はお知らせした。二条の院の憐れな手紙の返事は一気に書かれずに、一章を書いては泣き一章を書いては涙を拭きして書いている様子にも源氏がその人を思う深さが見られるのであつた。

「#ここから1字下げ」

あとへあとへと悲しいことが起こつてきて、もう苦しい経験はし尽くしたような私ですからしきりに出家したい心も湧きますが、鏡を見てもとお言いになつたあなたの面影が目を離れないのですから、あなたに再会をしないでは、それを実行することもできません。何の苦しみよりも私にはあなたと離れている苦痛が最もつらいことと思われます。あなたにまた逢うことができれば、ほかのいとわしいことは皆忍んでいこうと思ひます。

「#ここから2字下げ」

はるかにも思ひやるかな知らざりし浦より遠をちに浦づたひして

「#ここから1字下げ」

まだ夢の続きで、明石の浦にまで来ているような気がしてなりません。こんな時に書く手紙はまちがったこともあるでしょうが許してください。

「#ここで字下げ終わり」

正しくは書かれずに乱れ書きになっているような美しい手紙を、横から見ている、源氏が二条の院の夫人を愛する深さを惟光これみつたちは思った。そうした人たちもわが家への音信をこの使いへ託した。あの晴れ間もないようだった天気は名残なごりなく晴れて、明石の浦の空は澄み返っていた。ここの漁業をする人たちは得意そうだった。須磨は寂しく静かで、漁師の家もまばらにしかなかったのである。最初ここへ来た時にはそれと変わった漁村のにぎやかに見えるのを、いとわしく思った源氏も、ここにはまた特殊ないろいろのよさのあるのが、発見されていって慰んでいた。

主人あるじの入道は信仰生活をする精神的な人物で、俗気ぞっけのない愛すべき男であるが、溺愛できあいする一人娘のことでは、源氏の迷惑に思うことを知らずに、注意を引こうとする言葉もおりおり洩もらすのである。

源氏もかねて興味を持って噂うわさを聞いていた女であったから、こんな意外な土地へ来ることになったのは、その人との前生の縁に引き寄せられているのではないかとも思うことはあるが、こうした境遇にいる間は仏勤め以外のことに心をつかうまい。京みやこの女王にょおうに聞かれて

もやましくない生活をしているのとは違つて、そうなれば奮つてきたことも皆一嘘にとられるのが恥ずかしいと思つて、入道の娘に求婚的な態度をとるようなことは絶対にしなかつた。何かのことに触れては平凡な娘ではなさそうであると心の動いて行くことはないのではなかつた。源氏のいる所へは入道自身すら遠慮をしてあまり近づいて来ない。ずっと離れた仮屋建てのほうに詰めきつていた。心の中では美しい源氏を始終見ていたくてならないのである。ぜひ希望することを実現させたいと思つて、いよいよ仏神を念じていた。年は六十くらいであるがきれいな老人で、仏勤めに痩せて、もとの身柄のよいせいであるか、頑固な、そしてまた老いぼけたようなところもありながら、古典的な趣味がわかつていて感じはきわめてよい。素養も相当にあることが何かの場合に見えるので、若い時に見聞したことを語らせて聞くことで源氏につれづれさも紛れることがあつた。昔から公人として、私人として少しの閑暇もない生活をしてきた源氏であつたから、古い時代にあつた実話などをぼつぼつと少しずつ話してくれる老人のあることは珍重すべきであると思つた。この人に逢わなかつたら歴史の裏面にあつたようなことはわからないでしまつたかもしれないとまでおもしろく思われることも話の中にはあつた。こんなふうで入道は源氏に親しく扱われているのであるが、この気高い貴人に対しては、以前はあんなに独り決めをしていた入道ではあつても、無遠慮に娘の婿になつてほしいなどとは言い出せないのを、自身で齒がゆく思つては妻と二人で歎いていた。娘自身も並み並みの男さえも見ることの稀な田舎に育つて、源氏を際見した時から、こんな美貌を持つ人もこの世にはいるのであつたかと驚歎はしたが、それによつていよいよ自身とその人との懸隔を明

瞭に悟ることになって、恋愛の対象などにすべきでないと思つていた。親たちが熱心にその成立を祈つて見聞きしては、不似合いなことを思うものであると見ているのであるが、それとともに低い身のほどの悲しみを覚え始めた。

四月になった。衣がえの衣服、美しい夏の帳とほじなどを入道は自家で調製した。よけいなことをするものであるとも源氏は思うのであるが、入道の思い上がった人品に対しては何とも言えなかつた。京からも始終そうした品物が届けられるのである。のどかな初夏の夕月に海上が広く明るく見渡される所において、源氏はこれを二条の院の月夜の池のように思われた。恋しい紫にちおうの女王にちおうがいるはずでいてその人の影すらもない。ただ目の前にあるのは淡路あわじの島であつた。「泡あわとはるかに見し月の」などと源氏は口ずさんでいた。

「#ここから2字下げ」

泡と見る淡路の島のあはれさへ残るくまなく澄める夜の月

「#ここで字下げ終わり」

と歌つてから、源氏は久しく触れなかつた琴を袋から出して、はかないふうに弾ひいていた。惟光これみつたちも源氏の心中を察して悲しんでいた。源氏は「広陵ひろちやう」という曲を細やかに弾いているのであつた。山手の家のほうへも松風と波の音に混じつて聞こえてくる琴の音に若い女性たちは身にしむ思いを味わつたことであろうと思われる。名手の弾く琴も何も聞き分けえられそうにない土地の老人たちも、思わず外へとび出して来て浜風を引き歩いた。入道も供養法を修していたが、中止することにして、急いで源氏の居間へ来た。

「私は捨てた世の中がまた恋しくなるのではないかと思われますほど、あなた様の琴の音で昔が思い出されます。また死後に参りたいと願っております世界もこんなのではないかという気もいたされる夜でございます」

入道は泣く泣くほめたたえていた。源氏自身も心に、おりおりの宮中の音楽の催し、その時のだれの琴、だれの笛、歌手を勤めた人の歌いぶり、いろいろ時々につけて自身の芸のもてはやされたこと、帝をはじめとして音楽の天才として周囲から自身に尊敬の寄せられたことなどについての追憶がこもこも起こってきて、今日は見がたい他の人も、不運な自身の今も深く思えば夢のような気ばかりがして、深刻な愁いを感じながら弾いているのであったから、すごい音楽といってよいものであった。老人は涙を流しながら、山手の家から琵琶と十三絃の琴を取り寄せて、入道は琵琶法師然とした姿で、おもしろくて珍しい手を一つ二つ弾いた。十三絃を源氏の前に置くと源氏はそれも少し弾いた。また入道は敬服してしまった。あまり上手がする音楽でなくても場所場所で感じ深く思われることの多いものであるから、これははるかに広い月夜の海を前にして春秋の花一紅葉の盛りに劣らないいろいろの木々の若葉がそこに盛り上がっていて、そのまた陰影の地に落ちたところなどに水鶏が戸をたたく音に似た声で鳴いているのもおもしろい庭も控えたこうした所で、優秀な楽器に対していることに源氏は興味を覚えて、

「この十三絃という物は、女が柔らかみをもってあまり定まらないふうに弾いたのが、おもしろくていいのです」

などと言っていた。源氏の意はただおおまかに女ということであったが、入道は訳もなくうれしい言葉を聞きつけたように、笑みな

がら言う、

「あなた様があそばす以上におもしろい音を出しうるものがどこにございましょう。私は延喜の聖帝から伝わりまして三代目の芸を継いだ者でございますが、不運な私は俗界のこととともに音楽もいったんは捨ててしまったのでございしましたが、憂鬱な気分になっております時などに時々弾いておりますのを、聞き覚えて弾きます子供が、どうしたのでございませるか私の祖父の親王によく似た音を出します。それは法師の僻耳で、松風の音をそう感じているのかもしれませんが、一度お聞きに入りたいものでございます」

興奮して慄えている入道は涙もこぼしているようである。

「松風が邪魔をしそうな所で、よくそんなにお稽古ができたものですね、うらやましいことですよ」

源氏は琴を前へ押しやりながらまた言葉を続けた。

「不思議に昔から十三絃の琴には女の名手が多いようです。嵯峨帝のお伝えで女五の宮が名人でおありになったそうですが、その芸の系統は取り立てて続いていると思われ人が見受けられない。現在の上手というのは、ただちよつとその場きりな巧みさだけしかないようですが、ほんとうの上手がこんな所に隠されているとはおもしろいことですね。ぜひお嬢さんのを聞かせていただきたいものです」

「お聞きくださいませのに何の御遠慮もいることではございません。おそばへお召しになりましたも済むことでございます。潯陽江では商人のためにも名曲をかなでる人があったのでございますから。そのまた琵琶と申す物はやっかいなものでございまして、昔にもあまり琵琶の名人という者はなかったようでございますが、これも宅の

娘はかなりすらすらと弾きこなします。品のよい手筋が見えるのでございます。どうしてその域に達しましたか。娘のそうした芸をただ荒い波の音が合奏してくるばかりの所へ置きますことは私として悲しいことに違いございませんが、不快なことのあつたりいたしません節にはそれを聞いて心の慰めにいたすこともございます」

音楽通の自信があるような入道の言葉を、源氏はおもしろく思つて、今度は十三絃を入道に与えて弾かせた。実際入道は玄人らしく弾く。現代では聞けないような手も出てきた。弾く指の運びに唐風が多く混じっているのである。左手でおさえ出す音などはことに深く出される。ここは伊勢の海ではないが「清き渚に貝や拾はん」という催馬楽を美音の者に歌わせて、源氏自身も時々拍子を取り、声を添えることがあると、入道は琴を弾きながらそれをほめていた。珍しいふうに作られた菓子も席上に出て、人々には酒も勧められるのであつたから、だれの旅愁も今夜は紛れてしまいそうであつた。夜がふけて浜の風が涼しくなった。落ちようとすする月が明るくなつて、また静かな時に、入道は過去から現在までの身の上話をしだした。明石へ来たところに苦勞のあつたこと、出家を遂げた経路などを語る。娘のことも問はず語りにする。源氏はおかしくもあるが、さすがに身にしむ節もあるのであつた。

「申し上げにくいことではございますが、あなた様が思いがけなくこの土地へ、仮にもせよ移つておいでになることになりましたのは、もしかいたしますと、長年の間老いた法師がお祈りいたしてあります神や仏が憐みを一家におかけくださいまして、それでしばらくこの僻地へあなた様がおいでになつたのではないかと思われます。その理由は住吉の神をお頼み申すことになりました十八年になるので

ございます。女の子の小さい時から私は特別なお願いを起こしまして、毎年の春秋に子供を住吉へ参詣さんけいさせることにいたしております。また昼夜に六回の仏前のお勤めをいたしますのにも自分の極楽往生はさしおいて私はただこの子によい配偶者を与えたまえと祈っております。私自身は前生の因縁が悪くて、こんな地方人に成り下がっております。親は大臣にもなった人でございます。自分はこの地位に甘んじていましても子はまたこれに準じたほどの者にしなければなりませんでは、孫そん、曾孫そうそんの末は何になることであろうと悲しんでおりましたが、この娘は小さい時から親に希望を持たせてくれました。どうかして京の貴人に娶めとつていただきたいと思います心から、私どもと同じ階級の者の間に反感を買い、敵を作りましたし、つらい目にもあわされましたが、私はそんなことを何とも思っておりません。命のある限りは微力でも親が保護をしよう、結婚をさせないままで親が死ねば海へでも身を投げてしまえと私は遺言がしております」

などと書き尽くせないほどのことを泣く泣く言うのであった。源氏も涙ぐみながら聞いていた。

「冤罪えんざいのために、思いも寄らぬ国へ漂泊さまよつて来ていますことを、前生に犯したどんな罪によってであるかとわからなく思っておりますが、今晚のお話で考え合わせますと、深い因縁によってのことだったとはじめて気がつかれます。なぜ明瞭にわかっておいでになったあなたが早く言ってくださらなかったのでしょうか。京を出ました時から私はもう無常の世が悲しくて、信仰のこと以外には何も思わずに時を送っていました。いつかそれが習慣になって、若い男らしい望みも何もなくなっております。今お話のようなお嬢さんの

いられるということだけは聞いていましたが、罪人にされている私を不吉にお思いになるだろうと思ひまして希望もかけなかつたのですが、それではお許しくださるのですね、心細い独り住みの心が慰められることでしょう」

などと源氏の言ってくれるのを入道は非常に喜んでいた。

「#ここから1字下げ」

「ひとり寝は君も知りぬやつれづれと思ひあかしのうら寂しさを

「#ここで字下げ終わり」

私はまた長い間口へ出してお願ひすることができませんで悶々としておりました」

こう言うのに身は慄わせているが、さすがに上品なところはあつた。

「寂しいと言ってもあなたはもう法師生活に慣れていらっしやるのですから」

それから、

「#ここから2字下げ」

旅衣うら悲しさにあかしかね草の枕は夢も結ばず

「#ここで字下げ終わり」

戯談まじりに言う、源氏にはまた平生入道の知らない愛嬌が見えた。入道はなおいろいろと娘について言っていたが、読者はうるさいであろうから省いておく。まちがって書けばいっそう非常識な入

道に見えるであろうから。

やっと思いがかなった気がして、涼しい心に入道はなっていた。その翌日の昼ごろに源氏は山手の家へ手紙を持たせてやることにした。ある見識をもつ娘らしい、かえってこんなところに意外なすぐれた女がいるのかもしれないからと思つて、心づかいをしながら手紙を書いた。朝鮮紙の胡桃色くるみのものへきれいな字で書いた。

「#ここから2字下げ」

遠近をちもしらぬ雲井なに眺めわびかすめし宿しづの梢えをぞとふ

「#ここから1字下げ」

思うには。(思ふには忍ぶることぞ負けにける色に出でじと思ひしものを)

「#ここで字下げ終わり」

こんなものであったようである。人知れずこの音信を待つために山手の家へ来ていた入道は、予期どおりに送られた手紙の使いを大騒ぎしてもてなした。娘は返事を容易に書かなかつた。娘の居間へはいつて行って勧めても娘は父の言葉を聞き入れない。返事を書くのを恥ずかしくきまり悪く思われるのといっしょに、源氏の身分、自己の身分の比較される悲しみを心に持つて、気分が悪いと言つて横になつてしまった。これ以上勧められなくなつて入道は自身で返事を書いた。

「#ここから1字下げ」

もつたいないお手紙を得ましたことで、過分な幸福をどう処置してよいかわからぬふうでございます。

それをこんなふうには私は見るのでございます。

「#ここから2字下げ」

眺むらん同じ雲井を眺むるは思ひも同じ思ひなるらん

「#ここから1字下げ」

だろうと私には思われます。柄にもない風流気を私の出しましたことをお許しください。

「#ここで字下げ終わり」

とあった。檀紙に古風ではあるが書き方に一つの風格のある字で書かれてあった。なるほど風流気を出したものであると源氏は入道
を思い、返事を書かぬ娘には軽い反感が起こった。使いはたいした
贈り物を得て来たのである。翌日また源氏は書いた。

「#ここから1字下げ」

代筆のお返事などは必要がありません。

「#ここで字下げ終わり」

と書いて、

「#ここから2字下げ」

いぶせくも心に物を思ふかなやよいかにと問ふ人もなみ

「#ここから1字下げ」

言うことを許されないのですから。

「#ここで字下げ終わり」

今度のは柔らかい薄様へはなやかに書いてやった。若い女がこれ

を不感覚に見てしまったと思われるのは残念であるが、その人は尊敬してもつりあわぬ女であることを痛切に覚える自分を、さも相手らしく認めて手紙の送られることに涙ぐまれて返事を書く気に娘はならないのを、入道に責められて、香のにおいの沁しんだ紫の紙に、字を濃く淡うすくして紛らすようにして娘は書いた。

「#ここから2字下げ」

思ふらん心のほどややよいかにまだ見ぬ人の聞きか悩まん

「#ここで字下げ終わり」

手も書き方も京の貴女きじよにあまり劣らないほど上手うすであった。こんな女の手紙を見ていると京の生活が思い出されて源氏の心は楽しかったが、続いて毎日手紙をやることも人目がうるさかったから、二、三日置きくらいに、寂しい夕方とか、物哀れな気のする夜明けとかに書いてはそつと送っていた。あちらからも返事は来た。相手をするに不足のない思い上がった娘であることがわかってきて、源氏の心は自然一惹ひかれていくのであるが、良清よしきよが自身の縄張なわばりの中であるように言っていた女であったから、今眼前横取りする形になることは彼にかわいそうであるとなお躊躇ちゆうじゆはされた。あちらから積極的な態度をとってくれば良清への責任も少なくなるわけであるからと、そんなことも源氏は期待していたが女のほうは貴女と言われる階級の女以上に思い上がった性質であったから、自分を卑しくして源氏に接近しようなどとは夢にも思わないのである。結局どちらが負けるかわからない。何ほど遠くなってもはいないのであるが、ともかくも須磨の関が中にあることになってからは、京の女王がいつそう

恋しくて、どうすればいいことであろう、短期間の別れであるとも思つて捨てて来たことが残念で、そつとこへ迎えることを実現させてみようかと時々思うのではあるが、しかしもうこの境遇に置かれていたことも先の長いことと思われぬ今になって、世間体のよろしくないことはやはり忍ぶほうがよいのであるとして、源氏はしいて恋しさをおさえていた。

この年は日本に天変地異ともいうべきことがいくつも現われてきた。三月十三日の雷雨の烈しかった夜、帝の御夢に先帝が清涼殿の階段の所へお立ちになつて、非常に御機嫌の悪い顔つきでおにらみになつたので、帝がかしこまつておいでになると、先帝からはいろいろの仰せがあつた。それは多く源氏のことと申されたい。おさめになつたあとで帝は恐ろしく思召した。また御子として、他界におわしましてなお御心労を負わせられることが堪えられないことであると悲しく思召した。太后へお話しになると、

「雨などが降つて、天氣の荒れている夜などというものは、平生神經を悩ましていることが悪夢にもなつて見えるものですから、それに動かされたと外へ見えるようなことはなさらぬほうがいい。軽々しく思われます」

と母君は申されるのであつた。おにらみになる父帝の目と視線をお合わせになつたためか、帝は眼病におかかりになつて重くお煩いになることになつた。御謹慎的な精進を宮中でもあそばすし、太后の宮でもしておいでになつた。また太政大臣が突然一亡くなつた。もう高齢であつたから不思議でもないのであるが、そのことから不穏な空氣が世上に醸されていくことにもなつたし、太后も何ということなしに寝ついておしまいになつて、長く御一平癒のことがない。

御衰弱が進んでいくことで帝は御心痛をあそばされた。

「私はやはり源氏の君が犯した罪もないのに、官位を剥奪はくたつされているようなことは、われわれの上に報いてくることだろうと思います。どうしても本官に復させてやらねばなりません」

このことをたびたび帝は太后へ仰せになるのであった。

「それは世間の非難を招くことですよ。罪を恐れて都を出て行った人を、三年もたたないでお許しになっては天下の識者が何と云うでしょう」

などとお言いになって、太后はあくまでも源氏の復職に賛成をあそばさないままで月日がたち、帝と太后の御病気は依然としておよろしくないのであった。

明石ではまた秋の浦風の烈はげしく吹く季節になって、源氏もしみじみ独ひとりず棲みの寂しさを感じるようであった。入道へ娘のことをおりおり言い出す源氏であった。

「目だたぬようにしてこちらの邸やしきへよこさせてはどうですか」

こんなふうに言っていて、自分から娘の住居すまいへ通って行くことなどはあるまじいことのように思っていた。女にはまたそうしたことのできない自尊心があった。田舎いなかの並み並みの家の娘は、仮に来て住んでいる京の人が誘惑すれば、そのまま軽率に情人にもなってしまうのであるが、自身の人格が尊重されてかかったことではないのであるから、そのあとで一生物思いをする女になるようなことはいやである。不つりあいの結婚をありがたいことのように思って、成り立たせようと心配している親たちも、自分が娘でいる間はいろいろな空想も作れていいわけなのであるが、そうなった時から親たちは別なつらい苦しみをするに違いない。源氏が明石に滞留している

間だけ、自分は手紙を書きかわす女として許されるということがほんとうの幸福である。長い間一噂ひしやうだけを聞いていて、いつの日にそうした方を隙見すきみすることができるだろうと、はるかなことに思っていた方が思いがけなくこの土地へおいでになって、隙見ではあつたがお顔を見ることができたし、有名な琴の音を聞くこともかない、日常の御様子も詳しく聞くことができている、その上自分へお心をお語りになるような手紙も来る。もうこれ以上を自分は望みたくない。こんな田舎に生まれた娘にこれだけの幸いのあつたのは確かに果報のあつた自分と思わなければならないと思つていたのであつて、源氏の情人になる夢などは見ていないのである。親たちは長い間祈つたことの事実になろうとする時になつたことを知りながら、結婚をさせて源氏の愛の得られなかつた時はどうだろうと、悲惨な結果も想像されて、どなりつばな方であつても、その時は恨めしいことであろうし、悲しいことでもあろう、目に見ることもない仏とか神とかいうものにはかり信頼していたが、それは源氏の心持ちも娘の運命も考えに入れずにしていたことであつたなどと、今になつて二の足が踏まれ、それについてする煩悶はんもんもはなはだしかった。源氏は、

「この秋の季節のうちにお嬢さんの音楽を聞かせてほしいものです。前から期待していたのですから」

などとよく入道に言つていた。入道はそつと婚姻の吉日を曆で調べさせて、まだ心の決まらないように言つてゐる妻を無視して、弟子でにも言わずに自身でいろいと仕度したくをしていた。そうして娘のいる家の設備を美しく整えた。十三日の月がはなやかに上つたところに、ただ「あたら夜の」（月と花とを同じくば心知られん人に見せばや）

とだけ書いた迎えの手紙を浜の館やかたの源氏の所へ持たせてやった。風流がりの男であると思ひながら源氏は直衣のうしをきれいに着かえて、夜がふけてから出かけた。よい車も用意されてあつたが、目だたせぬために馬で行くのである。惟光これみつなどばかりの一人二人の供をつれただけである。山手の家はやや遠く離れていた。途中の入り江の月夜の景色けしきが美しい。紫の女王むすめが源氏の心に恋しかつた。この馬に乗つたままで京へ行つてしまいたい気がした。

「#ここから2字下げ」

秋の夜の月毛の駒こまよ我が恋ふる雲井かに駈かけれ時の間も見ん

「#ここで字下げ終わり」

と独言ひとりごとが出た。山手の家は林泉の美が浜の邸やしにまさつていた。浜の館やかたは派手はでに作り、これは幽邃ゆうすいであることを主にしてあつた。若い女のいる所としてはきわめて寂しい。こんな所においては人生のことが皆身にしむことに思えるであろうと源氏は恋人に同情した。三昧さんまい堂どうが近くて、そこで鳴らす鐘の音が松風に響き合つて悲しい。岩にはえた松の形が皆よかつた。植え込みの中にはあらゆる秋の虫が集まつて鳴いているのである。源氏は邸内をしばらくあちらこちらと歩いてみた。娘の住居すまいになつてゐる建物はことによく作られてあつた。月のさし込んだ妻戸が少しばかり開かれてある。その縁へ上がつて、源氏は娘へものを言いかけた。これほどには接近して逢おうとは思わなかつた娘であるから、よそよそしくしか答えない。貴族らしく気どる女である。もつとすぐれた身分の女でも今日までこの女に言い送つてあるほどの熱情を見せれば、皆好意を表するもの

であると過去の経験から教えられている。この女は現在の自分を侮あなごつて見ているのではないかなどと、焦慮の中には、こんなことも源氏は思われた。力で勝つことは初めからの本意でもない、女の心を動かすことができずに帰るのは見苦しいとも思う源氏が追い追いに熱してくる言葉などは、明石の浦でされることが少し場所違いでもつたいなく思われるものであった。几帳きちょうの紐ひもが動いて触れた時に、十三一絃げんの琴の緒おが鳴った。それによつてさつきまで琴などを弾ひいていた若い女の美しい室内の生活ぶりが想像されて、源氏はますます熱していく。

「今音が少ししたようですね。琴だけでも私に聞かせてくださいませんか」

とも源氏は言った。

「#ここから2字下げ」

むつ言を語りあはせん人もがなうき世の夢もなかば覺さむやと明けぬ夜にやがてまどへる心には何いっれを夢と分わきて語らん

「#ここで字下げ終わり」

前のは源氏の歌で、あとのは女の答えたものである。ほのかに言う様子は伊勢いせの御息所みやすどころにそっくり似た人であった。源氏がそこへはいつて来ようなどとは娘の予期しなかつたことであつたから、それが突然なことでもあつて、娘は立つて近い一つの部屋へはいつてしまった。そしてどうしたのか、戸はまたあけられないようにしてしまった。源氏はしいてはいろいろとする気にもなっていないかつた。しかし源氏が躊躇ちゆうじゆしたのはほんの一瞬間のことで、結局は行く所まで

行つてしまつたわけである。女はやや背が高く、気高い様子の受け取れる人であつた。源氏自身の内にたいした衝動も受けていないでこうなつたことも、前生の因縁であらうと思うと、そのことで愛が湧いてくるように思われた。源氏から見て近まさりのした恋と言つてよいのである。平生は苦しくばかり思われる秋の長夜もすぐ明けていく気がした。人に知らせたくないと思う心から、誠意のある約束をした源氏は朝にならぬうちに歸つた。

その翌日は手紙を送るのに以前よりも人目がはばかられる氣もした。源氏の心の鬼からである。入道のほうでも公然のことにはしなくなくて、結婚の第二日の使いも、そのこととして派手に扱うようなことはしなかつた。こんなことにも娘の自尊心は傷つけられたようである。それ以後時々源氏は通つて行つた。少し道程のある所でもあつたから、土地の者の目につくことも思つて間を置くのであるが、女のほうではあらかじめ愁えていたことが事実になつたように取つて、煩悶しているのを見ては親の入道も不安になつて、極樂の願いも忘れたように、仏勤めは怠けて、源氏の君の通つて来ることを大事だと考えている。入道からいえば事が成就しているのであるが、その境地で新しく物思いをしているのが憐れであつた。二条の院の女王にこの噂が伝わつては、恋愛問題では嫉妬する価値のあることでないとかわかつていても、秘密にしておく自分の態度を恨めしがられては苦しくもあり、氣恥ずかしくもあると思つていた源氏が紫夫人をどれほど愛しているかはこれだけでも想像することができるのである。女王も源氏を愛することの深いだけ、他の愛人との關係に不快な色を見せたそのおりおりのことを今思い出して、なぜつまらぬことで恨めしい心にさせたかと、取り返したいくらいにそれ

を後悔している源氏なのである。新しい恋人は得ても女王へ焦こがれて
いる心は慰められるものでもなかったから、平生よりもまた情けの
こもった手紙を源氏は京へ書いたのであるが、奥に今度のことを書
いた。

「#ここから1字下げ」

私は過去の自分のしたことではあるが、あなたを不快にさせたつま
らぬいろいろな事件を思い出しては胸が苦しくなるのですが、それ
だのにまたここでよけいな夢を一つ見ました。この告白でどれだけ
あなたに隔てのない心を持っているかを思ってみてください。「誓
ひしことも」（忘れじと誓ひしことをあやまたば三笠みかさの山の神もこ
とわれ」という歌のように私は信じています。

「#ここで字下げ終わり」

と書いて、また、

「#ここから1字下げ」

何事も、

「#ここから2字下げ」

しほしほと先まづぞ泣かるるかりそめのみるめは海人あまのすさびなれど
も

「#ここで字下げ終わり」

と書き添えた手紙であった。

京の返事は無邪気な可憐かれんなものであったが、それも奥に源氏の告
白による感想が書かれてあった。

「#ここから1字下げ」

お言いにならないではいらつしやれないほど現在のお心を占めていますことをお報らせくださいます承知いたしました。私には新しい恋人に傾倒していらつしやる御様子が昔のいろいろな場合と思ひ合わせて想像することもできます。

「#ここから2字下げ」

うらなくも思ひけるかな契りしを松より波は越えじものぞと

「#ここで字下げ終わり」

おおようではあるがくやしいと思う心も確かにかすめて書かれたものであるのを、源氏は哀れに思った。この手紙を手から離しがたくじつとながめていた。この当座幾日は山手の家へ行く気もしなかった。女は長い途絶えを見て、この予感はずでに初めからあつたことであると歎いて、この親子の間では最後には海へ身を投げればよいという言葉が以前によく言われたものであるが、いよいよそうしたいほどつらく思った。年取つた親たちだけをたよりにして、いつ人並みの娘のような幸福が得られるものとも知れなかつた過去は、今に比べて懊惱おうのうの片はしも知らない自分だった。世の中のことはこんなに苦しいものなのであるうか、恋愛も結婚も処女の時に考えていたより悲しいものであると、女は心に思いながらも源氏には平静なふうを見せて、不快を言うような言動もしない。源氏の愛は月日とともに深くなつていくのであるが、最愛の夫人が一人京に残つていて、今の女の関係をいろいろに想像すれば恨めしい心が動くことであるうと思われる苦しきから、浜の館やかたのほうで一人寝をする夜のほうが多かつた。

源氏はいろいろに絵を描いて、その時々的心を文章にしてつけていった。京の人に訴える気持ちで描いているのである。女王の返辞がこの絵巻から得られる期待で作られているのであった。感傷的な文学および絵画としてすぐれた作品である。どうして心が通じたのか二条の院の女王もものの身にしむ悲しい時々、同じようにいろいろの絵を描いていた。そしてそれに自身の生活を日記のようにして書いていた。この二つの絵巻の内容は興味の多いものに違いない。

春になったが帝に御悩があつて世間も静かでない。当帝の御子は右大臣の女の承香殿の女御の腹に皇子があつた。それはやつとお二つの方であつたから当然東宮へ御位はお譲りになるのであるが、朝廷の御後見をして政務を総括的に見る人物にだれを決めてよいかと帝はお考えになつた末、源氏の君を不運の中に沈淪させておいて、起用しないことは国家の損失であると思召して、太后が御反対になつたにもかかわらず赦免の御沙汰が、源氏へ下ることになつた。去年から太后も物怪のために病んでおいでになり、そのほか天の諭しめいたことがしきりに起こることでもあつたし、祈禱と御一精進で一時およろしかつた御眼疾もまたこのごろお悪くばかりなつていくことに心細く思召して、七月二十幾日に再度一御沙汰があつて、京へ帰ることを源氏は命ぜられた。いずれはそうなることと源氏も期していたのではあるが、無常の人生であるから、それがまたどんな変わったことになるかもしれないと不安がないでもなかつたのに、にわかな宣旨で帰洛のこの決まつたのはうれしいことではあつたが、明石の浦を捨てて出ねばならぬことは相当に源氏を苦しませた。入道も当然であると思ひながらも、胸に蓋がされたほど悲しい気持

ちもするのであったが、源氏が都合よく栄えねば自分のかねての理想は実現されないのであるからと思ひ直した。

その時分は毎夜山手の家へ通う源氏であった。今年の六月ごろから女は妊娠していた。別離の近づくことによつてあやにくなと言つてもよいように源氏は女を深く好きになつた。どこまでも恋の苦から離れられない自分なのであると源氏は煩悶はんもんしていた。女はもとより思い乱れていた。もつともなことである。思いがけぬ旅に京は捨ててもまた帰る日のないことなどは源氏の思わなかつたことであつた。慰める所がそれにはあつた。今度は幸福な都へ帰るのであつて、この土地との縁はこれで終わると見ねばならないと思うと、源氏は物哀れでならなかつた。侍臣たちにも幸運は分かたれていて、だれもおどる心を持っていた。京の迎えの人たちもその日からすぐに下つて来た者が多数にあつて、それらも皆人生が楽しくばかり思われるふうであるのに、主人の入道だけは泣いてばかりいた。そして七月が八月になつた。色の身にしむ秋の空をながめて、自分は今も昔も恋愛のために絶えない苦を負わされる、思い死にもしなければならぬようにと源氏は思ひ悶もたえていた。女との関係を知っている者は、

「反感が起こるよ。例のお癖だね」

と言つて、困つたことだと思つていた。源氏が長い間この関係を秘密にしている、人目を紛らして通つていたことが近ごろになつて人々にわかつたのであつたから、

「女からいえば一生の物思いを背負い込んだようなものだ」

とも言つたりした。少納言がよく話していた女であるともその連中が言つていた時、良清よしきよは少しくやさかつた。

出発が明後日に近づいた夜、いつもよりは早く山手の家へ源氏は出かけた。まだはつきりとは今日までよく見なかった女は、貴女らしい気高い様子が見えて、この身分にふさわしくない端麗さが備わっていた。捨てて行きがたい気がして、源氏はなんらかの形式で京へ迎えようという気になったのであった。そんなふうに出て女を慰めていた。女からもつくづく源氏の見られるのも今夜がはじめてであった。長い苦勞のあとは源氏の顔に瘦せが見えるのであるが、それがまた言いようもなく艶であった。あふれるような愛を持って、涙ぐみながら将来の約束を女にする源氏を見ては、これだけの幸福をうければもうこの上を願わないであきらめることもできるはずであると思われるのであるが、女は源氏が美しければ美しいだけ自身の価値の低さが思われて悲しいのであった。秋風の中で聞く時にこゝろに寂しい波の音がする。塩を焼く煙がうっすり空の前に浮かんでいて、感傷的にならざるをえない風景がそこにはあった。

「#ここから2字下げ」

このたびは立ち別るとも藻塩焼く煙は同じ方になびかん

「#ここで字下げ終わり」

と源氏が言うと、

「#ここから2字下げ」

かきつめて海人の焼く藻の思ひにも今はかひなき恨みだにせじ

「#ここで字下げ終わり」

とだけ言つて、可憐なふうに泣いていて多くは言わないのであるが、源氏に時々答える言葉には情のこまやかさが見えた。源氏が始終聞きたく思つていた琴を今日まで女の弾こうとしなかったことを言つて源氏は恨んだ。

「ではあとであなたに思い出してもらつたために私も弾くことにしよう」

と源氏は、京から持つて来た琴を浜の家へ取りにやつて、すぐれたむずかしい曲の一節を弾いた。深夜の澄んだ気の中であつたから、非常に美しく聞こえた。入道は感動して、娘へも促すように自身で十三絃の琴を几帳の中へ差し入れた。女もとめどなく流れる涙に誘われたように、低い音で弾き出した。きわめて上手である。入道の宮の十三絃の技は現今第一であると思うのは、はなやかにきれいな音で、聞く者の心も朗らかになつて、弾き手の美しさも目に髣髴と描かれる点などが非常な名手と思われる点である。これはあくまでも澄み切つた芸で、真の音楽として批判すれば一段上の技倆があるとも言えると、こんなふうには源氏は思った。源氏のような音楽の天才である人が、はじめて味わう妙味であると思うような手もあつた。飽満するまでには聞かせずにやめてしまったのであるが、源氏はなぜ今日までにしても弾かせなかつたかと残念でならない。熱情をこめた言葉で源氏はいろいろに将来を誓つた。

「この琴はまた二人で合わせて弾く日まで形見にあげておきましよう」
と源氏が琴のことを言うと、女は、

「#ここから2字下げ」

なほざりに頼めおくめる一事をつきせぬ音にやかけてしのばん
「#ここで字下げ終わり」

言つともなくこう言うのを、源氏は恨んで、

「#ここから2字下げ」

逢ふまでのかたみに契る中の緒のしらべはことに変はらざらなん

「#ここで字下げ終わり」

と言つたが、なおこの琴の調子が狂わない間に必ず逢おうとも言
いなだめていた。信頼はしていても目の前の別れがただただ女には
悲しいのである。もっともなことと言わねばならない。

もう出立の朝になって、しかも迎えの人たちもおおぜい来ている
騒ぎの中に、時間と人目を盗んで源氏は女へ書き送った。

「#ここから2字下げ」

うち捨てて立つも悲しき浦波の名残いかにと思ひやるかな

「#ここで字下げ終わり」

返事、

「#ここから2字下げ」

年経つる苦屋も荒れてうき波の帰る方にや身をたぐへまし

「#ここで字下げ終わり」

これは実感そのまま書いただけの歌であるが、手紙をながめている源氏はほろほろと涙をこぼしていた。女の関係を知らない人々はこんな住居も、一年以上いられて別れて行く時は名残があれほど惜しまれるものなのであろうと単純に同情していた。良清などはよほどお気に入った女なのであろうと憎く思った。侍臣たちは心中のうれしさをおさえて、今日限りに立って行く明石の浦との別れに湿っぽい歌を作りもしていたが、それは省いておく。

出立の日の饗応を入道は派手に設けた。全体の人へ饒別にりっぱな旅装――揃いずつを出すこともした。いつの間にこの用意がされたのであるかと驚くばかりであった。源氏の衣服はもとより質を精選して調製してあった。幾個かの衣櫃が列に加わって行くことになっているのである。今日着て行く狩衣の一所に女の歌が、

「#ここから2字下げ」

寄る波にたち重ねたる旅衣しほどけしとや人のいとはん

「#ここで字下げ終わり」

と書かれてあるのを見つけて、立ちぎわではあったが源氏は返事を書いた。

「#ここから2字下げ」

かたみにぞかふべかりける逢ふことの日数へだてん中の衣を

「#ここで字下げ終わり」

というのである。

「せつかくよこしたのだから」

と言いながらそれに着かえた。今まで着ていた衣服は女の所へや
った。思い出させる恋の技巧というものである。自身のおいの沁
んだ着物がどれだけ有効な物であるかを源氏はよく知っていた。

「もう捨てました世の中ですが、今日のお送りのできませんことだ
けは残念です」

などと言っている入道が、両手で涙を隠しているのがかわいそう
であると源氏は思ったが、他の若い人たちの目にはおかしかったに
違いない。

「#ここから1字下げ」

「世をうみにこころしほじむ身となりてなほこの岸をえこそ離れね

「#ここで字下げ終わり」

子供への申しわけにせめて国境まではお供をさせていただきます」

と入道は言ってから、

「出すぎた申し分でございますが、思い出しておやりくださいませ
時がございましたら御音信をただかせてくださいませ」

などと頼んだ。悲しそうで目のあたりの赤くなっている源氏の顔
が美しかった。

「私には当然の義務であることもあるのですから、決して不人情な
者でないとすぐにまたよく思っていたくような日もあるでしょう。
私はただこの家と離れることが名残惜なごじりしくてならない、どうすれば
いいことなんだか」

と言つて、

「#ここから2字下げ」

都一出でし春の歎きに劣らめや年ふる浦を別れぬる秋

「#ここで字下げ終わり」

と涙を袖で源氏は拭っていた。これを見ると入道は気も遠くなくなつたように萎れてしまった。それきり起居もよろよるとするふうである。明石の君の心は悲しみに満たされていた。外へは現わすまいとするのであるが、自身の薄倖であることが悲しみの根本になつていて、捨てて行く恨めしい源氏がまた恋しい面影になつて見えるせつなさは、泣いて僅かに洩らすほかはどうしようもない。母の夫人もなだめかねていた。

「どうしてこんなに苦勞の多い結婚をさせたらう。固意地な方の言いなりに私までもがついて行つたのがまちが이었다」

と夫人は歎息していた。

「うるさい、これきりにあそばされないことも残っているのだから、お考えがあるに違いない。湯でも飲んでまあ落ち着きなさい。ああ苦しいことが起こつてきた」

入道はこう妻と娘に言つたままで、室の片隅に寄つていた。妻と乳母とが口々に入道を批難した。

「お嬢様を御幸福な方にしてお見上げしたいと、どんなに長い間祈つて来たことでしょう。いよいよそれが実現されますことかと存じておりましたのに、お気の毒な御経験をあそばすことになつたのでございませぬ。最初の御結婚で」

こう言つて歎く人たちもかわいそうに思われて、そんなこと、こんなことで入道の心は前よりずっとぼけていった。昼は終日寝ているかと思うと、夜は起き出して行く。

「数珠の置き所も知れなくしてしまった」

と両手を擦り合わせて絶望的な歎息をしているのであった。弟子たちに批難されては月夜に出て御堂の行道をするが池に落ちてしまふ。風流に作った庭の岩角に腰をおろしそこねて怪我をした時には、その痛みのある間だけ煩悶をせずにはいた。

源氏は浪速に船を着けて、そこで被いをした。住吉の神へも無事に帰洛の日の来た報告をして、幾つかの願を實行しようと思ふ意志のあることも使いに言わせた。自身は参詣しなかつた。途中の見物などもせずすぐに京へはいつたのであった。

二条の院へ着いた一行の人々と京にいた人々は夢心地で違い、夢心地で話を取りかわされた。喜び泣きの声も騒がしい二条の院であった。紫夫人も生きがなくなつていた命が、今日まであつて、源氏を迎えたことに満足したことであろうと思われる。美しかった人のさらに完成された姿を二年半の時間のうちに源氏は見ることができたのである。寂しく暮らした間に、あまりに多かつた髪量の少し減つたまでもがこの人をより美しく思わせた。こうしてこの人と永久に住む家へ帰つて来ることができたのであると、源氏の心の落ち着いたのと同時に、またも別離を悲しんだ明石の女がかわいそうに思いやられた。源氏は恋愛の苦にどこまでもつきまとわれる人ようである。源氏は夫人に明石の君のことを話した。女王はどう感じたか、恨みを言うともなしに「身をば思はず」（忘らるる身は思はず誓ひてし人の命の惜しくもあるかな）などとはかなそうに

言っているのを、美しいとも可憐かれんであるとも源氏は思った。見ても見ても見飽かぬこの人と別れ別れにいるようなことは何がさせたかと思うと今さらまた恨めしかった。

間もなく源氏は本官に復した上、権大納言ごんだいなごんも兼ねる辞令を得た。侍臣たちの官位もそれぞれ元にかえされたのである。枯れた木に春の芽が出たようなめでたいことである。

お召しがあつて源氏は参内した。お常御殿に上がると、源氏のさらに美しくなった姿をあれて田舎住いなかまいを長くしておいでになったのかと人は驚いた。前代から宮中に奉仕していて、年を取った女房などは、悲しがつて今さらまた泣き騒いでいた。帝みかども源氏にお逢いになるのを晴れがましく思召おほしめされて、お身なりなどをことにきれいなあそばしてお出ましになった。ずっと御病気でおありになったために、衰弱が御見えになるのであるが、昨今になって陛下の御気分はおよろしかった。しめやかにお話をあそばすうちに夜になった。十五夜の月の美しく静かなもとで昔をお忍びになって帝はお心をしめらせておいでになった。お心細い御様子である。

「音楽をやらせることも近ごろはない。あなたの琴の音もずいぶん長く聞かなんだね」

と仰せられた時、

「#ここから2字下げ」

わたつみに沈みうらぶれひるの子の足立たざりし年は経にけり

「#ここで字下げ終わり」

と源氏が申し上げると、帝は兄君らしい憐あわれみと、君主としての過

失をみずからお認めになる情を優しくお見せになって、

「#ここから2字下げ」

宮ばしらめぐり逢ひける時しあれば別れし春の恨み残すな

「#ここで字下げ終わり」

と仰せられた。艶えんな御様子であった。

源氏は院の御為おんために法華經ほけきょうの八講を行なう準備をさせていた。

東宮にお目にかかると、ずっとお身大きくなっておいでになって、珍しい源氏の出仕をお喜びになるのを、限りもなくおかわいそうに源氏は思った。学問もよくおできになって、御位みくらひにおつきになってもさしつかえはないと思われるほど御一聰明そつめいであることがうかがわれた。少し日がたつて気の落ち着いたころに御訪問した入道の宮でも、感慨無量な御会談があつたはずである。

源氏は明石から送って来た使いに手紙を持たせて帰した。夫人にはばかりながらこまやかな情を女に書き送ったのである。

「#ここから1字下げ」

毎夜毎夜悲しく思っているのですか、

「#ここから2字下げ」

歎きつつ明石の浦に朝霧の立つやと人を思ひやるかな

「#ここで字下げ終わり」

こんな内容であった。

大式だいにの娘の五節ごせちは、一人でしていた心の苦も解消したように喜ん

で、どこからとも言わせない使いを出して、二条の院へ歌を置かせた。

「#ここから2字下げ」

須磨の浦に心を寄せし船人のやがて朽たせる袖を見せばや

「#ここで字下げ終わり」

字は以前よりずっと上手じょうずになっているが、五節に違いないと源氏は思つて返事を送った。

「#ここから2字下げ」

かへりてはかごとやせまし寄せたりし名残なごじに袖の乾ひがたかりしを

「#ここで字下げ終わり」

源氏はずいぶん好きであつた女であるから、誘いかけた手紙を見ては訪ねたい気がしきりにするのであるが、当分は不謹慎なこともできないように思われた。花散里はなちりなどへも手紙を送るだけで、逢いには行こうとしないのであつたから、かえつて京に源氏のいなくなつたころよりも寂しく思つていた。

底本：「全訳源氏物語 上巻」角川文庫、角川書店

1971（昭和46）年8月10日改版初版発行

1994（平成6）年12月20日56版発行

このファイルは、古典総合研究所 (<http://www.genji.co.jp/>) で入力されたものを、青空文庫形式にあらためて作成しました。

校正には、2002（平成14）年4月5日71版を使用しました。

入力：上田英代

校正：鈴木厚司

2003年7月16日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

源氏物語

遷標

紫式部

與謝野晶子訳

【テキスト中に現れる記号について】

〈 〉：ルビ

（例）逢^あはん

ー：ルビの付く文字列の始まりを特定する記号

（例）御一寵愛^{ちちあひ}があつた

「#」：入力者注 主に外字の説明や、傍点の位置の指定

（例）「#地から3字上げ」

「#地から3字上げ」みをつくし逢^あはんと祈るみてぐらもわ

「#地から3字上げ」れのみ神にたてまつるらん（晶子）

須磨^{すま}の夜の源氏の夢にまざまざとお姿をお現わしになって以来、
父帝のことで痛心していた源氏は、帰京ができた今日になってその
御菩提^{ごぼだい}を早く弔^{したく}いたいと仕度^{したく}をしていた。そして十月に法華^{ほけ}經^{ぎやう}の八
講が催されたのである。参列者の多く集まって来ることは昔のそう

した場合のとおりであった。今日も重く煩つておいでになる太后は、その中でも源氏を不運に落としおおせなかつたことを口惜しく思召すのであったが、帝は院の御遺言をお思いになつて、当時も報いが御自身の上へ落ちてくるような恐れをお感じになつたのであるから、このごろはお心持ちがきわめて明るくおなりあそばされた。時々はげしくお煩いになつた御眼疾も快くおなりになつたのであるが、短命でお終わりになるような予感があつてお心細いためによく源氏をお召しになつた。政治についても隔てのない進言をお聞きになることができて、一般の人も源氏の意見が多く採用される宮廷の現状を喜んでいた。

帝は近く御遜位の思召しがあるのであるが、尚侍がたよりないふうに見えるのを憐れに思召した。

「大臣は亡くなるし、大宮も始終お悪いのに、私さえも余命がないような気がしているのだから、だれの保護も受けられないあなたは、孤独になつてどうなるだろうと心配する。初めからあなたの愛はほかの人に向かつていて、私を何とも思っていないのだが、私はだれよりもあなたが好きなのだから、あなたのことばかりがこんな時にも思われる。私よりも優越者がまたあなたと恋愛生活をして、私ほどにはあなたを思つてはくれないことはないかと、私はそんなことまでも考えてあなたのために泣かれるのだ」

帝は泣いておいでになつた。羞恥に頬を染めているためにいつそうはなやかに、愛嬌がこぼれるように見える尚侍も涙を流しているのを御覧になると、どんな罪も許すに余りあるように思召されて、御愛情がそのほうへ傾くばかりであつた。

「なぜあなたに子供ができないのだろう。残念だね。前生の縁の深

い人とあなたの中にはすぐにまたその悦よろこびをする日もあるだろうと思ふとくやしい。それでも気の毒だね、親王を生むのでないから」

こんな未来のことまでも仰せになるので、恥はずかしい心がしまいには悲しくばかりなつた。帝は御容姿もおきれいで、深く尚侍をお愛しになる御心は年月とともに顕著になるのを、尚侍は知っていて、源氏はすぐれた男であるが、自分を思う愛はこれほどのものでなかつたということもようやく悟ることができてきては、若い無分別さからあの大事件までも引き起こし、自分の名誉を傷つけたことはもとより、あの人にも苦勞をさせることになつたとも思われて、それも皆自分が薄は倅はうこな女だからであるとも悲しんでいた。

翌年の二月に東宮の御元服があつた。十二でおありになるのであるが、御年齢のわりには御大人おんおとならしくて、おきれいで、ただ源氏の大納言の顔が二つできたようにお見えになつた。まぶしいほどの美を備えておいでになるのを、世間ではおほめしているが、母宮はそれを人知れず苦勞にしておいでになつた。帝も東宮のこりつぱでありになることに御満足をあそばして御即位後のことをなつかしい御様子でお教えあそばした。

この同じ月の二十幾日に讓位のことが行なわれた。太后はお驚きになつた。

「ふがいなく思召すでしょうが、私はこうして静かにあなたへ御孝養がしたいのです」

と帝はお慰めになつたのであつた。東宮には承香殿じやうかうでんの女御にょごのお生みした皇子がお立ちになつた。

すべてのことに新しい御代みよの光の見える日になつた。見聞きする眼めに耳にはなやかな気分の味わわれることが多かつた。源氏の大納

言は内大臣になった。左右の大臣の席がふさがっていたからである。そして摂政せつしやうにこの人がなることも当然のことと思われていたが、

「私はそんな忙しい職に堪えられない」

と言つて、致仕ちしの左大臣に摂政を譲つた。

「私は病気によつていったん職をお返しした人間なのですから、今日はまして年も老いてしまつたし、そうした重任に当たることなどはだめです」

と大臣は言つて引き受けない。

「支那しなでも政界の混沌こんとんとしている時代は退しりぞいて隠者いんしやになつていても治世の君がお決まりになれば、白髪も恥じずお仕えに出て来るよ
うな人をほんとうの聖人だと言つてほめていきます。御病気で御辞退
になつた位を次の天子の御代に改めて頂戴ちやうたいすることはさしつかえが
ありませんよ」

と源氏も、公人として私人として忠告した。大臣も断わり切れず
に太政大臣になつた。年は六十三であつた。事實は先朝に権力をふ
るつた人たちに飽き足りないところがあつて引きこもつていたので
あるから、この人に栄えの春がまわつてきたわけである。一時不遇
なように見えた子息たちも浮かび出たようである。その中でも宰相
中將は権中納言になつた。四の君が生んだ今年十二になる姫君を早
くから後宮に擬して中納言は大事に育てていた。以前二条の院につ
れられて来て高砂たかさこを歌つた子も元服させて幸福な家庭を中納言は持
つていた。腹々に生まれた子供が多くて一族がにぎやかであるのを
源氏はうらやましく思つていた。太政大臣家で育てられていた源氏
の子はだれよりも美しい子供で、御所へも東宮へも殿上てんじやうとして出
入りしているのである。源氏の葵夫人あおいの死んだことを、父母はまた

この栄えゆく春に悲しんだ。しかしすべてが昔の婿の源氏によつてもたらされた光明であつて、何年かの暗い影が源氏のためにこの家から取り去られたのである。源氏は今も昔のとおりに老夫妻に好意を持つていて何かの場合によく訪ねて行つた。若君の乳母そのほかの女房も長い間そのままに勤めている者に、厚く酬いてやることも源氏は忘れなかつた。幸せ者が多くできたわけである。二条の院でもそのとおりに、主人を変えようとしなかつた女房を源氏は好遇した。また中将とか、中務とかいう愛人関係であつた人たちにも、多年の孤独が慰むるに足るほどな愛撫が分かたねばならないのであつたから、暇がなくて外歩きも源氏はしなかつた。二条の院の東に隣つた邸は院の御遺産で源氏の所有になつていてのをこのごろ源氏は新しく改築させていた。花散里などという恋人たちを住ませるための設計をして造られているのである。

源氏は明石の君の妊娠していたことを思つて、始終気にかけていたのであつたが、公私の事の多さに、使いを出して尋ねることもできない。三月の初めにこのごろが産期になるはずであると思つと哀れな気がして使いをやつた。

「先月の十六日に女のお子様がお生まれになりました」

という報せを聞いた源氏は愛人によつてはじめての女の子を得た喜びを深く感じた。なぜ京へ呼んで産をさせなかつたかと残念であつた。源氏の運勢を占つて、子は三人で、帝と后が生まれる、いちばん劣つた運命の子は太政大臣で、人臣の位をきわめるであろう、その中のいちばん低い女が女の子の母になるであろうと言われた。また源氏が人臣として最高の位置を占めることも言われてあつたので、それは有名な相人たちの言葉が皆一致するところであつたが、

逆境にいた何年間はそんなことも心に否定するほかはなかつたのである。当帝が即位されたことは源氏にうれしかったが、自身の上に高御座たかみくらの榮譽を希ねがわないことは少年の日と少しも異なっていなかった。あるまじいことと思っている。多くの皇子たちの中にすぐれてお愛しになった父帝が人臣の列に自分をお置きになった御精神を思うと、自分の運と天位とは別なものであると思う源氏であった。源氏は相人の言葉のよく合う実証として、今帝の御即位が思われた。后きさきが一人自分から生まれるということに明石の報しらせが符合することから、住吉すみやしの神の庇護ひしによってあの人も後の母になる運命から、父の入道が自然片寄った婿選むこびに身命を打ち込むほどの狂態も見せたのであろう。後の位になるべき人を田舎いなかで生まれさせたのはもったいない気の毒なことであると源氏は思って、しばらくすれば京へ呼ぼうと思つて、東の院の建築を急がせていた。明石のような田舎に相当な乳母めのとがありえようとは思われないので、父帝の女房をしていた宣旨せんじという女の娘で父は宮内卿宰相くわいきやうだった人であつたが、母にも死に別れ、寂しい生活をするうちに恋愛関係から子供を生んだといふ話を近ごろ源氏は聞き、その噂うわさを伝えた人呼び出して、宰相の娘に、源氏の姫君の乳母として明石へ赴おもむくことの交渉を始めさせた。この女はまだ若くて無邪気な性質から、寂しい荒あはら屋で物思いをばかりして暮らす朝夕の生活に飽あいていて、深くも考えずに、源氏の縁のかかった所に生活のできることほどよいこともないようにこれまでから焦こがれていて、すぐに承諾して来た。源氏は田舎いなか下りをしてくれる宰相の娘を哀れに思つて、いろいろと出立の用意をしてやつていた。

外出したついでに源氏はそつとわが子の新しい乳母の家へ寄つた。

快諾を伝えてもらったのであるが、なお女はどうしようかと煩悶はんもんしていた所へ源氏みずから来てくれたので、それで旅に出る心も慰んで、あきらめもついた。

「御意のとおりにいたします」

と言っていた。ちょうど吉日でもあったのですぐに立たせることに源氏はした。

「同情がないようだけれど、私は将来に特別な考えもある子なのだからね、それに私も経験して来た土地の生活だから、そう思ってまあ初めだけしばらく我慢をすれば馴なれてしまおうよ」

と源氏は明石の入道家のことをくわしく話して聞かせた。母といつしよに父帝のおそばに来ていたこともあって、時々は見た顔であったが、以前に比べると容貌うぶなまが衰えていた。家の様子などもずいぶんひどい荒れ方になっている。さすがに広いだけは広いが気味悪く思われるほど木なども繁しげりほうだいになっていて、こんな家にどうして暮らしてきたかと思われるほどである。若やかで美しいたちの女であったから、源氏が戯談たわぶらを言ったりするのにもおもしろい相手であった。

「私は取り返したい気がする。遠くへなどおまえをやりたくない。どう」

と言われて、直接源氏のそばで使われる身になれたなら、過去のどんな不幸も忘れることができるであろうと、物哀れな気持ちに女はなった。

「#ここから1字下げ」

「かねてより隔てぬ中とならねど別れは惜しきものにぞありける

「#ここで字下げ終わり」

いっしょに行こうかね」

と源氏が言うと、女は笑って、

「#ここから2字下げ」

うちつけの別れを惜しむかことにて思はん方に慕ひやはせぬ

「#ここで字下げ終わり」

と冷やかしました。

京の間だけは車でやった。親しい侍を一人つけて、あくまでも秘密のうちに乳母めのとは送られたのである。守り刀よしの姫君の物、若い母親への多くの贈り物等が乳母に託されたのであった。乳母にも十分の金品が支給されてあった。源氏は入道がどんなに孫を大事がっていることであろうと、いろいろな場合を想像することで微笑がされた。母になった恋人も哀れに思いやられた。このごろの源氏の心は明石の浦へ傾き尽くしていた。手紙にも姫君を粗略にせぬようにと繰り返し繰り返しいまし誠めてあった。

「#ここから2字下げ」

いつしかも袖そでうちかけんをとめ子が世をへて撫なでん岩のおひさき

「#ここで字下げ終わり」

こんな歌も送ったのである。摂津の国境くにがきまでは船で、それからは馬に乗って乳母は明石へ着いた。入道は非常に喜んでこの一行を受

け取った。感激して京のほうを拝んだほどである。そしていよいよ姫君は尊いものに思われた。おそろしいほどたいせつなものに思われた。乳母が小さい姫君の美しい顔を見て、そつめい聡明な源氏が将来を思つて大事にするのであると言つたことはもつともなことであると思つた。来る途中で心細いように、恐ろしいように思つた旅の苦痛などもこれによつて忘れてしまうことができた。非常にかわいく思つて乳母は幼い姫君を扱つた。若い母は幾月かの連続した物思いのために衰弱したからだで出産をして、なお命が続くものとも思つていなかったが、この時に見せられた源氏の至誠にはおのずから慰められて、力もついていくようであつた。送つて来た侍に対しても入道は心をこめた歓待をした。あまり丁寧な待遇に侍は困つて、

「こちらの御様子を聞こうとお待ちになつていらっしやるでしょうから早く帰京いたしませんと」

とも言うのであつた。明石の君は感想を少し書いて、

「#ここから2字下げ」

一人して撫なづるは袖そでのほどなきに覆おほふばかりの蔭かげをしぞ待つ

「#ここで字下げ終わり」

と歌も添えて来た。怪しいほど源氏は明石の子が心にかかつて、見たくてならぬ気がした。夫人には明石の話をおもしろくないのであるが、ほかから聞こえて来て不快にさせてはと思つて、源氏は明石の君の出産の話をした。

「人生は意地の悪いものです。そうありたいと思うあなたにはできそうではなくて、そんな所に子が生まれるなどは。しかも女の子

ができたのだからね、悲観してしまふ。うっちゃって置いてもいいのだけれど、そうもできないことでね、親であつて見ればね。京へ呼び寄せてあなたに見せてあげましよう。憎んではいけませんよ」

「いつも私がそんな女であるとしてあなたに言われるかと思うと私自身もいやになります。けれど女が恨みやすい性質になるのはこんなことばかりがあるからなのでしよう」

と女王は怨んだ。

「そう、だれがそんな習慣をつけたのだろう。あなたは実際私の心持ちをわかるうとしてくれない。私の思っていないことを忖度して恨んでいるから私としては悲しくなる」

と言っているうちに源氏は涙ぐんでしまった。どんなにこの人が恋しかつたらうと別居時代のことを思つて、おりおり書き合つた手紙にどれほど悲しい言葉が盛られたものであるうと思ひ出していた源氏は、明石の女のことなどはそれに比べて命のある恋愛でもないと思われた。

「子供に私が大騒ぎして使いを出したりしているのも考えがあるからですよ。今から話せばまた悪くあなたが取るから」

とその話を続けずに、

「すぐれた女のように思つたのは場所のせいだったと思われる。とにかく平凡でない珍しい存在だと思ひましたよ」

などと子の母について語つた。別れの夕べに前の空を流れた塩焼きの煙のこと、女の言つた言葉、ほんとうよりも控え目な女の容貌の批評、名手らしい琴の弾きようなどを忘れぬふう源氏の語るのを聞いている女王は、その時代に自分は一人でどんなに寂しい思ひをしていたことであろう、仮にもせよ良人は心を人に分けていた

時代にと思うと恨めしくて、明石の女のために歎息たんそくをしている良人は良人であるというように、横のほうを向いて、

「どんなに私は悲しかったろう」

歎息しながら独言ひとりごとのようになんか言っているから、

「#ここから2字下げ」

思ふどち靡なびく方にはあらずとも我われぞ煙に先立ちなまし

「#ここで字下げ終わり」

「何ですって、情けないじゃありませんか、

「#ここから2字下げ」

たれにより世をうみやまに行きめぐり絶えぬ涙に浮き沈む身ぞ

「#ここで字下げ終わり」

そうまで誤解されては私はもう死にたくなる。つまらぬことで人の感情を害したくないと思うのも、ただ一つの私の願いのあなたと永ながく幸福でいたいためじゃないのですか」

源氏は十三絃の掻かき合わせをして、弾ひけと女王に勧めるのであるが、名手だと思ったと源氏に言われている女がねたましいか手も触れようとしない。おおようで美しく柔らかい気持ちの女性であるが、さすがに嫉妬しつとはして、恨むことも腹を立てることもあるのが、いつそう複雑な美しさを添えて、この人をより引き立てて見せることだと源氏は思っていた。

五月の五日が五十日いひかの祝いにあたるであろうと源氏は人知れず数

えていて、その式が思いやられ、その子が恋しくてならないのであった。紫の女王に生まれた子であったなら、どんなにはなやかにそれらの式を自分に行なつてやったことであろうと残念である。あの田舎いなかで父のいぬ場所で生まれるとは憐あわれな者であると思つていた。男の子であれば源氏もこうまでこの事実じじつに苦しまなかつたであろうが、後の望みのぞみを持ってよい女の子にこの引け目をつけておくことが堪えられないように思われて、自分の運はこの一点で完全でないとさえ思つた。五十日いひかのために源氏は明石へ使いを出した。

「ぜひ当日着くようにして行け」

と源氏に命ぜられてあつた使いは五日に明石へ着いた。華奢かしやな祝品の数々のほかには実用品も多く添えて源氏は贈つたのである。

「#ここから2字下げ」

海松や時ぞともなきかげにゐて何のあやめもいかにわくらん

「#ここから1字下げ」

からだから魂が抜けてしまうほど恋しく思います。私はこの苦しみに堪えられないと思う。ぜひ京へ出て来ることにしてください。こちらであなたに不愉快な思いをさせることは断じてない。

「#ここで字下げ終わり」

という手紙であつた。入道は例のように感激して泣いていた。源氏の出立の日の泣き顔とは違つた泣き顔である。明石でも式の用意は派手はでにしてあつた。見て報告をする使いが来なかつたなら、それがどんなに晴れをしなかつたことだろうと思われた。乳母めのとも明石の君の優しい氣質なまじに馴染なじんで、よい友人を得た氣になつて、京のこと

は思わずに暮らしていた。入道の身分に近いほどの家の女もここに
来て女房勤めをしているようなのが幾人かはあるが、それがどうか
といえは京の宮仕えに磨り尽くされたような年配の者が生活の苦か
ら脱れるために田舎下りをしたのが多いのに、この乳母はまだ娘ら
しくて、しかも思い上がった心を持っていて、自身の見た京を語り、
宮廷を語り、縉紳しんしんの家の内部の派手な様子を語って聞かせることが
できた。源氏の大臣がどれほど社会から重んぜられているかという
ことも、女心にしたいだけの誇張もして始終話した。乳母の話から、
その人が別れたのちの今日までも好意を寄せて、また自分の生んだ
子を愛してくれているのは幸福でなくて何であろうと明石の君はよ
うやくこのごろになって思うようになった。乳母は源氏の手紙をい
つしよに読んでいて、人間にはこんなに意外な幸運を持っている人
もあるのである、みじめなのは自分だけであると悲しまれたが、乳
母はどうしているかということも奥に書かれてあって、源氏が自分
に関心を持っていることを知ることができたので満足した。返事は、

「#ここから2字下げ」

数ならぬみ島がくれに鳴く鶴たづを今日もいかにと訪ふ人ぞなき

「#ここから1字下げ」

いろいろに物思いをいたしながら、たまさかのおたよりを命にして
おりますのもはかない私でございます。仰せのように子供の将来に
光明を認めとうございます。

「#ここで字下げ終わり」

というので、信頼した心持ちが現われていた。何度も同じ手紙を見返しながら、

「かわいそうだ」

と長く声を引いて独言を言っているのを、夫人は横目にながめて、「浦より遠に漕ぐ船の」（我をば他に隔てつるかな）と低く言つて、物思わしそうにしていた。

「そんなにあなたに悪く思われるようにまで私はこの女を愛しているのではない。それはただそれだけの恋ですよ。その風景が目には浮かんできたりする時々、私は当時の気持ちになつてね、つい歎息が口から出るのですよ。なんでも気にするのですね」

などと、恨みを言いながら上包みに書かれた字だけを夫人に見せた。品のよい手跡で貴女も恥ずかしいほどのなを見て、夫人はこうだからであると思つた。

こんなふうには紫の女王の機嫌を取ることにばかり追われて、花散里を訪ねる夜も源氏の作られないのは女のためにかわいそうなことである。このごろは公務も忙しい源氏であつた。外出に従者も多く従えて出ねばならぬ身分の窮屈さもある上に、花散里その人がきわだつ刺戟も与えぬ人であることを知っている源氏は、今日逢わねばと心の湧き立つこともないのであつた。

五月雨のころは源氏もつれづれを覚え、ちようど公務も閑暇であつたので、思い立ってその人の所へ行つた。訪ねては行かないでも源氏の君はこの一家の生活を保護することを怠つていなかったのである。それにたよつてゐる人は恨むことがあつても、ただみずからの薄命を歎く程度のものであつたから源氏は気楽に見えた。何年かのうちに邸内はいよいよ荒れて、すごいような広い住居であつ

た。姉の女御にょごの所で話をしてから、夜がふけたあとで西の妻戸をたたいた。臙おほろな月のさし込む戸口から艶えんな姿で源氏はいって来た。美しい源氏と月のさす所に出ていることは恥はずかしかつたが、初めから花散里はそこに出ているのでそのままいた。この態度が源氏の気持ちを楽しにした。水鶏くいなが近くで鳴くのを聞いて、

「#ここから2字下げ」

水鶏だに驚かさずばいかにして荒れたる宿に月を入れまし

「#ここで字下げ終わり」

なつかしい調子で言うともなくこう言う女が感じよく源氏に思われた。どの人にも自身を惹ひく力のあるのを知って源氏は苦しかった。

「#ここから1字下げ」

「おしなべてたたく水鶏に驚かばうはの空なる月もこそ入れ

「#ここで字下げ終わり」

私は安心してられない」

とは言っていたが、それは言葉の戯れであつて、源氏は貞淑な花散里を信じ切っている。何に動揺することもなく長く留守るすの間を静かに待っていてくれた人を、源氏はおろそかには思っていないかつた。当分悲しくならないがために空はながめないで暮らすようにと、行く前に源氏が言った夜のことなどを思い出して言うのであつた。

「なぜあの時に私は非常に悲しいことだと思つたのでしよう。私な

どはあなたに幸福の帰って来た今だってもやはり寂しいのでしたのに」

と恨みともなしにおおように言っているのが可憐かれんであった。例のように源氏は言葉を尽くして女を慰めていた。平生どうしまつてあつたこの人の熱情かと思われるようである。こんな機会がまた作られたならば、大式だいにの五節ごせちに逢いたいと源氏は願っていたが、五節の訪問も実現がむずかしいと見なければならぬ。女は源氏を忘れることができないで、物思いの多い日を送っていて、親が心配してかれこれと勧める結婚話には取り合わずに、人並みの女の幸福などはいらないと思っていた。源氏は東の院は本邸でなく、そんな人たちを集めて住ませようと建築をさせていたのであつたから、もし理想どおりにかしずき娘ができてくることがあつたら、顧問格の女として才女の五節などは必要な人物であると源氏は思っていた。東の院はおもしろい設計で建てられているのである。近代的な生活に適するような明るい家である。地方官の中のよい趣味を持つ一人一人に殿舎をわり当てにして作らせていた。

源氏は今も尚侍なishのかみを恋しく思っていた。懲りたことのない人のように、また危あぶないこともしかねないほど熱心になっているが、環境のために恋には奔放な力を見せた女もつつましくなっていて、昔のように源氏の誘惑に反響を見せるようなこともない。源氏は自身の地位ができて世の中が窮屈になり、冷たいものになり、物足りなくなつたと感じていた。

院は暢気におなりあそばされて、よく好きの音楽の会などをあそばして風流に暮らしておいでになつた。女御も更衣も御在位の時そのまま侍しているが、東宮の母君の女御だけは、以前取り立てて

御一寵愛があつたといふのではなく、尚侍にけおされた後宮の一人に過ぎなかつたが、思いがけぬ幸福に恵まれた結果になつて、一人だけ離れて御所の中の東宮の御在所に侍しているのである。源氏の現在の宿直所もやはり昔の桐壺であつて、梨壺に東宮は住んでおいでになるのであつたから、御近所であるために源氏はその御殿とお親しくして、自然東宮の御後見もするようになった。

入道の宮をまた新たに御母後の位にあそばすことは無理であつたから、太上天皇に準じて女院にあそばされた。封国が決まり、院司の任命があつて、これはまた一段立ちまさつたごりつばなお身の上と見えた。仏法に關係した善行功德をお誉みになることを天職のように思召して、精勵しておいでになつた。長い間御所への出入りも御遠慮しておいでになつたが、今はそうでなく自由なお気持ちで宮中へおはいりになり、お出になりあそばすのであつた。皇太后は人生を恨んでおいでになつた。何かの場合に源氏はこの方にも好意のある計らいをして敬意を表していた。太后としてはおつらいことであらうとささやく者が多かつた。兵部卿親王は源氏の官位一剥奪時代に冷淡な態度をお見せになつて、ただ世間の聞こえばかりをばはかつて、御娘に対してもなんらの保護をお与えにならなかつたことで、当時の源氏は恨めしい思いをさせられて、もう昔のように親しい御交際はしていなかつた。一般の人にはあまねく慈悲を分かとうとする人であつたが、兵部卿の宮一家にだけはやや復讐的な扱いもするのを、入道の宮は苦しく思召された。現代には二つの大きな勢力があつて、一つは太政大臣、一つは源氏の内大臣がそれで、この二人の意志で何事も断ぜられ、何事も決せられるのであつた。権中納言の娘がその年の八月に後宮へはいつた。すべての世話は祖父の

大臣がしてはなやかな仕度であつた。兵部卿親王も第二の姫君を後宮へ入れる志望を持つておいでになつて、大事にお傳ずきになる評判のあるのを、源氏はその姫君に光栄あれとも思われないのであつた。源氏はまたどんな人を後宮へ推薦しようとしているかそれはわからない。

この秋に源氏は住吉詣でをした。須磨、明石で立てた願を神へ果たすためであつて、非常な大がかりな旅になつた。廷臣たちが我も我もと随行を望んだ。ちようどこの日であつた、明石の君が毎年の例で参詣するのを、去年もこの春も障りがあつて果たすことのできなかつた謝罪も兼ねて、船で住吉へ来た。海岸のほうへ寄つて行くと華美な参詣の行列が寄進する神宝を運び続けて来るのが見えた。楽人、十列の者もきれいな男を選んであつた。

「どなたの御参詣なのですか」と船の者が陸へ聞くと、

「おや、内大臣様の御願はたしの御参詣を知らない人もあるね」

供男階級の者もこつ得意そうに言う。何とした偶然であろう、ほかの月日もないようにと明石の君は驚いたが、はるかに恋人のはなばなしさを見ては、あまりに懸隔のありすぎるわが身の上であることを痛切に知つて悲しんだ。さすがによそながら巡り合うだけの宿命につながれていることはわかるのであつたが、笑つて行つた侍さえ幸福に輝いて見える日に、罪障の深い自分は何も知らずに来て恥ずかしい思いをするのであろうと思ひ続けると悲しくばかりなつた。深い緑の松原の中に花一紅葉が撒かれたように見えるのは袍のいるであつた。赤袍は五位、浅葱は六位であるが、同じ六位も蔵人は青色で目に立つた。加茂の大神を恨んだ右近丞は靱負になつて、

隨身をつれた派手な蔵人になつて来ていた。良清も同じ靱負佐になつてはなやかな赤袍の一人であつた。明石に来ていた人たちが昔の面影とは違つたはなやかな姿で人々の中に混じつてゐるのが船から見られた。若い頭官たち、殿上役人が競うように凝つた姿をして、馬や鞍にまで華奢を尽くしてゐる一行は、田舎の見物人の目を樂しませた。源氏の乗つた車が来た時、明石の君はきまり悪さに恋しい人をのぞくことができなかつた。河原の左大臣の例で童形の儀仗の人を源氏は賜わつてゐるのである。それらは美しく装うていて、髪は分けて二つの輪のみずらを紫のぼかしの元結いでくつた十人は、背たけもそろつた美しい子供である。近年はあまり許される者のない珍しい隨身である。大臣家で生まれた若君は馬に乗せられていて、一班ずつを揃えの衣裳にした幾班かの馬添い童がつけられてある。最高の貴族の子供というものはこうしたものであるというように、多数の人から大事に扱われて通つて行くのを見た時、明石の君は自分の子も兄弟でいながら見る影もなく扱われていると悲しかった。いよいよ御社に向いて子のために念じていた。

撰津守が出て来て一行を饗応した。普通の大臣の参詣を扱うのはおのずから違つたことになるのは言うまでもない。明石の君はますます自分がみじめに見えた。

こんな時に自分などが貧弱な御幣を差し上げても神様も目にとどめにならぬだろうし、帰つてしまうこともできない、今日は浪速のほうへ船をまわして、そこで被いでもするほうがよいと思つて、明石の君の乗つた船はそつと住吉を去つた。こんなことを源氏は夢にも知らないでいた。夜通しいろいろの音楽舞樂を広前に催して、神の喜びたもうようなことをし尽くした。過去の願に神へ約してあつ

た以上のことを源氏は行なったのである。惟光これみつなどという源氏と辛苦をともした人たちは、この住吉の神の徳を偉大なものと感じていた。ちよつと外へ源氏の出て来た時に惟光これみつが言った。

「#ここから2字下げ」

住吉の松こそものは悲しけれ神代のことをかけて思へば

「#ここで字下げ終わり」

源氏もそう思っていた。

「#ここから1字下げ」

「荒かりし浪なみのまよひに住吉の神をばかけて忘れやはする

「#ここで字下げ終わり」

確かに私は靈驗を見た人だ」

と言う様子も美しい。こちらの派手はでな参詣しんぎぶりに畏縮いしゆくして明石の船が浪速のほうへ行ってしまったことも惟光が告げた。その事実を少しも知らずにいたと源氏は心で憐あわれんでいた。初めのことも今日のこととも住吉の神が二人を愛しての導きに違いないと思われて、手紙を送って慰めてやりたい、近づいてかえって悲しませたことであるうと思つた。住吉を立てから源氏の一行は海岸の風光を愛しながら浪速に出た。そこでは被いをすることになっていた。淀川よどの七瀬に被いの幣が立てられてある堀江のほとりをながめて、「今はた同じ浪速なる」（身をつくしても逢はんとぞ思ふ）と我知らず口に出た。車の近くから惟光が口ずさみを聞いたのか、その用があるうと

例のように懷中に用意していた柄の短い筆などを、源氏の車の留められた際に提供した。源氏は懷紙に書くのであった。

「#ここから2字下げ」

みをつくし恋ふるしるしにここまでもめぐり逢ひける縁は深しな

「#ここで字下げ終わり」

惟光に渡すと、明石へついて行って行った男で、入道家の者と心安くなっていた者を使いにして明石の君の船へやった。派手な一行が浪速を通って行くのを見て、女は自身の薄倅さばかりが思われて悲しんでいた所へ、ただ少しの消息ではあるが送られて来たことで感激して泣いた。

「#ここから2字下げ」

数ならでなにはのこともかひなきに何みをつくし思ひ初めけん

「#ここで字下げ終わり」

田養島での被いの木綿につけてこの返事は源氏の所へ来たのである。ちょうど日暮れになっていた。夕方の満潮時で、海べにいる鶴も鳴き声を立て合って身にしむ気が多くすることから、人目を遠慮していずに逢いに行きたいとさえ源氏は思った。

「#ここから2字下げ」

露けさの昔に似たる旅衣田養の島の名には隠れず

「#ここで字下げ終わり」

と源氏は歌われるのであった。遊覧の旅をおもしろがっている人たちの中で源氏一人は時々暗い心になった。高官であつても若い好奇心に富んだ人は、小船を漕がせて集まつて来る遊女たちに興味を持つふうを見せる。源氏はそれを見てにがにがしい気になっていた。恋のおもしろさも対象とする者に尊敬すべき価値が備わっていないければ起こつてこないわけである。恋愛というほどのことではなくても、軽薄な者には初めから興味が持てないわけであるのにと思つて、彼女らを相手にはしやいでいる人たちを軽蔑した。

明石の君は源氏の一行が浪速を立つた翌日は吉日でもあつたから住吉へ行つて御幣を奉つた。その人だけの願も果たしたのである。郷里へ帰つてからは以前にも増した物思ひをする人になつて、人数でない身の上を歎き暮らしていた。もう京へ源氏の着くころであるうと思つてから間もなく源氏の使いが明石へ来た。近いうちに京へ迎えたいという手紙を持つて来たのである。頼もしいふうに恋人の一人として認められている自分であるが、故郷を立つて京へ出たのちにまで源氏の愛は変わらずに続くものであるうかと考えられることによつて女は苦しんでいた。入道も手もとから娘を離してやることは不安に思われるのであるが、そうかといつてこのまま田舎に置くことも悲惨な気がして源氏との関係が生じなかつた時代よりもかえつて苦勞は多くなつたようであつた。女からは源氏をめぐるまぶしい人たちの中へ出て行く自信がなくて出京はできないという返事をした。

この御代になつた初めに齋宮もお変わりになつて、六条の御息所は伊勢から帰つて来た。それ以来源氏はいろいろと昔以上の好意を

表しているのであるが、なお若かった日すらも恨めしい所のあった源氏の心のいわば余炎ほどの愛を受けようとは思わない、もう二人に友人以上の交渉があつてはならないと御息所は決めていたから、源氏も自身で訪ねて行くようなことはしないのである。しいて旧情をあたためることに同意をさせても、自分ながらもまた女を恨めしからせる結果にならないとは保証ができないというように源氏は思つていたし、女の家へ通うことなども今では人目を引くことが多くなっていることでもあつて、待つと言わない人をしいて訪ねて行くことはしなかった。齋宮がどんなにりっぱな貴女きじよになつておいでになるであろうと、それを目に見たく思つていた。御息所は六条の旧邸をよく修繕してあくまでも高雅なふうに暮らしていた。洗練された趣味は今も豊かで、よい女房の多い所として風流男の訪問が絶えない。寂しいようではあるが思い上がった貴女にふさわしい生活であると思えたが、にわかには重い病気になつて心細くなつた御息所は、伊勢という神の境にあつて仏教に遠ざかつていた幾年かのことが恐ろしく思われて尼になつた。源氏は聞いて、恋人として考えるよりも、首肯される意見を持つよき相談相手と信じていたその人の生命いのちが惜しまれて、驚きながら六条邸を見舞つた。源氏は真心から御息所をいたわり、御息所を慰める言葉を続けた。病床の近くに源氏の座があつて、御息所は脇息きょうそくに倚りかかりながらものを言つていた。非常に衰弱の見える昔の恋人のために源氏は泣いた。どれほど愛していたかをこの人に実証して見せることができないうまままで死別をせねばならぬかと残念でならないのである。この源氏の心が御息所に通じたらしくて、誠意の認められる昔の恋人に御息所は齋宮のことを頼んだ。

「孤児になるのでございますから、何かの場合に子の一人と思ってお世話をしてくださいませ。ほかに頼んで行く人はだれもない心細い身の上なのです。私のような者でも、もう少し人生というものわかる年ごろまでついていてあげたかったです」

こう言ったあとで、そのまま気を失うのではないかと思われるほど御息所は泣き続けた。

「あなたのお言葉がなくてもむろん私は父と変わらない心で齋宮を思っているのですから、ましてあなたが御病中にもこんなに御心配になって私へお話しになることは、どこまでも責任を持ってお受け合います。気がかりになどは少しもお思いになることはありませんよ」

などと源氏が言うと、

「でもなかなかお骨の折れることでございますよ。あとを頼まれた人がほんとうの父親であっても、それでも母親のない娘は心細いとだろうと思われますからね。まして恋人の列になどお入れになつては、思わぬ苦勞をすることでしょうし、またほかの方を不快にもさせることだろうと思えます。悪い想像ですが決してそんなふうにお取り扱いにならないでね。私自身の経験から、あの人は恋愛もせず一生処女でいる人にさせたいと思います」

御息所はこう言った。意外な^{そんたく}村度までもするものであると思つたが源氏はまた、

「近年の私がどんなにまじめな人間になつていかをご存じでしょう。昔の放縦な生活の名残^{なごり}をとどめているようにおっしゃるのが残念です。自然おわかりになつてくることでしょうか」

と言つた。もう外は暗くなつていた。ほのかな^{ほかげ}灯影が病牀^{びやうじょう}の几帳^{きちやう}

をとおしてさしていたから、あるいは見えることがあるうかと静かに寄って几帳の綻ほころびからのぞくと、明るくはない光の中に昔の恋人の姿があった。美しくはなやかに思われるほどに切り残した髪が背にかかっている、脇息によった姿は絵のようであった。源氏は哀れでたまらないような気がした。帳台の東寄りの所で身を横たえている人は前斎宮でおありになるらしい。几帳の垂たれ絹が乱れた間からじつと目を向けていると、宮は頼杖ほおじえをついて悲しそうにしておいでになる。少ししか見えないのであるが美人らしく見えた。髪のかかりよう、頭の形などに気け高い美が備わりながらまた近代的なはなやかな愛嬌あいぎょうのある様子もわかった。御息所があんなに阻止的に言っているのであるからと思つて、源氏は動く心をおさえた。

「私はとてもまた苦しくなつてまいりました。失礼でございますからもうお帰りくださいませ」

と御息所は言つて、女房の手を借りて横になつた。

「私が伺つたので少しでも御気分がよくなればよかつたのですが、お気の毒ですね。どんなふうに苦しいのですか」

と言いながら、源氏が牀とこをのぞこうとするので、御息所は女房に別れの言葉を伝えさせた。

「長くおいでくださいませましては物怪もののけの来ている所でございますからお危あぶうございます。病気のこんなに悪くなりました時分に、おいでくださいましたことも深い御因縁のあることとうれしく存じます。平生思つておりましたことを少しでもお話のできましたことで、あなたは遺族にお力を貸してくださいさるでしょうと頼もしく思われます」

「大事な御遺言を私にしてくださいましたことをうれしく存じます。」

院の皇女がたはたくさんいらつしやるのですが、私と親しくしてくださいます方はあまりないのですから、齋宮を院が御自身の皇女の列に思召おもほされましたとおりに私も思ひまして、兄弟として睦まじくいたしましょう。それに私はもう幾人もの子があつてよい年ごろになつていいますから、私の物足りなさを齋宮は補つてくださるでしょう」

などと言ひ置いて源氏は帰つた。それから源氏の見舞いの使いが以前よりもまた繁々しげしげ行つた。そうして七、八日のちに御息所は死んだ。無常の人生が悲しまれて、心細くなつた源氏は参内もせずに引きこもつていて、御息所の葬儀についての指図さしずを下しなどしていた。前の齋宮司の役人などで親しく出入りしていた者などがわずかに来て葬式の用意に奔走するにすぎない六条邸であつた。侍臣を送つたあとで源氏自身も葬家へ来た。齋宮に弔詞を取り次がせると、

「ただ今は何事も悲しみのためにわかりませんので」

と女別当にょべつとうを出してお言わせになつた。

「私に御遺言をなすつたこともありますから、ただ今からは私を睦まじい者と思召おもほしてくださいましたら幸せあしです」

と源氏は言つてから、宮家の人々を呼び出しているいろすることを命じた。非常に頼もしい態度であつたから、昔は多少恨めしがつていた一家の人々の感情も解消されていくようである。源氏のほうから葬儀員が送られ、無数の使用人が来て御息所の葬儀はきらやかに執行されたのであつた。

源氏は寂しい心を抱いて、昔を思いながら居間の御簾みすを下ろしこめて精進の日を送り仏勤めをしていた。前齋宮へは始終見舞いの手

紙を送っていた。宮のお悲しみが少し静まってきたころからは御自身で返事もお書きになるようになった。それを恥ずかしく思召すのであったが、乳母めのとなどから、

「もったいないことでございますから」

と言つて、自筆で書くことをお勧められになるのである。雪が霏みぞれとなり、また白く雪になるような荒日あればよじ和わに、宮がどんなに寂しく思つておいでになるであろうと想像をしながら源氏は使いを出した。

「#ここから1字下げ」

こういう天気の日にどういうお気持ちでいられますか。

「#ここから2字下げ」

降り乱れひまなき空に亡なき人の天あまがけるらん宿ぞ悲しき

「#ここで字下げ終わり」

という手紙を送ったのである。紙は曇った空色が用いられてあった。若い人の目によい印象があるようにと思つて、骨を折つて書いた源氏の字はまぶしいほどみごとであつた。宮は返事を書きにくく思召したのであるが、

「われわれから御一挨拶あいさつをいたしますのは失礼でございますから」と女房たちがお責めするので、灰色の紙の薫香くんかうのにおいを染ませた艶えんなのへ、目だためような書き方にして、

「#ここから2字下げ」

消えがてにふるぞ悲しきかきくらしわが身それとも思ほえぬ世に

「#ここで字下げ終わり」

とお書きになった。おとなしい書風で、そしておおようで、すぐれた字ではないが品のあるものであった。齋宮になって伊勢へお行きになったところから源氏はこの方に興味を持っていたのである。もう今は忌垣いがきの中の人でもなく、保護者からも解放された一人の女性と見てよいのであるから、恋人として思う心をささやいてよい時になったのであると、こんなふうに思われるのと同時に、それはすべきでない、おかわいそうであると思った。御息所がその点を気づかっていたことでもあるし、世間もその疑いを持って見るであろうことが、自分は全然違った清い扱いを宮にしよう、陛下が今少し大人らしくものを認識される時を待って、前齋宮を後宮に入れよう、子供が少なくて寂しい自分は養女をかしづくことに楽しみを見いだそうと源氏は思いついた。親切に始終尋ねの手紙を送っていて、何かの時には自身で六条邸へ行きもした。

「失礼ですが、お母様の代わりと申すつて、御遠慮のないおつきあいをくださったら、私の真心がわかっていただけたという気がするでしょう」

などと言うのであるが、宮は非常に内気で羞恥心ちじしんがお強くて、異性にほのかな声でも聞かせることは思いもよらぬことのようにお考えになるのであったから、女房たちも勧めかねて、宮のおとなしさを苦勞くろうにしていた。女別当にょべつとう、内侍ないし、そのほか御親戚関係の王家の娘などもお付きしているのである。自分の心に潜在している望みが実現されることがあっても、他の恋人たちの中に混じって劣る人ではないらしいこの人の顔を見たいものであると、こんなことも思っている源氏であったから、養父として打ちとけない人が聡明そうめいであった

のである。自身の心もまだどうなるかしのれないのであるから、前齋宮を入内させる希望などは人に言っておかぬほうがよいと源氏は思っていた。故人の仏事などにとりわけ力を入れてくれる源氏に六条邸の人々は感謝していた。

六条邸は日がたつにしたがつて寂しくなり、心細さがふえてくる上に、御息所の女房なども次第に下がって行く者が多くなって、京もずっと下の六条で、東に寄った京極通りに近いのであるから、郊外ほどの寂しさがあって、山寺の夕べの鐘の音にも齋宮の御涙は誘われがちであった。同じく母といっても、宮と御息所は親一人子一人で、片時離れることもない十幾年の御生活であった。齋宮が母君とごいっしょに行かれることはあまり例のないことであつたが、しいてごいっしょにお誘いになつたほどの母君が、死の道だけはただ一人でおいでになつたとお思いになることが、齋宮の尽きぬお悲しみであつた。女房たちを仲介にして求婚をする男は各階級に多かつたが、源氏は乳母たちに、

「自分勝手なことをして問題を起すようなことを宮様にしてはならない」

と親らしい注意を与えていたので、源氏を不快がらせるようなことは慎まねばならぬとおのおの思いもし諫め合いもしているのである。それで情実のためにどう計らおうというようなことも皆はしなかつた。院は宮が齋宮としてお下りになる日の荘厳だつた大極殿の儀式に、この世の人とも思われぬ美貌を御覧になつた時から、恋しく思召されたのであつて、帰京後に、

「院の御所へ来て、私の妹の宮などと同じようにして暮らしては」と宮のことを、故人の御息所へお申し込みになつたこともあるの

である。御息所のほうでは院に寵姫ちよじきが幾人も侍している中へ、後援者らしい者もなくて行くことはみじめであるし、院が始終御病身であることも、母の自分と同じ未亡人の悲しみをさせる結果になるかもしれないぬと院参を躑躅ちぢぢしたものであったが、今になってはましてだれが宮のお世話をして院の後宮へなどおはいりになることができようと女房たちは思っているのである。院のほうでは御熱心に今なおその仰せがある。源氏はこの話を聞いて、院が望んでおいでになる方を横取りのようにして宮中へお入れすることは済まないと思ったが、宮の御様子がいかにも美しく可憐かれんで、これを全然ほかの所へ渡してしまふことが残念な気になって、入道の宮へ申し上げた。こんな隠れた事実があつて決断ができないということをお話した。

「お母様の御息所はきわめて聡明そうめいな人だったので、私の若気のあやまちから浮き名を流させることになりました上、私は一生恨めしい者と思われることになったのですが、私は心苦しく思っているのでございます。私は許されることなしにその人を死なせてしまいました。亡なくなりました少し前に齋宮のことを言い出したのでございます。私としましては、さすがに聞いた以上は遺言を実行する誠意のある者として頼んで行くのであると思えてうれしゅうございまして、無関係な人でも、孤児の境遇になった人には同情されるものなのですから、まして以前のごがございました、亡くなりましたあとでも、昔の恨みを忘れてもらえるほどのことをしたいと思ひまして、齋宮の将来をいろいろと考えている次第なのですが、陛下もずいぶん大人らしくはなつていらつしやいます。お年からいえばまだお若いのですから、少しお年上の女御にょごが侍していられる必要があるかとも思われるのでございます。それもかしながらあなた様

がこうするようにと仰せになるのに随したがわせていただくこうと思います」

と言うと、

「非常によいことを考えてくださいました。院もそんなに御熱心でいらっしやることは、お気の毒なようで、済まないことかもしれませんが、お母様の御遺言であつたからということにして、何もお知りにならない顔で御所へお上げになればよろしいでしょう。このころ院は実際そうしたことに淡泊なお気持ちになつて、仏勤めばかりに気を入れていらっしやるということも聞きますから、そういうことになさいましてもお腹だちになるようなことはないでしょう」

「ではあなた様の仰せが下つたことにしまして、私としてはそれに賛成の意を表したというぐらいのことにいたしておきましょう。私はこんなに院を御尊敬して、御感情を害することのないようにと百方考えてかかっているのですが、世間は何と批評をいたすことでしよう」

などと源氏は申し立てた。のちにはまた何事も素知らぬ顔で二条の院へ齋宮を迎えて、入内じゆだいは自邸からおさせしようという気にも源氏はなつた。夫人にその考えを言つて、

「あなたのいい友だちになると思う。仲よくして暮らすのに似合あわしい二人だと思つた」

と語つたので、女王にょおうも喜んで齋宮の二条の院へ移つておいでになる用意をしていた。入道の宮は兵部卿しやうぶせいの宮が、後宮入りを目的にして姫君を教育していられることを知つておいでになるのであつたから、源氏と宮が不和になつて今日では、その姫君に源氏はどんな態度を取らうとするのであろうと心苦しく思召した。中納言の姫

君は弘徽殿こうきでんの女御にょごと呼ばれていた。太政大臣の猶子ゆうしになっていて、その一族がすばらしい背景を作っているはなやかな後宮人であった。陛下もよいお遊び相手のように思召された。

「兵部卿の宮の中姫君なかひめぎみも弘徽殿の女御と同じ年ごろなのだから、それではあまりお難様ひな遊びの連中がふえるばかりだから、少し年の行った女御がついていて陛下のお世話を申し上げることはうれしいことですよ」

と入道の宮は人へ仰せられて、前齋宮の入内の件を御自身の意志として宮家へお申し入れになったのであった。源氏が当帝のために行き届いた御後見をする誠意に御信頼あそばされて、御自身はおからだがお弱いために御所へおはいりになることはあっても、永ながくはおとどまりになることがおできにならないで、退出しておしまいになるため、そんな点でも少し大人になった女御はあるべきであった。

底本：「全訳源氏物語 上巻」角川文庫、角川書店

1971（昭和46）年8月10日改版初版発行

1994（平成6）年12月20日56版発行

このファイルは、古典総合研究所（<http://www.genji.co.jp/>）で入力されたものを、青空文庫形式にあらためて作成しました。

校正には、2002（平成14）年4月5日71版を使用しました。

入力：上田英代

校正：伊藤時也

2003年4月28日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫(<http://www.aozora.gr.jp/>)で作られました。入力、校正、制作にあたってのは、ボランティアの皆さんです。

源氏物語

蓬生

紫式部

與謝野晶子訳

【テキスト中に現れる記号について】

〈 〉：ルビ

（例）蓬よもぎ

—：ルビの付く文字列の始まりを特定する記号

（例）書物一だ柵なから、

「#」：入力者注 主に外字の説明や、傍点の位置の指定

（例）「#地から3字上げ」

「#地から3字上げ」道もなき蓬よもぎをわけて君ぞこし誰たれにもま

「#地から3字上げ」さる身のこちする (晶子)

源氏が須磨すま、明石あかしに漂泊ひたすらっていたころは、京のほうにも悲しく思
い暮らす人の多数にあつた中でも、しかとした立場を持っている人
は、苦しい一面はあつても、たとえば二条の夫人などは、源氏が旅
での生活の様子もかなりくわしく通信されていたし、便宜が多くて

手紙を書いて出すこともよくできたし、当時無官になっていた源氏の無紋の衣裳も季節に従って仕立てて送るような慰みもあった。真実悲しい境遇に落ちた人というのは、源氏が京を出発した際のこともよそに想像するだけであつた女性たち、無視して行かれた恋人たちがそれぞれであつた。常陸の宮の末摘花は、父君がおかれになつてから、だれも保護する人のない心細い境遇であつたのを、思いがけず生じた源氏との関係から、それ以来物質的に補助されることになつて、源氏の富からいえば物の数でもない情けをかけていたにすぎないのであつたが、受けるほうの貧しい女王一家のためには、盥へ星が映つてきたほどの望外の幸福になつて、生活苦から救われて幾年かを来たのであるが、あの事変後の源氏は、いっさい世の中がいやになつて、恋愛というほどのものでもなかつた女性との関係は心から消しもし、消えもしたふうで、遠くへ立つてからははるばると手紙を送るようなこともしなかつた。まだ源氏から恵まれた物があつてしばらくは泣く泣くも前の生活を続けることができたのであるが、次の年になり、また次の年になりするうちにはまったく底なしの貧しい身の上になつてしまつた。古くからいた女房たちなどは、「ほんとうに運の悪い方ですよ。思いがけなく神か仏の出現なすつたような親切をお見せになる方ができて、人というものはどこに幸運があるかわからないなどと、私たちはありがたく思つたのですがね、人生というものは移り変わりがあつたものだといつても、またまたこんな頼りない御身分になつておしまいになるつて、悲しゅうございますね、世の中は」

と歎くのであつた。昔は長い貧しい生活に慣れてしまつて、だれにもあきらめができていたのであるが、中で一度源氏の保護が加わ

つて、世間並みの暮らしができたことによつて、今の苦痛はいつそう烈しいものに感ぜられた。よかつた時代に昔から縁故のある女房ははじめてここに皆居つくことにもなつて、数が多くなつていたのも、またちりぢりにほかへ行つてしまつた。そしてまた老衰して死ぬ女もあつて、月日とともに上から下まで召使の数が少なくなつていく。もとから荒廢していた邸はいつそう狐の巢のようになった。気味悪く大きくなつた木立ちになく梟の声を毎日邸の人は聞いていた。人が多ければそうしたものも影も見せない木精などという怪しいものも次第に形を顕わしてきたりする不快なことが数しらずあるのである。まだ少しばかり残つている女房は、

「これではしようがございません。近ごろは地方官などがよい邸を自慢に造りますが、こちらのお庭の木などに目をつけて、お売りになりませんかなどと近所の者から言わせてまいります、そうあそばして、こんな怖しい所はお捨てになつてほかへお移りなさいましょ。いつまでも残つております私たちだつてたまりませんから」

などと女主人に勧めるのであつたが、

「そんなことをしてはたいへんよ。世間体もあります。私が生きている間は邸を人手に渡すなどということはできるものでない。こんなに恐い気がするほど荒れていても、お父様の魂が残つて思うと、私はあちこちをながめても心が慰むのだからね」

女王は泣きながらこう言つて、女房たちの進言を思いも寄らぬことにしていた。手道具なども昔の品の使い慣らしたりつばな物のあるのを、生物識りの骨董好きの人が、だれに製作させた物、某の傑作があると聞いて、譲り受けたいと、想像のできる貧乏さを輕蔑して申し込んでくるのを、例のように女房たちは、

「しかたのないことでございますよ。困れば道具をお手放しになるのは」

と言つて、それを金にかえて目前の窮迫から救われようとする時があると、末摘花は頑強がんきやうじゆにそれを拒む。

「私が見るようになと思つて作らせておいてくださつたに違いないのだから、それをつまらない家の装飾品になどさせてよいわけではない。お父様のお心持ちを無視することになるからね、お父様がおかわいそうだ」

ただ少しの助力でもしようとする人をも持たない女王であつた。

兄の禪師ぜんじだけは稀まれに山から京へ出た時に訪ねて来るが、その人も昔風な人で、同じ僧といつても生活する能力が全然ない、脱俗したとほめて言えば言えるような男であつたから、庭の雑草を払わせればきれいになるものとも気がつかない。浅茅あさじは庭の表も見えぬほど茂つて、蓬よもぎは軒の高さに達するほど、葎むべいは西門、東門を閉じてしまつたといつと用心がよくなつたようにも聞こえるが、くずれた土塀どべいは牛や馬が踏みならしてしまい、春夏には無礼な牧童が放牧をしに来た。八月に野分のわかの風が強かつた年以来廊などは倒れたままになり、下屋の板葺いたぶきの建物のほうはわずかに骨が残っているだけ、下男などのそこにとどまつている者はない。廚やぐの煙が立たないでなお生きた人が住んでいるという悲しい邸やしきである。盗人というようながむしやらな連中も外見の貧弱さに愛想あいそをつかせて、ここだけは素通りにしてやつて来なかつたから、こんな野良藪のらやぶのような邸の中で、寢殿しんでんだけは普通の飾りつけがあつた。しかしきれいに掃除そうじをしようとするような心がけの人もない。埃ちりは積もつてもあるべき物の数だけはそろつた座敷に末摘花すえつひはなは暮らしていた。古い歌集を読んだり、

小説を見たりすることですれづれが慰められることにもなるし、物質的に不足の多い境遇も忍んで行けるのであるが、末摘花はそんな趣味も持っていない。それは必ずしもよいことではないが、暇な女性の間で友情を盛った手紙を書きかわすことなどは、多感な年ごろではそれによつて自然の見方も深くなつていき、木や草にも慰められることにもなるが、この女王は父宮が大事にお扱いになつた時と同じ心持ちでいて、普通の人の交際はいつさい避けて友人を持つていないのである。親戚関係があつても親しもうとせず、好意を寄せようとしめない態度は手紙を書かぬ所にかがわれもするのである。古くさい書物一柵だなから、唐守からもり、藐姑射はこやの刀自とじ、赫耶姫物語などを絵に描いた物を引き出して退屈しのぎにしていた。古歌などもよい作を選んで、端書きも作者の名も書き抜いて置いて見るのがおもしろいのであるが、この人は古紙屋紙ふるかんやがみとか、檀紙だんしとかの湿り気を含んで厚くなつた物などへ、だれもの知っている新味などは微塵みじんもないよくなものの書き抜いてしまつてあるのを、物思いのつた時などには出して拵ひろげていた。今の婦人がだれもするように経を讀んだり仏勤めをしたりすることは生意気だと思ふのかだれも見人はないのであるが、数珠すしを持つようなことは絶対にない。こんなふうにも末摘花は古典的であつた。

侍従という乳母めのとの娘などは、主家を離れないで残つてゐる女房の一人であつたが、以前から半分ずつは勤めに出ていた齋院かがお亡かくれになつてからは、侍従もしかたなしに女王にようの母君の妹で、その人だけが身分違いの地方官の妻になつてゐる人があつて、娘をかしくいて、若いよい女房を幾人でもほしがる家へ、そこは死んだ母もおりふし行つてゐた所であるからと思つて、時々そこへ行つて勤めて

いた。末摘花は人に親しめない性格であったから、叔母おばともあまり交際をしなかった。

「お姉様は私を軽蔑けいべつなすつて、私のいることを不名誉にしているらっしゃったから、姫君が気の毒な一人ぼっちでも私は世話をしあげないのだよ」

などという悪態口も侍従に聞かせながら、時々侍従に手紙を持たせてよこした。初めから地方官級の家に生まれた人は、貴族をまねて、思想的にも思い上がった人になっている者も多いのに、この夫人は貴族の出でありながら、下の階級へはいつて行く運命を生まれながらに持っていたものか、卑しい性格の叔母君であった。自身が、家門の顔汚しのように思われていた昔の腹いせに、常陸ひたちの宮の女王を自身の娘たちの女房にしてやりたい、昔風なところはあるが気だてのよい後見役ができるであろうとこんなことを思つて、

「#ここから1字下げ」

時々私の宅へもおいでくださったらいかがですか。あなたのお琴の音ねも伺いたがる娘たちもおります。

「#ここで字下げ終わり」

と言つて来た。これを実現させようと叔母は侍従にも促すのであるが、末摘花は負けじ魂からではなく、ただ恥ずかしくきまりが悪いために、叔母の招待に応じようとしないのを、叔母のほうではくやしく思っていた。そのうちに叔母の良人おっとが九州の大式だいにに任命された。娘たちをそれぞれ結婚させておいて、夫婦で任地へ立とうとする時にもまだ叔母は女王を伴つて行きたがって、

「遠方へ行くことになりましたと、あなたが心細い暮らしをしておいでになるのを捨てておくことが気になってなりません。ただ今まで

もお構いはしませんでしたが、近い所にいるうちはいつでもお力になれる自信がありましたので」

と体裁よく言^{こと}づつて誘いかけるのも、女王が聞き入れないから、「まあ憎らしい。いばつていらつしやる。自分だけはえらいつもりでも、あの藪^{やぶ}の中の人を大将さんだつて奥様らしくは扱つてくたさらないだろう」

と言つてののしつた。そのうちに源氏一宥^{ゆるめん}免の宣旨が下り、帰京の段になると、忠実に待つていた志操の堅さをだれよりも先に認められようとする男女に、それぞれ有形無形の代償を喜んで源氏の払つた時期にも、末摘花だけは思い出されることもなくて幾月かがそのうちたつた。もう何の望みもかけられない。長い間不幸な境遇に落ちていた源氏のために、その勢力が宮廷に復活する日があるようにと念じ暮らしたものであるのに、賤^{いや}しい階級の人でさえも源氏の再び得た輝かしい地位を喜んでいる時にも、ただよそのこととして聞いていねばならぬ自分でなければならなかつたか、源氏が京から追われた時には自分一人の不幸のように悲しんだが、この世はこんな不公平なものであるのかと思つて末摘花は恨めしく苦しく切なく一人で泣いてばかりいた。

大貳の夫人は、私の言つたとおりじゃないか。どうしてあんな見る影もない人を源氏の君が奥様の一人だと思ひになるものかね、仏様だつて罪の軽い者ほどよく導いてくださるのだ。手もつけられないほどの貧乏女でいて、いばつていて、宮様や奥さんのいらつしやつた時と同じように思い上がつていいるのだから始末が悪いなどと思つていつそう軽蔑^{けいべつ}的に末摘花を見た。

「ぜひ決心をして九州へおいでなさい。世の中が悲しくなる時には、

人は進んでも旅へ出るではありませんか。田舎いなかとはいやな所のようにお思いになるかしりませんが、私は受け合ってあなたを楽しくさせます」

口前よく熱心に同行を促すと、貧乏に飽いた女房などは、「そうなければいいのに、何のたのむ所もない方が、どうしてまた意地をお張りになるのだろう」

と言つて、末摘花を批難した。侍従も大弐の甥おいのような男の愛人になつていて、京へ残ることもできない立場から、その意志でもなく女王のもとを去つて九州行きをすることになつていた。

「京へお置きして参ることは気がかりでなりませんからいらつしやいませ」

と誘うのであるが、女王の心はなお忘れられた形になつている源氏を頼みにしていた。どんなに時がたつても自分の思い出される機会のないわけではない、あれほど堅い誓いを自分にしてくれた人の心は変わつていないはずであるが、自分の運の悪いために捨てられたとも人からは見られるようなことになつていたのであるう、風の便たよりでも自分の哀れな生活が源氏の耳にはいればきつと救つてくれるに違いないと、これはずっと以前から女王の信じているところであつて、邸やしきも家も昔に倍した荒廢のしかたではあるが、部屋の中の道具類をそこばくの金に変えていくようなことは、源氏の来た時に不都合であるからと忍耐を続けているのである。気をめいらせて泣いている時のほうが多い末摘花の顔は、一つの木の実だけを大事に顔に当てて持つている仙人せんじんとも言つてよい奇怪な物に見えて、異性の興味を惹く価値などはない。気の毒であるからくわしい描写はしないことにする。

冬にはいればはいるほど頼りなさはひどくなって、悲しく物思いはかりして暮らす女王だった。源氏のほうでは故院のための盛んな八講を催して、世間がそれに湧き立っていた。僧などは平凡な者を呼ばずに学問と徳行のすぐれたのを選んで招じたその物事に、女王の兄の禅師も出た帰りに妹君を訪ねて来た。

「源大納言さんの八講に行つたのです。たいへんな準備でね、この世の浄土のように法要の場所はできていましたよ。音楽も舞楽もたいたしたものでしたよ。あの方はきっと仏様の化身だろう、五濁の世にどうして生まれておいでになつたらう」

こんな話をして禅師はすぐに帰つた。普通の兄弟のようには話し合わない二人であるから、生活苦も末摘花は訴えることができないのである。それにしてもこの不幸なみじめな女を捨てて置くというのは、情けない仏様であると末摘花は恨めしかった。こんな気のした時から、自分はもう顧みられる望みがないのだろうとようやく思うようになった。

そんなころであるが大弐の夫人が突然訪ねて来た。平生はそれほど親密にはしていないのであるが、つれて行きたい心から、作つた女王の衣裳なども持って、よい車に乗つて来た得意な顔の夫人がにわかには常陸の宮邸へ現われたのである。門をあけさせている時から目にはいつてくるものは荒廃そのもののような寂しい庭であつた。門の扉も安定がなくなつていて倒れたのを、供の者が立て直したりする騒ぎである。この草の中にもどこかに三つだけの道はついていゝるはずであると皆が捜した。そしてやっと建物の南向きの縁の所へ車を着けた。

きまりの悪い迷惑なことと思ひながら女王は侍従を応接に出した。

煤^{すす}けた几帳^{きちょう}を押し出しながら侍従は客と対したのである。容貌^{ようぼう}は以前に比べてよほど衰えていた。しかしやつれながらもきれいで、女王の顔に代えたい気がする。

「もう出発しなければならぬのですが、こちらのことが気がかりなものですから、今日は侍従の迎えがてらお訪^{たず}ねしました。私の好意をくんでくださらないで、御自分がちよつとでも来てくださることを御承知にならないことはやむをえません。せめて侍従だけをよこしていただくお許しをいただきに來たのです。まあお気の毒なふうで暮らしていらつしやるのですね」

こう言つたのであるから、続いて泣いてみせねばならないのであるが、実は大式夫人は九州の長官夫人になつて出発して行く希望に燃えているのである。

「宮様がおいでになつたころ、私の結婚相手が悪いからつて、交際するのをおきらいになつたものですから、私らもつかげ離れた冷淡なふうになつていましたものの、それからこちら様は源氏の大將さんなどと御結婚をなさるような御幸運でいらつしやいましたから、晴れがましくしてお出入りもしにくかつたのです。しかし人間世界は幸福なことばかりありませんからね、その中でわれわれ階級の者がかえつて気楽なんですよ。及びもない懸隔のあるお家^{うち}でしたが、こちらはお気の毒なことになつてしまひまして、私も心配なんです。近くにおりますうちは、何かの場合に力にもなれると思つていましたものの、遠い所へ出て行くことになりますと、とてもあなたのこと気がなつてなりません」

と夫人は言うのであるが、女王は心の動いたふうもなかつた。

「御好意はうれしいのですが、人並みの人にもなれない私はこのま

まここで死んで行くのが何よりもよく似合うことだろうと思います」

とだけ末摘花は言う。

「それはそうお思いになるのはごもつともですが、生きている人間であつて、こんなひどい場所に住んでいるのなどはほかにめつたにないでしょう。大将さんが修繕をしてくだすつたら、またもう一度玉の台にもなるでしょうと期待されますがね。近ごろはどうしたことでしよう、兵部卿の宮の姫君のほかはだれも嫌いになつておしまひになつたふうですね。昔から恋愛関係をたくさん持つていらつしやつた方でしたが、それも皆清算しておしまひになりましたね。ましてこんなみじめな生き方をしていらつしやる人を、操を立てて自分を待つていてくれたかと受け入れてくださることはむずかしいでしょうね」

こんなよけいなことまで言われてみると、そうであるかもしれないと末摘花は悲しく泣き入つてしまった。しかも九州行きを肯うふうは微塵もない。夫人はいろいろと誘惑を試みたあとで、

「では侍従だけでも」

と日の暮れていくのを見てせきたてた。侍従は名残を惜しむ間もなく、泣く泣く泣く女王に、

「それでは、今日はあんなにおつしやいますから、お送りにだけついでまいります。あちらがああおつしやるのももつともですし、あなた様が行きたく思召さないのも御無理だとは思われませんし、私は中に立つてつらくてなりませんから」

と言う。この人までも女王を捨てて行こうとするのを、恨めしくも悲しくも末摘花は思うのであるが、引き止めようもなくてただ泣

くばかりであった。形見に与えたい衣服も皆悪くなっていて長い間のこの人の好意に酬むくいる物がなくて、末摘花は自身の抜け毛を集めて鬘かすねにした九尺ぐらゐの髪かみの美しいのを、雅味のある箱に入れて、昔のよい薫香くんこう——壺つぼをそれにつけて侍従へ贈った。

「#ここから1字下げ」

「絶ゆまじきすぢを頼みし玉かづら思ひのほかにかけ離れぬる

「#ここで字下げ終わり」

死んだ乳母またが遺言したこともあるからね、つまらない私だけれど一生あなたの世話をしたいと思っていた。あなたが捨ててしまうのももつともだけれど、だれがあなたの代わりになって私を慰めてくれる者があると思つて立つて行くのだらうと思つと恨めしいのよ」「
と言つて、女王は非常に泣いた。侍従も涙でものが言えないほどになつていた。

「乳母またが申し上げましたことはむろんでございますが、そのほかにもごいっしょに長い間苦勞をしまりましたのに、思いがけない縁に引かれて、しかも遠方へまで行ってしましますとは」

と言つて、また、

「#ここから1字下げ」

「玉かづら絶えてもやまじ行く道のたむけの神もかけて誓はん

「#ここで字下げ終わり」

命のございます間はあなた様に誠意をお見せします」

などとも言う。

「侍従はどうしました。暗くなりましたよ」

と大式夫人だいしきに小言こことを言われて、侍従は夢中で車に乗ってしまつた。そしてあとばかりが顧みられた。困りながらも長い間離れて行かなかつた人が、こんなふうにして別れて行つたことで、女王はますます心細くなつた。だれも雇い手のないような老いた女房までが、「もつともですよ。どうしてこのままいられるものですか。私たちだつてもう我慢ができませんよ」

こんなことを言つて、ほかへ勤める手蔓てむすを捜し始めて、ここを出る決心をしたらしいことを言い合うのを聞くことも末摘花の身にはつらいことであつた。十一月になると雪や霽みぞれの日が多くなつて、ほかの所では消えている間があつても、ここでは丈の高い枯れた雑草の蔭かげなどに深く積もつたものは量かさが高くなるばかりで越こしの白山はくせんをそこに置いた気がする庭を、今はもうだれ一人出入りする下男もなかつた。こんな中につれづれな日を送るよりしかたのない末摘花の女王であつた。泣き合い笑い合うこともあつた侍従がいなくなつてからは、夜の塵ちりのかかつた帳台の中であた一人寂しい思いをして寝た。

源氏は長くこがれ続けた紫夫人のもとへ帰りえた満足感が大きくて、ただの恋人たちの所などへは足が向かない時期でもあつたから、常陸ひたちの宮の女王はまだ生きているだろうかというほどのことは時々心に上らないことはなかつたが、捜し出してやりたいと思うことも、急ぐことと思われないでいるうちにその年も暮れた。四月ごろに花はな散里ちるさとを訪ねて見たくなくて夫人の了解を得てから源氏は二条の院を出た。幾日か続いた雨の残り雨らしいものが降つてやんだあとで月

が出てきた。青春時代の忍び歩きの思い出される艶な夕月夜であった。車の中の源氏は昔をうつらうつらと幻に見ていると、形もないほどに荒れた大木が森のような邸の前に来た。高い松に藤がかかつて月の光に花のなびくのが見え、風といっしょにその香がなつかしく送られてくる。橘とはまた違った感じのする花の香に心が惹かれて、車から少し顔を出すようにしてながめると、長く枝をたれた柳も、土塀のない自由さに乱れ合っていた。見たことのある木立ちであるとな源氏は思ったが、以前の常陸の宮であることに気がついた。源氏は物哀れな気持ちになって車を止めさせた。例の惟光はこんな微行にはずれたことのない男で、ついて来ていた。

「ここは常陸の宮だったね」

「さようでございます」

「ここにいた人がまだ住んでいるかもしれない。私は訪ねてやらねばならないのだが、わざわざ出かけることもたいそうになるから、この機会に、もしその人がいれば逢ってみよう。はいって行って尋ねて来てくれ。住み主がだれであるかを聞いてから私のことを言わないと恥をかくよ」

と源氏は言った。

末摘花の君は物惱ましい初夏の日に、その昼間うたた寝をした時の夢に父宮を見て、さめてからも名残の思いにとらわれて、悲しみながら雨の洩って濡れた廂の室の端のほうを拭かせたり部屋の中を片づけさせたりなどして、平生にも似ず歌を思ってみたのである。

「#ここから2字下げ」

亡き人を恋ふる袂のほどなきに荒れたる軒の雫さへ添ふ

「#ここで字下げ終わり」

こんなふうには、寂しさを書いていた時が、源氏の車の止められた時であった。

惟光は邸の中へはいつてあちらこちらと歩いて見て、人のいる物の音の聞こえる所があるかと捜したのであるが、そんな物はない。自分の想像どおりにだれもない、自分は往き返りにこの邸は見るが、人の住んでいる所とは思われなかったのだからと思って惟光が足を返そうとする時に、月が明るくさし出したので、もう一度見ると、格子を二間ほど上げて、その御簾は人ありげに動いていた。これが目にはいった刹那は恐ろしい気さえしたが、寄って行って声をかけると、老人らしく咳を先に立てて答える女があった。

「いらっしゃったのはどなたですか」

惟光は自分の名を告げてから、

「侍従さんという方にちよつとお目にかかりたいのですが」

と言った。

「その人はよそへ行きました。けれども侍従の仲間の者がおります」

と言う声は、昔よりもずっと老人じみてきてはいるが、聞き覚えのある声であった。家の中の人は惟光が何であったかを忘れていた。狩衣姿の男がそつとはいって来て、柔らかな調子でものを言うのであったから、あるいは狐か何かではないかと思つたが、惟光が近づいて行って、

「確かなことをお聞かせくださいませんか。こちら様が昔のままでおいになるかどうかお聞かせください。私の主人のほうでは変心

も何もしておいでにならない御様子です。今晚も門をお通りになつて、訪ねてみたいと思召すふうで車を止めておいでになります。どうお返辞をすればいいでしょう、ありのままのお話を私には御遠慮なくして下さい」

と言うと、女たちは笑い出した。

「変わっていらつしやればこんなお邸にそのまま住んでおいでになるはずありません。御推察なさいましてあなたからよろしくお返辞を申し上げてください。私どものような老人でさえ経験したことのないような苦しみをなめて今日までお待ちになったのでございますよ」

女たちは惟光にもっともっと話したいというふうであつたが、惟光は迷惑に思つて、

「いやわかりました。ともかくそう申し上げます」
 と言ひ残して出て来た。

「なぜ長くかかったの、どうだったかね、昔の路を見いだせない蓬原がはひになつているね」

源氏に問われて惟光は初めからの報告をするのであつた。

「そんなふうにして、やっと人間を発見したのでございます。侍従の叔母おばで少将とか申しました老人が昔の声で話しました」

惟光はなお目に見た邸内の様子をくわしく言う。源氏は非常に哀れに思った。この廢邸じみた家に、どんな気持ちで住んでいることであろう、それを自分は今まで捨てていたと思うと、源氏は自分ながら冷酷であつたと省みられるのであつた。

「どうしようかね、こんなふうに出かけて来ることも近ごろは容易でないのだから、この機会でなくては訪ねられないだろう。すべて

のことを綜合そうじゆうして考えてみても昔のままに独身どくしんでいる想像そうざうのつく人だ」

と源氏は言いながらも、この邸へは行って行くことにはなお躊躇ちゅうちゆがされた。この実感からよい歌を詠よんでまず贈りたい気きのする場合であるが、機敏きびんに返歌のできないことも昔のままであつたなら、待たされる使いがどんなに迷惑めいわくをせるかしのれないと思つてそれはやめることにした。惟光も源氏がすぐには行って行くことは不可能だと思つた。

「とても中をお歩きになれないほどの露つゆでございます。蓬よもぎを少し払はわせましてからおいになりましたら」

この惟光これみつの言葉を聞いて、源氏は、

「#ここから2字下げ」

尋ねてもわれこそ訪とはめ道もなく深き蓬よもぎのもとの心を

「#ここで字下げ終わり」

と口ずさんだが、やはり車からすぐに下りてしまった。惟光は草の露を馬の鞭むちで払いながら案内した。木の枝から散る雫しずくも秋の時雨のように荒く降るので、傘かさを源氏にさしかけさせた。惟光が、
「木の下露は雨にまされり（みさぶらひ御笠みかさと申せ宮城野みやぎのの）でございます」

と言う。源氏の指貫さしぬきの裾すそはひどく濡ぬれた。昔でさえあるかないかであつた中門などは影もなくなっている。家の中へはいるのもむき出しな気きのすることであつたが、だれも人は見ていなかった。

女王にょおうは望みをかけて来たことの事実になつたことはうれしかった

が、りっぱな姿の源氏に見られる自分を恥ずかしく思った。大弐の夫人の贈った衣服はそれまで、いやな気がしてよく見ようとした。大弐の贈ったの、女房らが香を入れる唐櫃からびつにしまつて置いたからよい香のついたのに、その人々からしかたなしに着かえさせられて、煤すすけた几帳きちようを引き寄せてすわっていた。源氏は座に着いてから言った。

「長くお逢いしないでも、私の心だけは変わらずにあなたを思っていたのですが、何ともあなたが言つてくださらないものだから、恨めしくて、今までためすつもりで冷淡を装っていたのですよ。しかし、三輪みわの杉すぎではないが、この前の木立ちを目に見ると素通りができなくてね、私から負けて出ることになりましたよ」

几帳きちようの垂たれ絹を少し手であけて見ると、女王は例のようにただ恥ずかしそうにすわっていて、すぐに返辞はようしない。こんな住居すまいにまで訪たずねて来た源氏の志の身にしむことによつてやつと力づいて何かを少し言った。

「こんな草原の中で、ほかの望みも起こさずに待つていてくださつただのだから私は幸福を感じる。またあなただつて、あなたの近ごろの心持ちもよく聞かないままで、自分の愛から推して、愛を持っていてくださると信じて訪ねて来た私を何と思ひますか。今日まであなたに苦勞をさせておいたことも、私の心からのことでなくて、その時は世の中の事情が悪かつたのだと思つて許してくださいさるでしょう。今後の私が誠実の欠けたようなことをすれば、その時は私が十分に責任を負いますよ」

などと、それほどに思わぬことも、女を感動さすべく源氏は言つた。泊まつて行くこともこの家の様子と自身とが調和の取れないことを思つて、もつともらしく口実を作つて源氏は帰ろうとした。自

身の植えた松ではないが、昔に比べて高くなつた木を見ても、年月の長い隔たりが源氏に思われた。そして源氏の自身の今日の身の上と逆境にいたころとが思い比べられもした。

「#ここから1字下げ」

「藤波ふじなみの打ち過ぎがたく見えつるはまつこそ宿のしるしなりけれ

「#ここで字下げ終わり」

数えてみればずいぶん長い月日になることでしょうね。物哀れになりますよ。またゆるりと悲しい旅人だった時代の話も聞かせに来ましょう。あなたもどんなに苦しかったかという辛苦の跡も、私ではなくては聞かせる人がないでしょう。とまちがいかもしれぬが私は信じているですよ」

などと源氏が言うと、

「#ここから2字下げ」

年を経て待つしるしなきわが宿は花のたよりに過ぎぬばかりか

「#ここで字下げ終わり」

と低い声で女王は言った。身じろぎに知れる姿も、袖そでに含んだにおいも昔よりは感じよくなつた気がすると思つた。落ちようとする月の光が西の妻戸の開いた口からさしてきて、その向こうにあるはずの廊もなくなっていたし、廂ひさしの板もすっかり取れた家であるから、明るく室内が見渡された。昔のままに飾りつけのそろっていることは、忍ぶ草のおい茂つた外見よりも風流に見えるのであつ

た。昔の小説に親の作った堂を毀つた話もあるが、これは親のしたままを長く保つていく人として心の惹かれるところがあると源氏は思った。この人の差恥心の多いところもさすがに貴女であるとうなずかれて、この人を一生風変わりな愛人と思おうとした考えも、いろいろなことに紛れて忘れてしまっていたころ、この人はどんなに恨めしく思ったであろうと哀れに思われた。ここを出てから源氏の訪ねて行った花散里も、美しい派手な女というのではなかったから、末摘花の醜さも比較して考えられることがなく済んだのであろうと思われる。

賀茂祭り、齋院の御襖などのあるころは、その用意の品という名義で諸方から源氏へ送つて来る物の多いのを、源氏はまたあちらこちらへ分配した。その中でも常陸の宮へ贈るのは、源氏自身が何かと指図をして、宮邸に足らぬ物を何かと多く加えさせた。親しい家司に命じて下男などを宮家へやって邸内の手入れをさせた。庭の蓬を刈らせ、応急に土塀の代わりの板塀を作らせなどした。源氏が妻と認めての待遇をし出したと世間から見られるのは不名誉な気がして、自身で訪ねて行くことはなかった。手紙はこまごまと書いて送ることを怠らない。二条の院にすぐ近い地所へこのごろ建築させている家のことを、源氏は末摘花に告げて、

「#ここから1字下げ」

そこへあなたを迎えようと思う、今から童女として使うのによい子供を選んで馴らしておおきなさい。

「#ここで字下げ終わり」

ともその手紙には書いてあった。女房たちの着料までも気をつけて送つて来る源氏に感謝して、それらの人々は源氏の二条の院のほ

うを向いて拝んでいた。一時的の恋にも平凡な女を相手にしなかった源氏で、ある特色の備わった女性には興味を持って熱心に愛する人として源氏をだれも知っているのであるが、何一つすぐれた所のない末摘花をなぜ妻の一人としてこんな取り扱いをするのであろう。これも前生の因縁ごとであるに違いない。もう暗い前途があるばかりのように見切りをつけて、女王の家を去った人々、それは上から下まで幾人もある旧召使が、われもわれもと再勤を願って来た。善良さは稀まれに見るほどの女性である末摘花のもとに使われて、気楽に暮らした女房たちが、ただの地方官の家などに雇われて、気まずいことの多いのにあきれて帰って来る者もある。見えすいたような追従も皆言ってくる。昔よりいつそう強い勢力を得ている源氏は、思いやりも深くなった今の心から、扶たすけ起こそうとしている女王の家は、人影もにぎやかに見えてきて、繁しげりほうだいですごいものに見えた木や草も整理されて、流れに水の通るようになり、立ち木や草の姿も優美に清い感じのするものになっていった。職ほを欲しがっている下家しもけいし司級の人は、源氏が一人の夫人の家として世話をやく様子を見て、仕えたいと申し込んで来て、宮家に執事もできた。

末摘花は二年ほどこの家において、のちには東の院へ源氏に迎えられ、夫婦として同室に暮らすようなことはめつたになかったのであるが、近い所であったから、ほかの用で来た時に話して行くようなことくらいはよくして、軽蔑けいべつした扱いは少しもしなかったのである。大貳の夫人が帰京した時に、どんな驚き方をしたか、侍従が女王の幸福を喜びながらも、時が待ち切れずに姫君を捨てて行った自身のあやまちをどんなに悔いたかというようなことも、もう少し述べておきたいのであるが、筆者は頭が痛くなってきたから、またほかの

機会に思い出して書くことにする。

底本：「全訳源氏物語 上巻」角川文庫、角川書店

1971（昭和46）年8月10日改版初版発行

1994（平成6）年12月20日56版発行

このファイルは、古典総合研究所 (<http://www.genji.co.jp/>)
で入力されたものを、青空文庫形式にあらためて作成しました。

校正には、2002（平成14）年4月5日71版を使用しました。

入力：上田英代

校正：伊藤時也

2003年5月9日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたってのは、ボランティアの皆さんです。

源氏物語

関屋

紫式部

與謝野晶子訳

【テキスト中に現れる記号について】

〈 〉：ルビ

（例）逢坂あふさか

一：ルビの付く文字列の始まりを特定する記号

（例）翌年ひたちちのすけ一常陸介

「#」：入力者注 主に外字の説明や、傍点の位置の指定

（例）「#地から3字上げ」

「#地から3字上げ」逢坂あふさかは関せきの清水しみづも恋人こいびとのあつき涙なみだもな

「#地から3字上げ」がるところ (晶子)

以前の伊予介いよのすけは院いんがお崩れかになった翌年ひたちちのすけ一常陸介ひたちちのすけになって任地にんちへ下つたので、昔むかしの帚木はきぎもつれて行った。源氏げんじが須磨すまへ引きこもった噂うわさも、遠い国とほくで聞いて、悲しく思いやらないのではなかったが、音信おんじんをする便たよりすらなくて、筑波つくはおろしに落ち着おちつきかぬ心を抱かかきながら消

息の絶えた年月を空蟬は重ねたのである。限定された国司の任期とは違つて、いつを限りとも予想されなかつた源氏の放浪の旅も終つて、帰京した翌年の秋に常陸介は国を立て来た。一行が逢坂の関を越えようとする日は、偶然にも源氏が石山寺へ願ほどきに参詣する日であつた。京から以前一紀伊守であつた息子その他の人が迎えに来ていて源氏の石山一詣でを告げた。途中が混雑するであろうから、こちらは早く逢坂山を越えておこうとして、常陸介は夜明けに近江の宿を立て道を急いだのであるが、女車が多くてはかがゆかない。打出の浜を来るころに、源氏はもう粟田山を越えたということ、前駆を勤めている者が無数に東へ向かつて来た。道を譲るくらいでは済まない人数なのであつたから、関山で常陸の一行は皆下馬してしまつて、あちらこちらの杉の下に車などを昇ぎおろして、木の間にかしこまりながら源氏の通過を目送しようとした。女車も一部分はあとへ残し、一部分は先へやりなどしてあつたのであるが、なおそれでも族類の多い派手な地方長官の一門と見えた。そこには十台ほどの車があつて、外に出した袖の色の好みは田舎びずにきれいであつた。齋宮の下向の日に出る物見車が思われた。源氏の光がまた發揮される時代になつていて、希望して来た多数の随従者は常陸の一行に皆目を留めて過ぎた。九月の三十日であつたから、山の紅葉は濃く淡く紅を重ねた間に、霜枯れの草の黄が混じつて見渡される逢坂山の関の口から、またさつと一度に出て来た襖姿の侍たちの旅装の厚織物やくくり染めなどは一種の美をなしていた。源氏の車は簾がおろされていた。今は右衛門佐になつている昔の小君を近くへ呼んで、

「今日こうして関迎えをした私を姉さんは無関心にも見まいね」

などと言った。心のうちにはいろいろな思いが浮かんで来て、恋しい人と直接言葉がかわしたかった源氏であるが、人目の多い場所ではどうしようもないことであつた。女も悲しかった。昔が昨日のように思われて、はんもん煩悶もそれに続いた煩悶がされた。

「#ここから2字下げ」

行くと来とせきとめがたき涙をや絶えぬ清水しみづと人は見るらん

「#ここで字下げ終わり」

自分のこの心持ちはお知りにならないであろうと思うとはかなま
れた。

源氏が石山寺を出る日に右衛門佐が迎えに来た。源氏に従つて寺へ来ずに、姉夫婦といつしよに京へはいつてしまったことを佐すけは謝した。少年の時から非常に源氏に愛されていて、源氏の推薦で官につくこともできた恩もあるのであるが、源氏の免職されたころ、当路者ににらまれることを恐れて常陸へ行つてしまったことで、少しおもしろくなく源氏は思っていたが、だれにもそのことは言わなかつた。昔ほどではないがその後も右衛門佐うえもんすけは家に属した男として源氏の庇護ひしてを受けることになっていた。紀伊守きののかみといった男も今はわずかな河内守かわちのかみであつた。その弟の右近衛丞うこんえのじょうで解職されて、須磨へ源氏について行った男が特別に取り立てられていくのを見て、右衛門佐も河内守も過去の非を悔いた。なぜ一時の損得などを大事に考えたのであろうと自身を責めていた。

佐すけを呼び出して、源氏は姉君へ手紙をことづてたいと言つた。他の人ならもう忘れていそうな恋を、なおも思い捨てない源氏に右衛

門佐は驚いていた。

「#ここから1字下げ」

あの日私は、あなたとの縁はよくよく前生で堅く結ばれて来たものであるうと感じましたが、あなたはどうお思いになりましたか。

「#ここから2字下げ」

わくらはに行き逢ふみちを頼みしもなほかひなしや塩ならぬ海

「#ここから1字下げ」

あなたの関守がどんなにうらやましかったか。

「#ここで字下げ終わり」

という手紙である。

「あれから長い時間がたっていて、きまりの悪い気もするが、忘れない私の心ではいつも現在の恋人のつもりでいるよ。でもこんなことをしてはいっそう嫌われるのではないかね」

こう言つて源氏は渡した。佐はもつたいない気がしながら受け取つて姉の所へ持参した。

「ぜひお返事をしてください。以前どおりにはしてくださらないだろう、疎外されるだろうと私は覚悟していましたが、やはり同じように親切にしてくださるのですよ。この使いだけは困ると思ひましたけれど、お断わりなどできるものじゃありません。女のあなたがあの御愛情にほだされるのは当然で、だれも罪とは考えませんよ」
などと右衛門佐は姉に言うのであった。今はましてがらでない気がする空蝉であつたが、久しぶりで得た源氏の文字に思わずほんとうの心が引き出されたか返事を書いた。

「#ここから2字下げ」

逢坂あふさかの関せきやいかなる関せきなれば繁しげきなげきの中を分くらん

「#ここから1字下げ」

夢のような気がいたしました。

「#ここで字下げ終わり」

とある。恨めしかった点でも、恋しかった点でも源氏には忘れがたい人であったから、なおおりおりは空蝉の心を動かそうとする手紙を書いた。そのうち常陸ひたち介は老齡のせいひたちか病氣ばかりするようになつて、前途を心細がり、悲観してしまい、息子むすこたちに空蝉のことばかりをくどく遺言していた。

「何もかも私の妻の意志どおりにせい。私の生きている時と同じように仕えねばならん」

と繰り返すのである。空蝉は薄命な自分はこの良人おとこにまで死別して、けわまたも険しい世の中に漂泊さすらえるのであろうかと歎なげいている様子を、常陸介は病床に見ると死ぬことが苦しく思われた。生きていたいと思つても、それは自己の意志だけでどうすることもできないことであつたから、せめて愛妻のために魂だけをこの世に残して置きたい、自分の息子たちの心も絶対には信ぜられないのであるからと、言いもし、思いもして悲しんだがやはり死んでしまった。息子たちが、当分は、

「あんなに父が頼んでいったのだから」

と表面だけでも言っていてくれたが、空蝉の堪えられないような意地の悪さが追い追に見えて来た。世間ありきたりの法則どおり

に継母はこうして苦しめられるのであると思つて、空蝉はすべてを自身の薄命のせいにして悲しんでいた。河内守だけは好色な心から、継母に今も追従をして、

「父があんなにあなたのことを頼んで行かれたのですから、無力ですが、それでもあなたの御用は勤めたいと思いますから、遠慮をなさらないでください」

などと言つて来るのである。あさましい下心したうらみも空蝉は知っていた。不幸な自分は良人に死に別れただけで済まず、またまたこんな情けないことが近づいてこようとすると悲しがつて、だれにも相談をせずに尼になってしまった。常陸介の息子や娘もさすがにこれを惜しがつた。河内守は恨めしがつた。

「私をきらつて尼におなりになつたつてまだ今後長く生きて行かねばならないのだから、どうして生活をするつもりだろう、余計なことをしたものだ」

などと言つた。

底本：「全訳源氏物語 上巻」角川文庫、角川書店

1971（昭和46）年8月10日改版初版発行

1994（平成6）年12月20日56版発行

このファイルは、古典総合研究所（<http://www.genji.co.jp/>）で入力されたものを、青空文庫形式にあらためて作成しました。

校正には、2002（平成14）年4月5日71版を使用しました。

入力：上田英代

校正：kumi

2003年5月9日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

源氏物語

絵合

紫式部

與謝野晶子訳

【テキスト中に現れる記号について】

〈 〉：ルビ

（例） 遙か^{はる}

—：ルビの付く文字列の始まりを特定する記号

（例） 御一寵愛^{ちよつあひ}

「#」：入力者注 主に外字の説明や、傍点の位置の指定

（例） 「#地から3字上げ」

「#地から3字上げ」あひがたきいつきのみことおもひてき

「#地から3字上げ」さらに遙か^{はる}になりゆくものを（晶子）

前齋宮^{ぜんさいくわう}の入内^{いしゅだい}を女院は熱心に促しておいでになった。こまこまとした入用の品々もあろうがすべてを引き受けてする人物がついていないことは気の毒であると、源氏は思いながらも院への御遠慮があつて、今度は二条の院へお移しすることも中止して、傍觀者らしく

見せてはいたが、大体のことは皆源氏が親らしくしてする指図さしずで運んでいった。院は残念がつておいでになつたが、負けた人は沈黙すべきであると思召おしめして、手紙をお送りになることも絶えた形であつた。しかも当日になつて院からのたいしたお贈り物が来た。御衣服、櫛くしの箱、乱れ箱、香壺かういの箱には幾種類かの薰香くんかうがそろえられてあつた。源氏が拝見することを予想して用意あそばされた物らしい。源氏の来ていた時であつたから、女別当にょべつとうはその報告をして品々を見せた。源氏はただ櫛の箱だけを丁寧に拝見した。繊細な技巧でできた結構な品である。挿さし櫛のはいつた小箱につけられた飾りの造花に御歌が書かれてあつた。

「#ここから2字下げ」

別れ路ぢに添へし小櫛をかごとにてはるけき中と神やいさめし

「#ここで字下げ終わり」

この御歌に源氏は心の痛くなるのを覚えた。もつたいないことを計らつたものであると、源氏は自身のかつてした苦しい思いに引き比べて院の今のお心持ちも想像することができてお気の毒でならぬ。齋王として伊勢へおいでになる時に始まつた恋が、幾年かの後に神聖な職務を終えて女王にょおうが帰京され御希望の実現されてよい時になつて、弟君の陛下にちひの後宮しうきゆうへその人がはいられるということどんな気があそばすだろう。閑暇かんかな地位へお退のきになつた現今の院は、何事もなしうる主権に離れた寂しさというようなものをお感じにならないであろうか、自分であれば世の中が恨めしくなるに違ひないなどと思うと心が苦しくて、何故女王を宮中へ入れるようなよけい

なことを自分は考えついて御心を悩ます結果を作ったのであろう、お恨めしく思われた時代もあつたが、もともと優しい人情深い方であるのにと、源氏は歎息をしながらしばらく考え込んでいた。

「この御返歌はどうなさるだろう、またお手紙もあつたでしょうがお答えにならないではいけないでしょう」

などと源氏は言つてもいたが、女房たちはお手紙だけは源氏に見せることをしなかつた。宮は気分がおすぐれにならないで、御返歌をしようとされないのを、

「それではあまりに失礼で、もつたいないことでございます」

こんなことを言つて、女房たちが返事をお書かせしようと苦心している様子を知ると、源氏は、

「むろんお返事をなさらないではいけません。ちよつとだけでよいのですからお書きなさい」

と言つた。源氏にそう言われることが齋宮にはまたお恥ずかしくてならないのであつた。昔を思い出して御覧になると、艶に美しい帝が別れを惜しんでお泣きになるのを、少女心においたわしくお思いになつたことも目の前に浮かんできた。同時に、母君のことも思われてお悲しいのであつた。

「#ここから2字下げ」

別るとではるかに言ひしひと言もかへりて物は今ぞ悲しき

「#ここで字下げ終わり」

とだけお書きになつたようである。お使いの幾人かはそれぞれ差のあるいただき物をして帰つた。源氏は齋宮の御返歌を知りたかつ

たのであるが、それも見たいとは言えなかった。院は美男でいらせられるし、女王もそれにふさわしい配偶のように思われる、少年でいらせられる帝の女御にょみにおさせすることは、女王の心に不満なことであるかもしれないなどと思いやりのありすぎることまでも考えてみると、源氏は胸が騒いでならなかったが、今日になって中止のことができるでもなかったから儀式その他についての注意を言い置いて、親しい修理大夫しゆりだゆうさんぎ参議である人にすべてを委託して源氏は六条邸を出て御所へ参った。養父として一切を源氏が世話していることにしては院へ済まないという遠慮から、単に好意のある態度を取っているとというふうを示していた。もとからい女房の多い宮であったから、実家に引いていがちだった人たちも皆出て来て、すではなやかな女御の形態が調ったように見えた。御息所みやすとが生きていたならば、どんなにこうしたことをよろこぶことであろう、聡明そつめいな後見役として女御の母であるのに最も適した性格であったと源氏は故人が思い出されて、恋人としてばかりでなく、あの人を失ったことはこの世の損失であるとも源氏は思った。洗練された高い趣味の人といつても、あれほどにすぐれた人は見いだせないのであると、源氏は物のおりごとに御息所を思った。

このころは女院も御所に来ておいでになった。帝は新しい女御の参ることをお聞きになって、少年らしく興奮しておいでになった。

御年齢よりはずっと大人びた方なのである。女院も、
「りつぱな方が女御に上がって来られるのですから、お気をおつけになつてお違いなさい」

と御注意をあそばした。帝は人知れず大人の女御は恥ずかしいであろうと思召されたが、深更になつてから上の御局みつぼねへ上がつて来た

女御は、おとなしいおおような、そして小柄な若々しい人であったから自然に愛をお感じになった。弘徽殿こうきでんの女御は早くからおそばに上がっていたからその人を睦まじい者に思召され、この新女御しんじよは品よく柔らかい魅力があるとともに、源氏が大きな背景を作つて、きわめて大事に取り扱う点で侮りがたい人に思召されて宿直とくちに召される数は正しく半々になっていたが、少年らしくお遊びになる相手には弘徽殿がよくて、昼などおいでになることは弘徽殿のほうが多かった。権中納言ごんちゆうなごんは后きさきにも立てたい心で後宮に入れた娘に、競争者のできたことで不安を感じていた。

院は櫛くの箱の返歌を御覧になつてからいつそう恋しく思召された。ちようどそのころに源氏は院へ伺候した。親しくお話を申し上げているうちに、齋宮が下向されたことから、院の御代みよの齋宮の出発の儀式にお話が行つた。院も回想しているいろとお語りになつたが、ぜひその人を得たく思つていたとはお言ひにならないのである。源氏はその問題を全然知らぬ顔もしながら、どう思召していただけるかが知りたくて、話をその方向へ向けた時、院の御表情に失恋の深い御苦痛が現われてきたのをお気の毒に思つた。美しい人としてそれほど院が忘れがたく思召す前齋宮は、どんな美貌じよぼうをお持ちになるのであるうと源氏は思つて、おりがあればお顔を見たいと思つているが、その機会の与えられないことを口惜くちおしがつていた。貴女らしい奥深さをあくまで持つていて、うかとして人に見られる隙すきのあるような人でない齋宮の女御を源氏は一面では敬意の払われる養女であると思つて満足しているのであつた。

こんなふうすまに隙間すまもないふうすまに二人の女御が侍しているのであつたから、兵部卿ひやうぶけいの宮は女王の後宮入りを実現させにくくて煩悶はんもんをし

ておいでになつたが、帝が青年におなりになつたなら、外戚の自分の娘を疎外あそばすことはなかるうとなお希望をつないでおいでになつた。宮廷の二人の女御ははなやかに挑み合つた。帝は何よりも絵に興味を持つておいでになつた。特別にお好きなせいがお描きになることもお上手であつた。齋宮の女御は絵をよく描くのでそれがお気に入つて、女御の御殿へおいでになつてはごいっしょに絵をお描きになることを楽しみにあそばした。殿上の若い役人の中でも絵の描ける者をお愛しになる帝であつたから、まして美しい人が、雅味のある絵を上手に墨で描いて、からだを横たえながら、次の筆の下ろしように考えたりしている可憐さが御心に沁んで、しばしばこちらへおいでになるようになり、御一寵愛が見る見る盛んになつた。権中納言がそれを聞くと、どこまでも負けぎらいな性質から有名な画家の幾人を家にかかえて、よい絵をよい紙に、描かせることをひそかにさせていた。

「小説を題にして描いた絵が最もおもしろい」

と言つて、権中納言は選んだよい小説の内容を絵にさせているのである。一年十二季の絵も平凡でない文学的価値のある詞書きをつけて帝のお目にかけた。おもしろい物であるがそれは非常に大事な物らしくして、帝のおいでになつている間にも、長くは御前へ出して置かずにしまわせてしまふのである。帝が齋宮の女御に見せたく思召して、お持ちになろうとするのを弘徽殿の人々は常にはばむのであつた。源氏がそれを聞いて、

「中納言の競争心はいつまでも若々しく燃えているらしい」
などと笑つた。

「隠そう隠そうとしてあまり御前へ出さずに陛下をお悩ましするな

どということはけしからんことだ」

と源氏は言つて、帝へは

「私の所にも古い絵はたくさんございますから差し上げることにはいたしましょう」

と奏して、源氏は二条の院の古画新画のはいつた棚たなをあけて夫人といつしよに絵を見分けた。古い絵に属する物と現代的な物とを分類したのである。長恨歌、王昭君などを題目にしたのはおもしろいが縁起はよろしくない。そんなのを今度は省くことに源氏は決めたのである。旅中に日記代わりに描いた絵巻のはいつた箱を出して来て源氏ははじめて夫人にも見せた。何の予備知識を備えずに見る者があつても、少し感情の豊かな者であれば泣かずにはいられないだけの力を持った絵であつた。まして忘れようもなくその悲しかった時代を思っている源氏にとって、夫人にとって今また旧作がどれほどの感動を与えるものであるかは想像するにかたくはない。夫人は今まで源氏の見せなかつたことを恨んで言つた。

「#ここから1字下げ」

「一人一居ゐて眺ながめしよりは海人あまの住むかたを書きてぞ見るべかりける

「#ここで字下げ終わり」

あなたにはこんな慰めがおありになつたのですわね」

源氏は夫人の心持ちを哀れに思つて言つた。

「#ここから1字下げ」

「うきめ見しそのをりよりは今日はまた過ぎにし方に帰る涙か
「#ここで字下げ終わり」

中宮ちゅうぐうにだけはお目につけねばならない物ですよ」

源氏はその中のことにできのよいものでしかも須磨すまと明石あかしの特色のよく出ている物を一一帖じふずつ選んでいながらも、明石の家の描かれてある絵にも、どうしてあるであろうと、恋しさが誘われた。源氏が絵を集めていると聞いて、権中納言はいつそう自家で傑作をこしらえることに努力した。巻物の軸じく、紐ひもの装幀そうざんにも意匠を凝らしているのである。それは三月の十日ごろのことであつたから、最もうらかな好季節で、人の心ものびのびとしておもしろくばかり物が見られる時であつたし、宮廷でも定まつた行事の何も無い時で、絵画や文学の傑作をいかにして集めようかと苦心をするばかりが仕事になつていた。これを皆陛下へ差し上げることにして公然の席で勝負を決めるほうが興味のあることであると源氏がまず言い出した。双方から出すのであるから宮中へ集まつた絵巻の数は多かつた。小説を絵にした物は、見る人がすでに心に作っている幻想をそれに加えてみることによつて絵の効果が倍加されるものであるからその種類の物が多い。梅壺うづの王女御おうにょのほうのは古典的な価値の定まつた物を絵にしたのが多く、弘徽殿のは新作として近ごろの世間に評判のよい物を描かせたのが多かつたから、見た目のにぎやかで派手はでなのはこちらにあつた。典侍ないしのすけや内侍ないしや命婦みよつぶも絵の価値を論じることに一所懸命になつていた。女院も宮中においてになるころであつたから、女官たちの論議する者を二つにして説をたたかわせて御覧になつた。左右に分けられたのである。梅壺方は左で、平典侍へいでんじ、侍

従の内侍、少将の命婦などで、右方は大弐だいにの典侍、中将の命婦、兵衛うえの命婦などであった。皆世間から有識者として認められている女性である。思い思いのことを主張する弁論を女院は興味深く思召おぼしめして、まず日本最初の小説である竹取の翁おきなと空穂うつほの俊蔭しんかげの巻を左右にして論評をお聞きになった。

「竹取の老人と同じように古くなつた小説ではあつても、思ひ上がつた主人公の赫耶姫の性格に人間の理想の最高のものが暗示されていてよいのです。卑近なことばかりがおもしろい人にはわからないでしょうが」

と左は言う。右は、

「赫耶姫の上つた天上の世界というものは空想の所産にすぎません。この世の生活の写してある所はあまりに非貴族的で美しいものではありません。宮廷の描写などは少しもありませんか。赫耶姫は竹取の翁の一つの家を照らすだけの光しかなかつたようですね。安部あべの多おほしが大金で買った毛皮がめらめらと焼けたと書いてあつたり、あれだけ蓬萊ほうらいの島を想像して言える倉持くらもちの皇子みこが贖物にせものを持って来てごまかそうとしたりするところがとてもいやです」

この竹取の絵は巨勢こせの相覧あひらみの筆で、詞書ことばきは貫之つらゆきがしている。紙かん屋紙やがみに唐錦からにしきの縁えりが付けられてあつて、赤紫あかむらの表紙うしろ、紫檀したんの軸ねじりで穩健な体裁である。

「俊蔭は暴風と波なみに弄もてあそばれて異境を漂泊しても芸術を求める心が強くて、しまいには外国にも日本にもない音楽者になつたという筋が竹取物語よりずっとすぐれております。それに絵も日本と外国との対照がおもしろく扱あわれている点ですぐれております」

と右方は主張するのであつた。これは式紙地しきじちの紙かみに書かれ、青い

表紙と黄玉おうぎょくの軸ねじりが付けられてあつた。絵は常則つねのり、字は道風であつたから派手はでな気分きぶんに満ちている。左はその点が不足であつた。次は伊勢物語せせと正三位しょうみが合わされた。この論争も一通りでは済まない。今度も右は見た目がおもしろくて刺戟しげき的で宮中の模様も描かれてあるし、現代に縁の多い場所や人が写されてある点でよさそうには見えなかつた。平典侍が言った。

「#ここから1字下げ」

「伊勢の海の深き心をたどらずに古ふるりにし跡と波や消つべき

「#ここで字下げ終わり」

ただの恋愛談を技巧ていこうだけで綴つづつてあるような小説せうせつに業平朝臣なりひらあそんを負おけさせてなるものですか」

右の典侍が言う。

「#ここから2字下げ」

雲の上に思ひのぼれる心には千尋ちひろの底もはるかにぞ見る

「#ここで字下げ終わり」

女院が左の肩をお持ちになるお言葉を下された。

「兵衛王ひょうゑおうの精神はりっぱだけれど在五中将以上のものではない。

「#ここから2字下げ」

見るめこそうらぶれぬらめ年経にし伊勢をの海人あまの名をや沈めん」

「#ここで字下げ終わり」

婦人たちの言論は長くかかって、一回分の勝負が容易につかないで時間がたち、若い女房たちが興味をそれに乗せている陛下と梅壺はつじゆの女御の御絵はいつ席上に現われるか予想ができないのであった。源氏も参内して、双方から述べられる支持と批難の言葉をおもしろく聞いた。

「これは御前で最後の勝負を決めましょう」

と源氏が言つて、絵合わせはいつそう広く判者を求めることになつた。こんなこともかねて思われたことであつたから、須磨、明石の二巻を左の絵の中へ源氏は混ぜておいたのである。中納言も劣らず絵合わせの日に傑作を出そうとすることに没頭していた。世の中はもうよい絵を製作することと、捜し出すことのほかに仕事がないように見えた。

「今になつて新しく作ることは意味のないことだ。持っている絵の中で優劣を決めなければ」

と源氏は言っているが、中納言は人にも知らせず自邸の中で新画を多く作らせていた。院もこの勝負のことをお聞きになつて、梅壺へ多くの絵を御寄贈あそばされた。宮中で一年じゆうにある儀式の中のおもしろいのを昔の名家が描いて、延喜えんぎの帝が御自身で説明をお添えになつた古い巻き物のほかに、御自身の御代みよの宮廷にあつたはなやかな儀式などをお描かせになつた絵巻には、齋宮さいくわう発足の日の大極殿だいごくでんの別れの御櫛みくしの式は、御心みこころに沁しんで思召されたことなのであつたから、特に構図なども公茂きんもちがはく画伯に詳しくお指図さしずをあそばして製作された非常にりっぱな絵もあつた。沈しんの木の透かし彫りの箱に入れて、同じ木で作つた上飾りを付けた新味のある御贈り物であつた。

御一挨拶あいさつはただお言葉だけで院の御所への勤務もする左近の中將がお使いをしたのである。大極殿の御輿みこしの寄せてある神々しい所に御歌があつた。

「#ここから2字下げ」

身こそかくしめの外ほかなれそのかみの心のうちを忘れしもせず

「#ここで字下げ終わり」

と言うのである。返事を差し上げないこともおそれおいことであると思われて、齋宮の女御は苦しく思いながら、昔のその日の儀式に用いられた簪かんざしの端を少し折って、それに書いた。

「#ここから2字下げ」

しめのうちは昔にあらぬこちして神代のこととも今ぞ恋しき

「#ここで字下げ終わり」

藍色あゐの唐紙に包んでお上げしたのであつた。院はこれを限りもなく身に沁しんで御覧になつた。このことで御位みくらゐも取り返したく思召した。源氏をも恨めしく思召されたに違いない。かつて源氏に不合理な敵罰をお加えになつた報いをお受けになつたのかもしれない。院のお絵は太後の手を経て弘徽殿こうきでんの女御にょしのほうへも多く来ているはずである。尚侍なうしのかみも絵の趣味を多く持っている人であつたから、姪めいの女御のためにいろいろと名画を集めていた。

定められた絵合わせの日になると、それはいくぶんにわかかなことではあつたが、おもしろく意匠をした風流な包みになって、左右の

絵が会場へ持ち出された。女官たちの控え座敷に臨時の玉座が作られて、北側、南側と分かれて判者が座についた。それは清涼殿のことで、西の後涼殿の縁には殿上役人が左右に思い思いの味方をしてすわっていた。左の紫檀の箱に蘇枋の木の飾り台、敷き物は紫地の唐錦、帛紗は赤紫の唐錦である。六人の侍童の姿は朱色の服の上に桜襲の汗衫、裱は紅の裏に藤襲の厚織物で、からだのとりなしがきわめて優美である。右は沈の木の箱に浅香の下机、帛紗は青地の高麗錦、机の脚の組み紐の飾りがはなやかであった。侍童らは青色に柳の色の汗衫、山吹襲の裱を着ていた。双方の侍童がこの絵の箱を御前に据えたのである。源氏の内大臣と権中納言とが御前へ出た。太宰帥の宮も召されて出ておいでになった。この方は芸術に興味をお持ちになる方であるが、ことに絵画がお好きであったから、初めに源氏からこのお話もしてあった。公式のお召しではなくて、殿上の間に来ておいでになったのに仰せが下ったのである。この方に今日の審判役を下命された。評判どおりに入念に描かれた絵巻が多かった。優劣をにわかにお決めになるのは困難なようである。例の四季を描いた絵も、大家がよい題材を選んで筆力も雄健に描き流した物は価値が高いように見えるが、今度は皆紙絵であるから、山水画の豊かに描かれた大作などとは違って、凡庸な者に思われている今の若い絵師も昔の名画に近い物を作ることができ、それにはまた現代人の心を惹くものも多量に含まれていて、左右はそうした絵の優劣を論じ合っているが、今日の論争は双方ともまじめであったからおもしろかった。襖子をあけて朝餉の間に女院は出ておいでになった。絵の鑑識に必ず自信がおりになるのであるうと思つて、源氏はそれさえありがたく思われた。判者が断定のしきれないような時

に、お伺いを女院へするのに対して、短いお言葉の下されるのも感じのよいことであつた。左右の勝ちがまだ決まらずに夜が来た。最後の番に左から須磨の巻が出てきたことによつて中納言の胸は騒ぎ出した。右もことに最後によい絵巻が用意されていたのであるが、源氏のような天才が清澄な心境に達した時に写生した風景画は何者の追隨をも許さない。判者の親王をはじめとしてだれも皆涙を流して見た。その時代に同情しながら想像した須磨よりも、絵によつて教えられる浦住まいはもつと悲しいものであつた。作者の感情が豊かに現われていて、現在をもその時代に引きもどす力があつた。須磨からする海のながめ、寂しい住居すまい、崎々浦々が皆あざやかに描かれてあつた。草書で仮名混じりの文体の日記がその所々には混ぜられてある。身にしむ歌もあつた。だれも他の絵のことは忘れて恍惚くわうごとなつてしまつた。圧巻はこれであると決まつて左が勝ちになつた。

明け方近くなつて古い回想から湿つた心持ちになつた源氏は杯を取りながら帥そうの宮に語つた。

「私は子供の時代から学問を熱心にしていましたが、詩文の方面に進む傾向があると御覧になつたのですか、院がこうおっしゃいました、文学というものは世間から重んぜられるせいか、そのほうのことを専門的にまでやる人の長寿と幸福を二つともそろつて得ている人は少ない。不足のない身分は持っているのであるから、あながちに文学で名誉を得る必要はない。その心得でやらねばならぬ。以来私に本格的な学問をいろいろとおさせになりましたが、できが悪い課目もなく、またすぐれた深い研究のできたこともありませんでした。絵を描くことだけは、それは大きいことではありませんが、

満足のできるほど精神を集中させて描いて見たいという希望があり
 おり起こったものですが、思いがけなく放浪者になりました時に、
 はじめて大自然の美しさにも接する機会を得まして、描くべき物は
 十分に与えられたのですが、技巧がまずくて、思いどおりの物を紙
 上に表現することはできませんでした。そんなものですからこれだ
 けをお目にかけることは恥ずかしくていたされませんから、今度の
 ような機会に持ち出しただけなのですが、私の行為が突飛とつびなように
 評されないかと心配しております」

「何の芸でも頭がなくては習えませんが、それでもどの芸にも皆師
 匠があつて、導く道ができているものですから、深さ浅さは別問題
 として、師匠の真似まねをして一通りにやるだけのことはだれにもまず
 できるでしょう。ただ字を書くことと囲碁だけは芸を熱心に習った
 とも思われない者からもひよつくりりつばな書を書く者、碁の名人
 が出ているものの、やはり貴族の子の中からどんな芸も出抜けてで
 きる人が出るように思われます。院が御自身の親王、内親王たちに
 皆何かの芸はお仕込みになつたわけですが、その中でもあなたへは
 特別に御熱心に御教授あそばしましたし、熱心にもお習いになつた
 のですから、詩文のほうはむろんごりつぱだし、そのほかでは琴きんを
 お弾ひきになることが第一の芸で、次は横笛、琵琶びわ、十三げん一絃という
 順によくおできになる芸があると院も仰せになりました。世間もそ
 う信じているのですが、絵などはほんのお道楽だと私も今までは思
 っていましたのに、あまりにお上手うま過ぎて墨絵描きの画家が恥じて
 死んでしまう恐れがある傑作をお見せになるのは、けしからんこと
 かもしれません」

宮はしまいには戯談ごうだんをお言いになつたが酔い泣きなのか、故院の

お話をされてしおれておしまいになった。二十幾日の月が出てまだここへはさしてこないのであるが、空には清い明るさが満ちていた。書司に保管されてある楽器が召し寄せられて、中納言が和琴の弾き手になったが、さすがに名手であると人を驚かす芸であった。帥の宮は十三絃、源氏は琴、琵琶の役は少將の命婦に仰せつけられた。殿上役人の中の音楽の素養のある者が召されて拍子を取った。稀なよい合奏になった。夜が明けて桜の花も人の顔もほのかに浮き出し、小鳥のさえずりが聞こえ始めた。美しい朝ぼらけである。下賜品は女院からお出しになったが、なお親王は帝からも御衣を賜わった。この当座はだれもだれも絵合わせの日の絵の噂をし合った。

「須磨、明石の二巻は女院の御座右に差し上げていただきたい」

こう源氏は申し出た。女院はこの二巻の前後の物も皆見たく思召すとのことであつたが、

「またおりを見まして」

と源氏は御一挨拶を申した。帝が絵合わせに満足あそばした御様子であつたのを源氏はうれしく思った。二人の女御の挑みから始まつたちよつとした絵の上のことでも源氏は大形に力を入れて梅壺を勝たせずには置かなかつたことから中納言は娘の気押されて行く運命も予感して口惜しがつた。帝は初めに参つた女御であつて、御愛情に特別なもののあることを、女御の父の中納言だけは想像のできる点もあつて、頼もしくは思つていて、すべては自分の取り越し苦労であるとして思おうとも中納言はしていた。

宮中の儀式などもこの御代から始まつたというものを起こそうと源氏は思うのであつた。絵合わせなどという催しでも単なる遊戯でなく、美術の鑑賞の会にまで引き上げて行なわれるような盛りの御

代が現出したわけである。しかも源氏は人生の無常を深く思つて、帝がいま少し大人におなりになるのを待って、出家がしたいと心の底では思っているようである。昔の例を見ても、年が若くて官位に進んだ、そして世の中に卓越した人は長く幸福でいられないものである、自分は過分な地位を得ている、以前不幸な日のあつたこと、ようやくまだ今日まで運が続いているのである、今後もお順境に身を置いていては長命のほうが危い、静かに引きこもつて後世のための仏勤めをして長寿を得たいと、源氏はこう思つて、郊外の土地を求めて御堂を建てさせているのであつた。仏像、経巻などもそれとともに用意させつつあつた。しかし子供たちをよく教育してりっぱな人物、すぐれた女性にしてみようと思つ精神と出家のことは両立しないのであるから、どっちがほんとうの源氏の心であるかわからない。

底本：「全訳源氏物語 上巻」角川文庫、角川書店

1971（昭和46）年8月10日改版初版発行

1994（平成6）年12月20日56版発行

このファイルは、古典総合研究所 (<http://www.genji.co.jp/>) で入力されたものを、青空文庫形式にあらためて作成しました。

校正には、2002（平成14）年4月5日71版を使用しました。

入力：上田英代

校正：kumi

2003年5月9日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

源氏物語

松風

紫式部

與謝野晶子訳

【テキスト中に現れる記号について】

〈 〉：ルビ

（例）弾^ひく

—：ルビの付く文字列の始まりを特定する記号

（例）御一^{あいさつ}挨拶

「#」：入力者注 主に外字の説明や、傍点の位置の指定

（例）「#地から3字上げ」

「#地から3字上げ」あぢきなき松の風かな泣けばなき小琴

「#地から3字上げ」をとればおなじ音を弾^ひく （晶子）

東の院が美々しく落成したので、花散里^{はなちるさと}といわれていた夫人を源氏は移らせた。西の対から渡殿^{わたどの}へかけてをその居所に取って、事務の扱い所、家司^{けいし}の詰め所なども備わった、源氏の夫人の一人としての体面を損じないような住居^{すまい}にしてあった。東の対には明石^{あかし}の人を

置こうと源氏はかねてから思っていた。北の対をばことに広く立て、かりにも源氏が愛人と見て、将来のことまでも約束してある人たちのすべてをそこへ集めて住ませようという考えをもっていた源氏は、そこを幾つにも仕切つて作らせた点で北の対は最もおもしろい建物になった。中央の寢殿しんでんはだれの住居すまいにも使わずに、時々源氏が来て休息をしたり、客を招いたりする座敷にしておいた。

明石へは始終手紙が送られた。このごろは上京を促すことばかりを言う源氏であつた。女はまだ躊躇ちゅうちゆをしているのである。わが身の上のかいなさをよく知つていて、自分などとは比べられぬ都きよの貴女たちでさえ捨てられるのでなく、また冷淡でなくもないような扱いを受けて、源氏のために物思いを多く作るという噂うわさを聞くのであるから、どれだけ愛されているという自信があつてその中へ出て行かれよう、姫君の生母の貧弱さを人目にさらすだけで、たまさかの訪問を待つにすぎない京の暮らしを考えるほど不安なことはないと煩悶はんもんをしながらも明石は、そうかといつて姫君をこの田舎いなかに置いて、世間から源氏の子として取り扱われないような不幸な目にあわせることも非常に哀れなことであると思つて、出京は断然しないと源氏へ答えることはできなかつた。両親も娘の煩悶するのがもつともに思われて歎息たんそくばかりしていた。入道夫人の祖父なかつかさきょうの中務卿親王が昔持つておいでになつた別荘が嵯峨さかの大井川のそばにあつて、宮家の相続者にしかとした人がないままに別荘などもそのままに荒廃させてあるのを思い出して、親王の時からずっと預かり人のようになっていた男を明石へ呼んで相談をした。

「私はもう京の生活を二度とすまいという決心で田舎へ引きこもつたのだが、子供になつてみるとそうはいかないもので、その人たち

のためにまた一軒京に家を持つ必要ができたのだが、こうした静かな所にいて、にわかには京の町中の家へはいつて気も落ち着くものではないと思われるので、古い別荘のほうへでもやるうかと思う。そちらで今まで使っているだけの建物は君のほうへあげてもいいから、そのほかの所を修繕して、とにかく人が住めるだけの別荘にこしらえ上げてもらいたいと思うのだが」

と入道が言った。

「もう長い間持ち主がおいでにならない別荘になって、ひどく荒れたものですから、私たちは下屋しもやのほうに住んでおりますが、しかし今年の春ごろから内大臣さんが近くへ御堂みどうの普請をお始めになりまして、あそこはもう人がたくさん来る所になっておりますよ、たいした御堂ができるのですから、工事に使われている人数だけでもどんなに大きいかしれません。静かなお住居すまいがよろしいのならあそこはだめかもしれませぬ」

「いや、それは構わないのだ。というのは内大臣家にも関係のあることでそこへ行こうとしているのだからね。家の中の設備などは追いついてこちらからさせるが、まず急いで大体の修繕のほうをさせてくれ」

と入道が言う。

「私の所有ではありませんが、持っていていらっしゃる方もなかったものですから、一軒家のような所を長く私が守って来たのです。別荘についた田地なども荒れる一方でしたから、お亡なくなりになりました民部大輔みんぶだいふさんをお願いして、譲っていただくことにしましてそれだけの金は納めたのでした」

預かり人は自身の物のようになっている田地などを回収されないか

と危うがって、権利を主張しておかねばというように、鬚むしやな醜い顔の鼻だけを赤くしながら顎を上げて弁じ立てる。

「私のほうでは田地などいらぬ。これまでどおり君は思っておればいい。別荘その他の証券は私のほうにあるが、もう世捨て人になつてしまつてからは、財産の権利も義務も忘れてしまつて、留守居料も払つてあげなかつたが、そのうち精算してあげるよ」

こんな話も相手は、入道が源氏に関係のあることをにおわしたことで気味悪く思つて、私慾をそれ以上たくましくはしかなていた。

それからのち、入道家から金を多く受け取つて大井の山荘は修繕されていった。そんなことは源氏の想像しないことであつたから、上京をしたがらない理由は何にあるかと怪しんでは、姫君がそのまま田舎に育てられていくことによつて、のちの歴史にも不名誉な話が残るであろうと源氏は歎息されるのであつたが、大井の山荘ができ上がつてから、はじめて昔の母の祖父の山荘のあつたことを思い出して、そこを家にして上京するつもりであると明石から知らせて来た。東の院へ迎えて住ませようとしたことに同意しなかつたのは、そんな考えであつたのかと源氏は合点した。聡明なしかただとも思つたのであつた。惟光が源氏の隠し事に関係しないことはなくて、明石の上京の件についても源氏はこの人にまず打ち明けて、さつそく大井へ山荘を見にやり、源氏のほうで用意しておくことは皆させた。

「ながめのよい所でございまして、やはりまた海岸のような気のされる所もございます」

と惟光は報告した。そうした山荘の風雅な女主人になる資格のある人であると源氏は思つていた。

源氏の作っている御堂は大覚寺の南にあたる所で、滝殿などの美術的なことは大覚寺にも劣らない。明石の山荘は川に面した所で、大木の松の多い中へ素朴そぼくに寝殿の建てられてあるのも、山荘らしい寂しい趣が出ているように見えた。源氏は内部の設備までも自身のほうでさせておこうとしていた。親しい人たちをもまたひそかに明石へ迎えに立たせた。

免れがたい因縁に引かれていよいよそこを去る時になったのであると思うと、女の心は馴染なじみ深い明石の浦に名残なごりが惜しまれた。父の入道を一人ぼっちで残すことも苦痛であつた。なぜ自分だけはこんな悲しみをしなければならぬのであろうと、朗らかな運命を持つ人がうらやましかつた。両親も源氏に迎えられて娘が出京するといふようなことは長い間寝てもさめても願っていたことで、それが実現される喜びはあつても、その日を限りに娘たちと別れて孤独になる将来を考えると堪えがたく悲しくて、夜も昼も物思いに入道ほうは呆ぼうとしていた。言うことはいつも同じことで、

「そして私は姫君の顔を見ないでいるのだね」

そればかりである。夫人の心も非常に悲しかった。これまでもすでに同じ家には住まず別居の形になっていたのであるから、明石が上京したあとに自分だけが残る必要も認めてはいないものの、地方にいる間だけの仮の夫婦の中でも月日が重なつて馴染なじみの深くなつた人たちは別れがたいものに違いないのであるから、まして夫人にとつては頑固がんこな我意の強い良人おとこではあつたが、明石に作つた家で終わる命を予想して、信頼して来た妻なのであるからにわかいなかに別れて京へ行ってしまふことは心細かつた。光明を見失つた人になつて田舎の生活をしてきた若い女房などは、蘇生そせいのできたほどにうれしいの

であるが、美しい明石の浦の風景に接する日のまたないであろうことを思うことで心のめいることもあった。これは秋のことであつたからことに物事が身に沁しんで思われた。出立の日の夜明けに、涼しい秋風が吹いていて、虫の声もする時、明石の君は海のほうをながめていた。入道は後夜ござに起きたままできて、鼻をすすりながら仏前の勤めをしていた。門出の日は縁起を祝つて、不吉なことはだれもいっさい避けようとしているが、父も娘も忍ぶことができずに泣いていた。小さい姫君は非常に美しくて、夜光の珠たまと思われる麗質の備わっているのを、これまでどれほど入道が愛したかしのれない。祖父の愛によく馴染んでいる姫君を入道は見て、

「僧形しんがたの私が姫君のそばにすることは遠慮すべきだとこれまでも思いながら、片時だつてお顔を見ねばいられなかつた私は、これから先どうするつもりだろう」

と泣く。

「#ここから1字下げ」

「行くさきをはるかに祈る別れ路ぢにたへぬは老いの涙なりけり

「#ここで字下げ終わり」

不謹慎だ私は」

と言つて、落ちてくる涙を拭ぬぐい隠そうとした。尼君が、京時代の左近中将の良人おとこに、

「#ここから1字下げ」

「もろともに都は出いできこのたびや一人野中の道に惑はん」

「#ここで字下げ終わり」

と言つて泣くのも同情されることであつた。信頼をし合つて過ぎた年月を思うと、どうなるかわからぬ娘の愛人の心を頼みにして、見捨てた京へ帰ることが尼君をはかなくさせるのであつた。明石が、

「#ここから1字下げ」

「いきてまた逢ひ見んことをいつとてか限りも知らぬ世をば頼まん
「#ここで字下げ終わり」

送つてだけでもくださいませんか」

と父に頼んだが、それは事情が許さないことであると入道は言いながらも途中が気づかわれるふうが見えた。

「私は出世することなどを思い切るうとしていたのだが、いよいよその氣になつて地方官になつたのは、ただあなたに物質的にだけでも十分尽くしてやりたいということからだつた。それから地方官の仕事も私に適したものでないことをいろんな形で教えられたから、これをやめて地方官の落伍者らくごの一人で、京で輕蔑けいべつされる人間にこの上なつては親の名誉を恥ずかしめることだと悲しくて出家したがね、京を出たのが世の中を捨てる門出だつたと、世間からも私は思われ
ていて、よく潔くそれを実行したと私自身にも満足感があつたが、あなたが一人前の少女になつてきたのを見ると、どうしてこんな珠玉たまを泥土でいどに置くような残酷なことを自分はしたかと私の心はまた暗くなつてきた。それからは仏と神を頼んで、この人までが私の不運

に引かれて一地方人となつてしまふようなことがないようにと願つた。思いがけず源氏の君を婿に見る日が来たのであるが、われわれには身分のひげ目があつて、よいことにも悲しみが常に添つていた。しかし姫君がお生まれになつたことで私もだいぶ自信ができてきた。姫君はこんな土地でお育ちになつてはならない高い宿命を持つ方に違いないのだから、お別れすることがどんなに悲しくても私はあきらめる。何事ももうとくにあきらめた私は僧じゃないか。姫君は高い高い宿命の人でいられるが、暫時さんじの間私に祖父と孫の愛を作つて見せてくださったのだ。天に生まれる人も一度は三途さんずの川まで行くということにあたることだとそれを思つて私はこれで長いお別れをする。私が死んだと聞いても仏事などはしてくる必要はない。死に別れた悲しみもしないでおおきなさい」

と入道は断言したのであるが、また、

「私は煙になる前の夕べまで姫君のことを六時の勤行ごんぎょうに混ぜて祈ることだろう。恩愛が捨てられないで」

と悲しそうに言うのであつた。車の数の多くなることも人目を引くことであるし、二度に分けて立たせることも面倒めんどうなことであるといつて、迎えに来た人たちもまた非常に目だつことを恐れるふうであつたから、船を用いてそつと明石親子は立つことになつた。

午前八時に船が出た。昔の人も身にしむものに見た明石の浦の朝霧に船の隔たつて行くのを見る入道の心は、仏弟子ぶつでしの超越した境地に引きもどされそうもなかつた。ただ呆然ぼうぜんとしていた。

長い年月を経て都へ帰ろうとする尼君の心もまた悲しかった。

「#ここから2字下げ」

かの岸に心寄りにし海人船あまぶねのそむきし方に漕こぎ帰るかな

「#ここで字下げ終わり」

と言って尼君は泣いていた。明石は、

「#ここから2字下げ」

いくかへり行きかふ秋を過こしつつ浮き木に乗りてわれ帰るらん

「#ここで字下げ終わり」

と言っていた。追い風であつて、予定どおりに一行の人は京へはいることができた。車に移ってから人目を引かぬ用心をしながら大井の山荘へ行つたのである。

山荘は風流にできていて、大井川が明石でながめた海のように前を流れていたから、住居すまいの変わった気もそれほどしなかつた。明石の生活がなお近い続きのようにならきつとよくなるであろうと明石のた。増築した廊なども趣があつて園内に引いた水の流れも美しかつた。欠点もあるが住みついたならきつとよくなるであろうと明石の人々は思った。源氏は親しい家司けいしに命じて到着の日の一行の饗応きやうおんをさせたのであつた。自身で訪ねて行くことは、機会を作ろう作ろうとしながらもおくれるばかりであつた。源氏に近い京へ来ながら物思あかしいばかりがされて、女は明石の家も恋しかつたし、つれづれでもあつて、源氏の形見の琴きんの絃いとを鳴らしてみた。非常に悲しい気のする日であつたから、人の来ぬ座敷で明石がそれを少し弾ひいていると、松風の音が荒々しく合奏をしかけてきた。横になつていた尼君が起き上がったと言つた。

「#ここから2字下げ」

身を変へて一人帰れる山里に聞きしに似たる松風ぞ吹く

「#ここで字下げ終わり」

女むすめが言った。

「#ここから2字下げ」

ふるさに見し世の友を恋ひわびてさへづることを誰たれか分くらん

「#ここで字下げ終わり」

こんなふうにはかながって暮らしていた数日ののちに、以前にもまして違いあがたい苦しさを切に感じる源氏は、人目もはばからずに大井へ出かけることにした。夫人にはまだ明石の上京したことは言
つてなかったから、ほかから耳にはいつては気まずいことになると思
つて、源氏は女房を使いにして言わせた。

「桂かつらに私が行って指図さしずをしてやらねばならないことがあるのですが、それをそのままにして長くなっています。それに京へ来たら訪ねよ
うという約束のしてある人もその近くへ上って来ているのですから、
済まない気がしますから、そこへも行ってやります。嵯峨野さかのの御堂みどう
に何もそろっていない所にいらっしゃる仏様へも御一おひと挨拶あいさつに寄りま
すから二、三日は帰らないでしょう」

夫人は桂の院という別荘の新築されつつあることを聞いたが、そ
こへ明石の人を迎えたのであったかと気づくとうれしいこととは思
えなかった。

「斧おのの柄を新しくなさらなければ（仙人せんじんの暮を見物している間に、時がたつて気がついてみるとその樵夫きこりの持っていた斧の柄は朽ちていたという話）ならないほどの時間はさぞ待ち遠いことでしょ」
不愉快そうなこんな夫人の返事が源氏に伝えられた。

「また意外なことをお言いになる。私はもうすっかり昔の私でなくなつたと世間でも言うではありませんか」

などと言わせて夫人の機嫌きげんを直させようとするうちに昼になつた。

微行しのびで、しかも前駆には親しい者だけを選んで源氏は大井へ来た。夕方前である。いつも狩衣姿かりぎぬをしていた明石時代でさえも美しい源氏であつたのが、恋人に逢うがために引き纏まとつた直衣姿のうしはまばゆいほどまたりっぱであつた。女のした長い愁うれいもこれに慰められた。

源氏は今さらのようにこの人に深い愛を覚えながら、二人の中に生まれられた子供を見てまた感動した。今まで見ずにいたことさえも取り返されない損失のように思われる。左大臣家で生まれた子の美貌びぼうを世人はたたえるが、それは権勢に目がくらんだ批評である。これこそ真の美人になる要素の備わつた子供であると源氏は思った。無邪気な笑顔えがおの愛嬌あいきょうの多いのを源氏は非常にかわいく思った。乳母めのとも明石へ立つて行ったところの衰えた顔はなくなって美しい女になつていゝ。今日までのことをいろいろとなつかしいふうに話すのを聞いていた源氏は、塩焼き小屋に近い田舎いなかの生活をしいてさせられてきたのに同情するといふようなことを言った。

「ここだつてまだずいぶんと遠すぎる。したがって私が始終は来られないことになるから、やはり私があなたのために用意した所へお移りなさい」

と源氏は明石に言うのであったが、

「こんなふうには田舎者であることが少し直りましてから」

と女の言うのも道理であった。源氏はいろいろに明石の心をいたわったり、将来を堅く誓ったりしてその夜は明けた。なお修繕を加える必要のある所を、源氏はもとの預かり人や新たに任命した家職の者に命じていた。源氏が桂の院へ来るといふ報せがあつたために、この近くの領地の人たちの集まつて来たのは皆そこから明石の家のほうへ来た。そうした人たちに庭の植え込みの草木を直させたりなどした。

「流れの中にあつた立石たていしが皆倒れて、ほかの石といつしよに紛れてしまつたらしいが、そんな物を復旧させたり、よく直させたりすればずいぶんおもしろくなる庭だと思われるが、しかしそれは骨を折るだけかえつてあとでいけないことになる。そこに永久いるものでもないから、いつか立つて行つてしまふ時に心が残つて、どんなに私は苦しかったろう、帰る時に」

源氏はまた昔を言い出して、泣きもし、笑いもして語るのであつた。こうした打ち解けた様子に見える時に源氏はいつそう美しいのであつた。のぞいて見ていた尼君は老いも忘れ、物思いも跡かたなくなつてしまふ気がして微笑ほほえんでいた。東の渡殿わたどのの下をくぐつて来る流れの筋を仕変えたりする指図さしずに、源氏は桂つちぎを引き掛けたくつろぎ姿でいるのがまた尼君にはうれしいのであつた。仏の鬘伽あかの具などが縁に置かれてあるのを見て、源氏はその中が尼君の部屋であることに気がついた。

「尼君はこちらにおいでになりますか。だらしない姿をしています」

と言って、源氏は直衣のうしを取り寄せて着かえた。几帳きちょうの前にすわつて、

「子供がよい子に育ちましたのは、あなたの祈りを仏様がいれてくだすったせいだろうとありがたく思います。俗をお離れになった清い御生活から、私たちのためにまた世の中へ帰って来てくだすったことを感謝しています。明石ではまた一人でお残りになって、どんなにこちらのことを想像して心配していただくさるだろうと済まなく私は思っています」

となつかしいふうに話した。

「一度捨てました世の中へ帰ってまいって苦しんでおります心も、お察しく下さいましたので、命の長さもうれしく存ぜられます」

尼君は泣きながらまた、

「荒磯あらいそかげに心苦しく存じました二葉ふたばの松もいよいよ頼もしい未来が思われます日に到達いたしました、御生母がわれわれ風情ふぜいの娘でございますことが、御幸福の障さわりにならぬかと苦勞にしております」

などという様子に品のよさの見える婦人であったから、源氏はこの山荘の昔の主あまじの親王のことなどを話題にして語った。直された流れの水はこの話に言葉を入れたいように、前よりも高い音を立てていた。

「#ここから2字下げ」

住み馴なれし人はかへりてたどれども清水しみづぞ宿あるじの主人がほなる

「#ここで字下げ終わり」

歌であるともなくこう言う様子に、源氏は風雅を解する老女であると思つた。

「#ここから1字下げ」

「いさらぬはやくのことも忘れじをもとの主人や面変はりせる

「#ここで字下げ終わり」

悲しいものですね」

と歎息して立つて行く源氏の美しいとりなしにも尼君は打たれて茫となつていた。

源氏は御堂へ行って毎月十四、五日と三十日に行なう普賢講、阿弥陀、釈迦の念仏の三昧のほかにも日を決めてする法会のことを僧たちに命じたりした。堂の装飾や仏具の製作などのことも御堂の人々へ指図してから、月明の路を川沿いの山荘へ帰つて来た。

明石の別離の夜のことが源氏の胸によみがえつて感傷的な気分になつている時に女はその夜の形見の琴を差し出した。弾きたい欲求もあつて源氏は琴を弾き始めた。まだ絃の音が変わつていかなかった。その夜が今であるようにも思われる。

「#ここから2字下げ」

契りしに変はらぬ琴のしらべにて絶えぬ心のほどは知りきや

「#ここで字下げ終わり」

と言うと、女が、

「#ここから2字下げ」

変はらじと契りしことを頼みにて松の響に音を添へしかな

「#ここで字下げ終わり」

と言う。こんなことが不つりあいに見えないのは女からいえば過分なことであつた。明石時代よりも女の美に光彩が加わっていた。源氏は永久に離れがたい人になつたと明石を思っている。姫君の顔からもまた目は離せなかつた。日蔭の子として成長していくのが、堪えられないほど源氏はかわいそうで、これを二条の院へ引き取つてできる限りにかしずいてやることにすれば、成長後の肩身の狭さも救われることになるであろうとは源氏の心に思われることであつたが、また引き放される明石の心が哀れに思われて口へそのことは出ずにただ涙ぐんで姫君の顔を見ていた。子心にはじめは少し恥ずかしがつっていたが、今はもうよく馴れてきて、ものを言つて、笑つたりもしてみせた。甘えて近づいて来る顔がまたいつそう美しくてかわいいのである。源氏に抱かれている姫君はすでに類のない幸運に恵まれた人と見えた。

三日目は京へ帰ることになつていたので、源氏は朝もおそく起きて、ここから直接帰つて行くつもりでいたが、桂の院のほうへ高官がたくさん集まつて来ていて、この山荘へも殿上役人がおおぜいで迎えに来た。源氏は装束をして、

「きまりの悪いことになつたものだね、あなたがたに見られてよい家でもないのに」

と言いながらいつしよに出ようとしたが、心苦しく女を思つて、さりげなく紛らして立ち止まつた戸口へ、乳母は姫君を抱いて出て

来た。源氏はかわいい様子で子供の頭を撫でながら、

「見ないでいることは堪えられない気のするものもにわかな愛情すぎるね。どうすればいいだろう、遠いじゃないか、ここは」

と源氏が言うと、

「遠い田舎の幾年よりも、こちらへ参つてたまさかしかお迎えできないようなことになりましたは、だれも皆苦しゅうございましょう」

など乳母は言った。姫君が手を前へ伸ばして、立っている源氏のほうへ行こうとするのを見て、源氏は膝をかがめてしまった。

「もの思いから解放される日のない私なのだね、しばらくでも別れているのは苦しい。奥さんはどこにいるの、なぜここへ来て別れを惜んでくれないのだろう、せめて人心地が出てくるかもしれないのに」

と言うと、乳母は笑いながら明石の所へ行つてそのとおりを言った。女は逢つた喜びが二日で尽きて、別れの時の来た悲しみに心を乱していて、呼ばれてもすぐに出ようとしないうちを源氏は心のうちであまりにも賣女ぶるのではないかと思つていた。女房たちからも勧められて、明石はやつと膝行つて出て、そして姿は見せないように几帳の蔭へはいるようにしている様子に気品が見えて、しかも柔らかない美しさのあるこの人は内親王と言つてもよいほどに気高く見えるのである。源氏は几帳の垂れ絹を横へ引いてまたこまやかにささやいた。いよいよ出かける時に源氏が一度振り返つて見ると、冷静にしていた明石も、この時は顔を出して見送つていた。源氏の美は今が盛りであると思われた。以前は痩せて背丈が高いように見えただが、今はちょうどいいほどになっていた。これでこそ賣目のある

好男子になられたというものであると女たちがながめていて、指貫さしぬきの裾すそからも愛嬌あいきょうはこぼれ出るように思った。解官かいくわんされて源氏について漂泊さすらえた蔵人くらうどもまた旧もとの地位かゑに復かゑつて、鞍負ゆぎえ尉じょうになつた上に今年ことしは五位も得ていたが、この好青年官人が源氏の太刀たちを取りに戸口へ来た時に、御簾みすの中に明石のいるのを察さつして挨拶あいさつをした。

「以前の御厚情を忘れておりませんが、失礼かと存じますし、浦風に似た気のいたしました今暁の山風にも、御挨拶を取り次いでいただく便もございませんでしたから」

「山に取り巻かれておりましては、海への頼りない住居すまいと変わりもなく、松も昔の（友ならなくに）と思つて寂しがつておりましたが、昔の方がお供の中なかにおいでになつて力強く思います」

などと明石は言った。すばらしいものにこの人はなつたものだ、自分だつて恋人にしたいと思つたこともある女ではないかなどと思つて、驚異を覚えながらも蔵人くらうどは、

「また別の機会に」

と言つて男らしく肩を振つて行つた。りっぱな風采ふうさいの源氏が静かに歩を運ぶかたわらで先払いの聲が高く立てられた。源氏は車くるまへ頭中將ちゆうじやう、兵衛督ひやうとくなどを陪乗させた。

「つまらない隠れ家を発見されたことはどうも残念だ」

源氏は車中くるまなかでしきりにこう言つていた。

「昨夜はよい月でございましたから、嵯峨さかのお供のできませんでしたことが口惜くちおしくてなりませんで、今朝けさは霧の濃い中をやつて参つたのでございます。嵐山あらしやまの紅葉もみぢはまだ早うございました。今は秋草の盛りでございますね。某朝臣ぼつあそんはあすこで小鷹狩こたかがりを始めただ今いっしょに参れませんでした。どういたしますか」

などと若い人は言った。

「今日はもう一日一桂かつらの院で遊ぶことにしよう」

と源氏は言つて、車をそのほうへやつた。桂の別荘のほうではにわかきに客の饗応じやうおうの仕度したくが始められて、鵜飼ういなども呼ばれたのであるがその人夫たちの高いわからぬ会話が聞こえてくることに海岸にいたころの漁夫の声が思い出される源氏であつた。大井の野に残つた殿上役人が、しるしだけの小鳥を萩はぎの枝などへつけてあとを追つて来た。杯がたびたび巡つたあとで川べの逍遙しやうじやうを危あやぶまれながら源氏は桂の院で遊び暮らした。月がはなやかに上つてきたころから音楽の合奏が始まつた。絃樂のほうは琵琶びわ、和琴わこんなどだけで笛ふえの上手が皆選ばれて伴奏をした曲は秋にしっくり合つたもので、感じのよいこの小合奏に川風が吹き混じつておもしろかつた。月が高く上つたころ、清澄な世界がここに現出したような今夜の桂の院へ、殿上人がまた四、五人連れで来た。殿上に伺候していたのであるが、音楽の遊びがあつて、帝みかどが、

「今日は六日の謹慎日かんとんが済んだ日であるから、きつと源氏げんじの大臣おとどは来るはずであるのだ、どうしたか」

と仰せられた時に、嵯峨へ行つてゐることが奏されて、それで下された一人のお使いと同行者なのである。

「#ここから1字下げ」

「月のすむ川の遠をちなる里なれば桂の影はのどけかるらん

「#ここで字下げ終わり」

うらやましいことだ」

これが蔵人くらど弁であるお使いが源氏に伝えたお言葉である。源氏はかしまつて承った。清涼殿での音楽よりも、場所のおもしろさの多く加わったこの管絃楽に新来の人々は興味を覚えた。また杯が多く巡った。ここには纏頭てんとうにする物が備えてなかったために、源氏は大井の山荘のほうへ、

「たいそうでない纏頭の品があれば」

と言つてやった。明石あかしは手もとにあつた品を取りそろえて持たせて来た。衣服箱二荷であつた。お使いの弁は早く帰るので、さつそく女装束が纏頭に出された。

「#ここから2字下げ」

久方の光に近き名のみして朝夕霧も晴れぬ山ざと

「#ここで字下げ終わり」

というのが源氏の勅答の歌であつた。帝の行幸を待ち奉る意があるのであろう。「中に生おひたる」(久方の中におひたる里なれば光をのみぞ頼むべらなる)と源氏は古歌を口ずさんだ。源氏がまた躬みづか恒ねが「淡路にてあはとはるかに見し月の近き今宵こよひはところからかもと不思議がった歌のことを言い出すと、源氏の以前のことを思つて泣く人も出てきた。皆酔つてもいるからである。

「#ここから2字下げ」

めぐりきて手にとるばかりさやけきや淡路の島のあはと見し月

「#ここで字下げ終わり」

これは源氏の作である。

「#ここから2字下げ」

浮き雲にしばしまがひし月影のすみはつるよそのどけかるべき

「#ここで字下げ終わり」

頭中将うづつちやうである。右大弁は老人であつて、故院の御代みよにも睦まじくお召し使いになつた人であるが、その人の作、

「#ここから2字下げ」

雲の上の住みかを捨てて夜半よはの月いづれの谷に影隠しけん

「#ここで字下げ終わり」

なおいろいろな人の作もあつたが省略する。歌が出てからは、人々は感情のあふれてくるままに、こうした人間の愛し合う世界を千年も続けて見ていきたい氣を起こしたが、二条の院を出て四日目の朝になつた源氏は、今日はぜひ帰らねばならぬと急いだ。一行にいるいろな物をついだ供の人が加わつた列は、霧の間を行くのが秋草の園のようで美しかった。近衛府このえふの有名な芸人の舎人とねりうで、よく何かの時には源氏について来る男に今朝も「その駒こま」などを歌わせたが、源氏をはじめ高官などの脱いで与える衣服の数が多くてそこにもまた秋の野の錦にしきの翻る趣があつた。大騒ぎにはしやぎにはしやいで桂の院を人々の引き上げて行く物音を大井の山荘でははるかに聞いて寂しく思つた。言づてもせずに帰って行くことを源氏は心苦しう思つた。

二条の院に着いた源氏はしばらく休息をしながら夫人に嵯峨さかの話をした。

「あなたと約束した日が過ぎたから私は苦しみましたよ。風流男どもがあとを追って来てね、あまり留めるものだからそれに引かれていたのですよ。疲れてしまった」

と言って源氏は寢室へはいった。夫人が気むずかしいふうになっているのも気づかないように源氏は扱っていた。

「比較にならない人を競争者でもあるように考えたりなどすることもよくないことですよ。あなたは自分は自分であると思いがつていればいいのですよ」

と源氏は教えていた。日暮れ前に参内しようとして出かけぎわに、源氏は隠すように紙を持って手紙を書いているのは大井へやるものらしかった。こまごまと書かれている様子がうかがわれるのであった。侍を呼んで小声でささやきながら手紙を渡す源氏を女房たちは憎く思った。その晩は御所で宿直とのいもするはずであるが、夫人の機嫌きげんの直つていなかったことを思って、夜はふけていたが源氏は夫人をなだめるつもりで帰って来ると、大井の返事を使いが持って来た。隠すこともできずに源氏は夫人のそばでそれを読んだ。夫人を不愉快にするようなことも書いてなかったのだから、

「これを破ってあなたの手で捨ててください。困るからね、こんな物が散らばっていたりすることはもう私に似合ったことではないのだからね」

と夫人のほうへそれを出した源氏は、脇息きょうそくによりかかりながら、心のうちでは大井の姫君が恋しくて、灯ひをながめて、ものも言わずにじっとしていた。手紙はひろがったままであるが、女王じよおうが見よう

ともしないのを見て、

「見ないようにしていて、目のどこかであなたは見ているじゃありませんか」

と笑いながら夫人に言いかけた源氏の顔にはこぼれるような愛嬌あいぎょうがあつた。夫人のそばへ寄つて、

「ほんとうはね、かわいい子を見て来たのですよ。そんな人を見るとやはり前生の縁の浅くないということが思われたのですがね、とにかく子供のことはどうすればいいのだろう。公然私の子供として扱うことも世間へ恥ずかしいことだし、私はそれで煩悶はんもんしています。いつしよにあなたも心配してください。どうしよう、あなたが育ててみませんか、三つになつていのです。無邪気なかわいい顔をしているものだから、どうも捨てておけない気がします。小さいうちにあなたの子にしてもらえば、子供の将来を明るくしてやれるように思うのだが、失敬だとお思いにならなければあなたの手で袴着はかまぎをさせてやってください」

と源氏は言うのであつた。

「私を意地悪な者のようにばかり決めておいでになつて、これまでから私には大事なことを皆隠していらつしやるものですもの、私だけがあなたを信頼していることも改めなければならぬとこのころは私思っています。けれども私は小さい姫君のお相手にはなれますよ。どんなにおかわいいでしよう、その方ね」

と言つて、女王は少し微笑ほほえんだ。夫人は非常に子供好きであつたから、その子を自分がもらつて、その子を自分が抱いて、大事に育ててみたいと思つた。どうしよう、そうは言つたものここへつれて来たものであろうかと源氏はまた煩悶はんもんした。

源氏が大井の山荘を訪うことは困難であった。嵯峨の御堂の念仏の日を待ってはじめて出かけられるのであったから、月に二度より違いに行く日はないわけである。七夕よりは短い期間であっても女にとつては苦しい十五日が繰り返されていった。

底本：「全訳源氏物語 上巻」角川文庫、角川書店

1971（昭和46）年8月10日改版初版発行

1994（平成6）年12月20日56版発行

このファイルは、古典総合研究所 (<http://www.genji.co.jp/>) で入力されたものを、青空文庫形式にあらためて作成しました。

校正には、2002（平成14）年4月5日71版を使用しました。

入力：上田英代

校正：kumi

2003年6月9日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

源氏物語

薄雲

紫式部

與謝野晶子訳

【テキスト中に現れる記号について】

〈 〉：ルビ

(例) タのゆふへ

—：ルビの付く文字列の始まりを特定する記号

(例) 見一馴なれた

「#」：入力者注 主に外字の説明や、傍点の位置の指定

(例) 「#地から3字上げ」

「#地から3字上げ」さくら散る春の夕ゆふへのうすぐもの涙とな

「#地から3字上げ」りて落つる心地こころに (晶子)

冬になって来て川沿いの家にいる人は心細い思いをすることが多く、
気の落ち着くこともない日の続くのを、源氏も見かねて、

「これではたまらないだろう、私の言っている近い家へ引越す決心をなさい」

と勧めるのであったが、「宿変へて待つにも見えずなりぬればつらき所の多くもあるかな」という歌のように、恋人の冷淡に思われることも地理的に斟酌しんしゃくをしなければならぬと、しいて解釈してみずから慰めることなどもできなくなって、男の心を顕あらわに見なければならぬことは苦痛であろうと明石あかしは躊躇ちゆうちよをしていた。

「あなたがいやなら姫君だけでもそうさせてはどう。こうしておくことは将来のためにどうかと思う。私はこの子の運命に予期していることがあるのだから、その暁を思うともったいない。西の対たいの人が姫君のことを知っていて、非常に見たがっているのです。しばらく、あの人に預けて、袴着はかまぎの式なども公然二条の院でさせたいと私は思う」

源氏はねんごろにこう言うのであったが、源氏がそう計らおうとするのでないかとは、明石が以前から想像していたことであつたから、この言葉を聞くとはっと胸がとどろいた。

「よいお母様の子にしていただきましても、ほんとうのことは世間が知っています、何かと噂うわさが立ちましては、ただ今の御親切がかえって悪い結果にならないでしょうか」

手放しがたいように女は思うふうである。

「あなたが賛成しないのはもっともだけれど、継母の点で不安がったりはしないでおおきなさい。あの人は私の所へ来てずいぶん長くなるのだが、こんなかわいい者のできないのを寂しがってね、前齋ぜんさい宮みやなどは幾つも年が違っていない方だけれど、娘として世話をすることに楽しみを見いだしているようなわけだから、ましてこんな無邪気な人にはどれほど深い愛を持つかしれない、と私が思うことのできる人ですよ」

源氏は紫の女王にょおうの善良さを語った。それはほんとうであるに違いない、昔はどこへ源氏の愛は落ち着くものか想像もできないという噂うわさが田舎いなかにまで聞こえたものであつた源氏の多情な、恋愛生活が清算されて、皆過去のことになつたのは今の夫人を源氏が得たためであるから、だれよりもすぐれた女性に違いないと、こんなことを明石は考えて、何の価値もない自分は決してそうした夫人の競争者ではないが、京へ源氏に迎えられて自分が行けば、夫人に不快な存在と見られることがあるかもしれない。自分はどうなるもこうなるも同じことであるが、長い未来を持つ子は結局夫人の世話になることであろうから、それならば無心でいる今のうちに夫人の手へ譲つてしまおうかという考えが起こつてきた。しかしまた気がかりでならないことであろうし、つれづれを慰めるものを失つては、自分は何によつて日を送ろう、姫君がいるためにたまさかに訪ねてくれる源氏が、立ち寄つてくれることもなくなるのではないかとはんもん煩悶されて、結局は自身の薄倖はうじつを悲しむ明石であつた。尼君は思慮のある女であつたから、

「あなたが姫君を手放すまいとするのはまちがっている。ここにおいてにならなくなることは、どんなに苦しいことかはしれないけれど、あなたは母として姫君の最も幸福になることを考えなければならぬ。姫君を愛しないでおっしゃることではありませんよ。あちらの奥様を信頼してお渡しなさいよ。母親次第で陛下のお子様だつて階級ができるのだからね。源氏の大臣がだれよりもすぐれた天分を持つていらつしやりながら、御位みくらいにお即つきにならずに一臣下で仕えていらつしやるのは、大納言さんがもう一段出世ができずにお亡おかくくれになつて、お嬢さんが更衣こういにしかなれなかつた、その方が

らお生まれになったことで御損をなすつたのですよ。まして私たちの身分は問題にならないほど恥ずかしいものなのですからね。また親王様だつて、大臣の家だつて、良い奥様から生まれたお子さんと、劣つた生母を持つお子さんとは人の尊敬のしかたが違つし、親だつて公平にはおできにならないものです。姫君の場合を考えれば、まだ幾人もいらつしやるりつぱな奥様方のどつちかで姫君がお生まれになれば、当然肩身の狭いほうのお嬢さんにおなりになりますよ。一体女というものは親からたいせつにしてもらうことで将来の運も招くことになるものよ。袴着はかまぎの式だつても、どんなに精一杯のことをしても大井の山荘ですることでははなやかなものになるわけはない。そんなこともあちらへおまかせして、どれほど尊重されていらつしやるか、どれほどりつぱな式をしてくださつたかと聞くだけで満足をするになさいね」

と娘に訓おしえた。賢い人に聞いて見ても、占いをさせてみても、二条の院へ渡すほうに姫君の幸運があるとばかり言われて、明石は子を放すまいと固執する力が弱つて行つた。源氏もそうしたくは思いながらも、女の気持ちを尊重してしうて言うことはしなかつた。手紙のついでに、袴着の仕度にかかりましたかと書いた返事に、

「#ここから1字下げ」

何事も無力な母のそばにありましては気の毒でございます。先日のお言葉のように生おい先が哀れに思われます。しかし、そちらへこの子が出ましてはまたどんなにお恥ずかしいことばかりでしょう。

「#ここで字下げ終わり」

と言つて来たのを源氏は哀れに思つた。源氏はいよいよ二条の院ですることになつた姫君の袴着の吉日を選ばせて、式の用意を命じ

ていた。

式は式でも紫夫人の手へ姫君を渡しきりにすることは今でも堪えがたいことに明石は思いながらも、何事も姫君の幸福を先にして考えねばならぬと悲痛な決心をしていた。乳母めのとと別れてしまわねばならぬことでもあつたから、

「気がめいつてならない時とか、つれづれな時とかに、どんなにあなたの友情が私を助けてくださつたかしのれないのに、これから先を思うと、お嬢さんのいなくなることといっしょにまたそれがどんなに寂しいことでしょう」

と乳母めのとに言つて明石は泣いた。

「前生の因縁だつたのでございましょうね、不意にお宅しやっかいで御厄介ごやくかいになることになりましたから、長い間どんなに御親切ごせつせつにしていただいたことでしょう。私の心に御好意ごこういは彫りえつけられておりますから、これきり疎遠そえんにいたしますようなことは決してないと思われますし、またごいっしょに暮らさせていただく日の参りますことも信じておりますが、しばらくでも別々べつべつになりました、知らない方たちの中へはいつてまいりますことは苦しゅうございます」

と乳母めのとも言うのであつた。こんなことを毎日言っているうちに十二月にもなつた。雪や霰みぞれの降る日が多くて、心細い氣のする明石は、いろいろな形でせねばならない苦勞くるわうの多い自分であると悲しんで、平生へいぜいよりもしみじみ姫君を愛撫あいぶしていた。大雪おほゆきになつた朝、過去こくわ未み来らいが思い続けられて、平生は縁ゆかりに近く出るようなこともあまりないのであるが、端はなはのほうに来て明石は汀みぎわの氷こほりなどにながめ入つていた。柔らかな白を幾枚か重ねたからだつき、頭つき、後ごる姿は最高たかきの貴き女よというものもこうした氣高けだかさのあるものであろうと見えた。こぼ

れてくる涙を払いながら、

「こんな日にはまた特別にあなたが恋しいでしょう」

と可憐かれんに言つて、また乳母めのとに言った。

「#ここから2字下げ」

雪深みやまき深山のみちは晴れずともなほふみ通へ跡たえずして

「#ここで字下げ終わり」

乳母も泣きながら、

「#ここから2字下げ」

雪間よしのなき吉野の山をたづねても心の通ふ跡絶えめやは

「#ここで字下げ終わり」

と慰めるのであった。この雪が少し解けたところに源氏が来た。平生は待たれる人であったが、今度は姫君をつれて行かれるかと思うことで、源氏の訪れに胸騒ぎのする明石であった。自分の意志で決まることである、謝絶すればしいてとはお言いにならないはずである、自分がしっかりとしていればよいのであると、こんな気も明石はしたが、約束を変更することなどは軽率に思われることであると反省した。美しい顔をして前にすわっている子を見て源氏は、この子が間に生まれた明石と自分の因縁は並み並みのものではないと思つた。今年から伸ばした髪がもう肩先にかかるほどになつていて、ゆらゆらとみごとであった。顔つき、目つきのはなやかな美しさも類のない幼女である。これを手放すことでどんなに苦悶くもんしているこ

とかと思うと哀れで、一夜がかりで源氏は慰め明かした。

「いいえ、それでいいと思っております。私の生みましたという傷も隠されてしまいますほどにしてやっていただかれれば」

と言いながらも、忍びきれずに泣く明石が哀れであった。姫君は無邪気に父君といっしよに車へ早く乗りたがった。車の寄せられる所へ明石は自身で姫君を抱いて出た。片言の美しい声で、袖をとらえて母に乗ることを勧めるのが悲しかった。

「#ここから2字下げ」

末遠き二葉の松に引き分かれいつか木高きかげを見るべき

「#ここで字下げ終わり」

とよくも言われないうままに非常に明石は泣いた。こんなことも想像していたことである、心苦しいことをすることになったと源氏は歎息した。

「#ここから1字下げ」

「生ひ初めし根も深ければ武隈の松に小松の千代を並べん

「#ここで字下げ終わり」

気を長くお待ちなさい」

と慰めるほかはないのである。道理はよくわかっていて抑制しようとしても明石の悲しさはどうしようもないのである。乳母と少将という若い女房だけが従って行くのである。守り刀、天児などを持って少将は車に乗った。女房車に若い女房や童女などをおおぜい乗

せて見送りに出した。源氏は道々も明石の心を思つて罪を作ること
に知らず知らず自分はなつたかとも思った。

暗くなつてから着いた二条の院のはなやかな空気はどこにもあふ
れるばかりに見えて、田舎に馴なれてきた自分らがこの中で暮らすこ
とはきまりの悪い恥はずかしいことであると、二人の女は車おから下り
るのに躊躇ちゅうちよさえした。西向きの座敷が姫君の居間として設けられて
あつて、小さい室内の装飾品、手道具がそろえられてあつた。乳母
の部屋は西の渡殿の北側の一室にできていた。姫君は途中で眠つて
しまつたのである。抱きおろされて目がさめた時にも泣きなどはし
なかつた。夫人の居間で菓子を食べなどしていたが、そのうちあた
りを見まわして母のいないことに気がつくつと、かわいいふうに不安
な表情を見せた。源氏は乳母を呼んでなだめさせた。残された母親
はましてどんなに悲しがつていふことであろうと、想像されること
は、源氏に心苦しいことであつたが、こうして最愛の妻と二人でこ
のかわいい子をこれから育てていくことは非常な幸福なことである
とも思った。どうしてあの人に生まれて、この人に生まれてこなか
つたか、自分の娘として完全に瑕きずのない所へはなぜできてこなかつ
たのかと、さすがに残念にも源氏は思うのであつた。当座は母や祖
母や、大井の家で見一馴なれた人たちの名を呼んで泣くこともあつた
が、大体が優しい、美しい気質の子であつたから、よく夫人に親し
んでしまつた。女王にょおうは可憐かれんなものを得たと満足しているのである。
専心にこの子の世話をして、抱いたり、ながめたりすることが夫人
のまたとない喜びになつて、乳母も自然に夫人に接近するようにな
つた。ほかにもう一人身分ある女の乳の出る人が乳母に添えられた。

袴着はかまぎはたいそうな用意がされたので、もなかつたが世間並みなものではなかつた。その席上の飾りが難遊ひなびの物のようで美しかった。列席した高官たちなどはこんな日にだけ来るのでもなく、毎日のように出入りするのであつたから目だたなかつた。ただその式で姫君が袴ひもの紐を互たすきがたいちがいたすきがたに褌形に胸へ掛けて結んだ姿がいつそうかわいく見えたことを言つておかねばならない。

大井の山荘では毎日子を恋しがつて明石が泣いていた。自身の愛が足らず、考えが足りなかつたようにも後悔していた。尼君も泣いてばかりいたが、姫君の大事がられている消息の伝わつてくることはこの人にもうれしかつた。十分にされていて袴着の贈り物などここから持たせてやる必要は何もなさそうに思われたので、姫君づきの女房たちに、乳母をはじめ新しい一重ねずつの華美な衣裳を寄贈おくるだけのことにした。子さえ取ればあとは無用視するように女が思わないかと気がかりに思つて年内にまた源氏は大井へ行つた。寂しい山荘住まいをして、唯一の慰めであつた子供に離れた女に同情して源氏は絶え間なく手紙を送つていた。夫人ももうこのごろではかわいひい人に免じて恨むことが少なくなつた。

正月が来た。うららかな空の下に二条の院の源氏夫婦の幸福な春があつた。出入りする顯官たちは七日に新年の拝礼を行なつた。若い殿上役人たちははなやかに思ひ上がった顔のそろつている御代みよである。それ以下の人々も心の中には苦勞もあるであろうが、表面はそれぞれの職業に楽しんでついているふうに見えた。

東の院の対たいの夫人も品位の添つた暮らしをしていた。女房や童女の服装などにも洗練されたよい趣味を見せていた。明石の君の山荘に比べて近いことは花散里はなぢりの強味になつて、源氏は閑暇ひまな時を見計

らってよくここへ来ていた。夜をこちらで泊まっていくようなこと
はない。性格がきわめて善良で、無邪気で、自分にはこれだけの運
よりないのであるとあきらめることを知っていた。源氏にとっては
この人ほど気安く思われる夫人はなかった。何かの場合にも紫夫人
とたいした差別のない扱い方を源氏はするのであったから、けいべつ軽蔑す
る者もなく、その方へも敬意を表しに行く人が絶えない。別当も家
職も忠実に事務を取っていて整然とした一家をなしていた。

山荘の人のことを絶えず思いやっている源氏は、公私の正月の用
が片づいたころのある日、大井へ出かけようとして、ときめく心に
装いを凝らしていた。桜の色の直衣のうしの下に美しい服を幾枚か重ねて、
ひととおりたきもの薫物がた焚きしめられたあとで、夫人へ出かけの言葉を源
氏はかけに来た。明るいつ夕日の光に今日はいっそう美しく見えた。
夫人は恨めしい心を抱きながら見送っているのであった。無邪気な
姫君が源氏の裾すそにまつわってついて来る。御簾みすの外へも出そうにな
ったので、立ち止まって源氏は哀れにわが子をながめていたが、な
だめながら、「明日かへりこん」（桜人その船とどめ島つ田を十一
町まち作れる見て帰りこんや、そよや明日帰りこんや）と口ずさんで縁
側へ出て行くのを、女王にょおうは中から渡殿の口へ先まわりをさせて、中
将という女房に言わせた。

「#ここから2字下げ」

船とむる遠方をちかたびと人のなくばこそ明日帰りこん夫せなとまち見め

「#ここで字下げ終わり」

物一馴なれた調子で歌いかけたのである。源氏ははなやかな笑顔えがおを

しながら、

「#ここから2字下げ」

行きて見て明日もさねこんなかなかに遠方人は心おくとも

「#ここで字下げ終わり」

と言う。父母が何を言っているとも知らぬ姫君が、うれしそうに走りまわるのを見て夫人の「遠方人」おちかたびとを失敬だと思ふ心も緩和されていった。どんなにこの子のことばかり考えているであろう、自分であれば恋しくてならないであろう、こんなかわいい子供なのだからと思つて、女王はじつと姫君の顔をながめていたが、懐へ抱きとつて、美しい乳を飲ませると言つて口へくくめなどして戯れているのは、外から見ても非常に美しい場面であつた。女房たちは、「なぜほんとうのお子様にお生まれにならなかつたのでしょうか。同じことならそれであればなおよかつたでしょうにね」などとささやいていた。

大井の山荘は風流に住みなされていた。建物も普通の形式離れた雅味のある家なのである。明石は源氏が見るたびに美が完成されていくと思ふ容姿を持っていて、この人は貴女きじよに何ほども劣るところがない。身分から常識的に想像すれば、ありうべくもないことと思ふであろうが、それも世間と相いれない偏狭な親の性格などが禍わざわいしているだけで、家柄などは決して悪くはないのであるから、かくあるのが自然であるとも源氏は思つていた。逢つている時が短くて、すぐに帰邸を思わねばならぬことを苦しがつて、「夢のわたりの浮き橋か」(うち渡しつつ物をこそ思へ)と源氏は歎かれて、

十三絃の出でいたのを引き寄せ、明石の秋の深夜に聞いた上手な琵琶の音もおもい出されるので、自身はそれを弾きながら、女にもぜひ弾けと勧めた。明石は少し合わせて弾いた。なぜこうまでりつぱなことばかりのできる女であろうと源氏は思った。源氏は姫君の様子をくわしく語っていた。大井の山荘も源氏にとっては愛人の家にもすぎないのであるが、こんなふうにして泊まり込んでいる時もあるので、ちよつとした菓子、強飯というふうな物くらいを食べることもあった。自家の御堂とか、桂の院とかへ行つて定まつた食事はして、貴人の体面はくずさないが、そうかといつて並み並みの妾の家らしくはして見せず、ある点まではこの家と同化した生活をするよ。うな寛大さを示しているのは、明石に持つ愛情の深さがしからしめるのである。明石も源氏のその気持ちを尊重して、出すぎたと思われることはせず、卑下もしすぎないのが、源氏には感じよく思われた。相当に身分のよい愛人の家でもこれほど源氏が打ち解けて暮らすことはないという話も明石は知っていたから。近い東の院などへ移つて行つては源氏に珍しがられることもなくなり、飽かれた女になる時期を早くするようなものである、地理的に不便で、特に思い立つて来なければならぬ所にいるのが自分の強味であると思つているのである。明石の入道も今後のいっさいのことは神仏に任せるといふようなことも言ったのであるが、源氏の愛情、娘や孫の扱われ方などを知りたがつて始終使いを出していた。報せを得て胸のふさがるようなこともあったし、名誉を得た気のすることもあった。

この時分に太政大臣が薨去した。国家の柱石であつた人であるから帝もお惜しみになつた。源氏も遺憾に思った。これまではすべてをその人に任せて閑暇のある地位にいられたわけであるから、死別

の悲しみのほかに責任の重くなることを痛感した。帝は御年齢の割に大人びた聡明な方であつて、御自身だけで政治をあそばすのに危あぶなげもないのであるが、だれか一人の御後見の者は必要であつた。だれにそのことを譲つて静かな生活から、やがては出家の志望も遂げえようと思われれることで源氏は太政大臣の死によつて打撃を受けた気がするのである。源氏は大臣の息子や孫以上に至誠をもつてあとの仏事や法要を営んだ。今年はいたい静かでない年であつた。何かの前兆でないかと思われれるようなことも頻々ひんびんとして起こる。日月星などの天象の上にも不思議が多く現われて世間に不安な気がみなぎつていた。天文の専門家や学者が研究して政府へ報告する文章の中にも、普通に見ては奇怪に思われれることで、源氏の内大臣だけに解釈のついて、そして疚やましく苦しく思われれることが混じつていた。

女院は今年の春の初めからずっと病気をしておいでになつて、三月には御重体にもおなりになつたので、行幸などもあつた。陛下の院にお別れになつたところは御幼年で、何事も深くはお感じにならなかつたのであるが、今度の御大病については非常にお悲しみになるふうであつたから、女院もまたお悲しかった。

「今年はずつと私の死ぬ年ということを知っていましたけれど、初めはたいした病気でございませんでしたから、賢明に死を予感して言うらしく他に見られるのもいかかと思ひまして功德くどくのこともこのほつても例年以上なことは遠慮してしませんでした。参内いたしましたね、故院こいんのお話などもお聞かせしようなどとも思つていたのでしたが、普通の気分でいられる時が少のうございましたから、お目にも長くかからないでございました」

と弱々しいふうで女院は帝へ申された。今年は三十七歳でありになるのである。しかしお年よりもずっとお若くお見えになってまだ盛りの御容姿をお持ちあそばされるのであるから、帝は惜しく悲しく思召おぼしめされた。お厄年であることから、はつきりとされない御容体の幾月も続くのをすら帝は悲しんでおいでになりながら、そのころにもっとよく御養生をさせ、熱心に祈禱きとうをさせなかつたかと帝は悔やんでおいでになった。近ごろになってお驚きになったように急に御一快癒かいゆの法などを行なわせておいでになるのである。これまではお弱い方にまた御持病が出たというように解釈して油断のあつたことを源氏も深く歎なげいていた。尊貴な御身は御病母のもとにも長くはおとどまりになることができずに間もなくお帰りになるのであつた。悲しい日であつた。女院は御病苦のためにはかばかしくものもお言われになれないのである。お心の中ではすぐれた高貴の身に生まれて、人間の最上の光栄とする后おのの位にも自分は上つた。不満足なことの多いようにも思つたが、考えればだれの幸福よりも大きな幸福のあつた自分であるとも思召した。帝が夢にも源氏との重い関係をご存じでないことだけを女院はおいたわしくお思いになって、これがこの世に心の残ることのような気があそばされた。

源氏は一廷臣として太政大臣に続いてまた女院のすでに危篤状態になつておいでになることは歎なげかわしいとしていた。人知れぬ心の中では無限の悲しみをしていて、あらゆる神仏に頼んで宮のお命をとどめようとしているのである。もう長い間禁制の言葉としておさえていた初恋以来の心を告げることが、この際になるまで果たしえないことを源氏は非常に悲しいことであると思つた。源氏は伺候して女院の御寢室の境に立つた几帳きちようの前で御容体などを女房たちに聞

いてみると、ごく親しくお仕えする人たちだけがそこにはいて、くわしく話してくれた。

「もうずっと前から悪いのを我慢あそばして仏様のお勤めを少しもお休みになりませんでしたが、積もり積もってどっとお悪くおなりあそばしたのでございます。このごろでは柑子類かんじすらもお口にお触れになりませんから、御衰弱が進むばかりで、御心配申し上げますような御容体におなりあそばしました」

と歎くのであった。

「院の御遺言をお守りくださって、陛下の御後見をしてくださいますことで、今までどれほど感謝して参ったかしれませんが、あなたにお報いする機会がいつかあることと、のんきに思っておりますことが、今日になりましたはまことに残念でなりません」

お言葉を源氏へお取り次がせになる女房へ仰せられるお声がほのかに聞こえてくるのである。源氏はお言葉をいただいてもお返辞ができませんに泣くばかりである。見ている女房たちにはそれもまた悲しいことであつた。どうしてこんなに泣かれるのか、気の弱さを顕わに見せることではないかと人目が思われるのであるが、それにもかかわらず涙が流れる。女院のお若かつた日から今日までのことを思うと、恋は別にして考えても惜しいお命が人間の力でどうなることとも思われないことで限りもなく悲しかった。

「無力な私も陛下の御後見にできますだけの努力はしておりますが、太政大臣の薨去されましたことで大きな打撃を受けましたおりから、御重患におなりあそばしたので、頭はただ混乱いたすばかりで、私も長く生きていられない気がいたします」

こんなことを源氏が言っているうちに、あかりが消えていくよう

に女院は崩御あそばされた。

源氏は力を落として深い悲しみに浸っていた。尊貴な方でもすぐれた御人格の宮は、民衆のためにも大きな愛を持っておいでになった。権勢があるために知らず知らず一部分の人をしいたげることができてくるものであるが、女院にはそうしたお過ちもなかった。女院をお喜ばせしようと当局者の考えることもそれだけ国民の負担がふえることであるとお認めになることはお受けにならなかった。宗教のほうのことも僧の言葉をお聞きになるだけで、派手な人目を驚かすような仏事、法要などの行なわれた話は、昔の模範的な聖代にもあることであつたが、女院はそれを避けておいでになった。御両親の御遺産、官から年々定まつて支給せられる物の中から、実質的な慈善と僧家への寄付をあそばされた。であつたから僧の片端にすぎないほどの者までも御恩恵に浴していたことを思つて崩御を悲しんだ。世の中の人は皆女院をお惜しみして泣いた。殿上の人も皆一真黒な喪服姿になつて寂しい春であつた。

源氏は二条の院の庭の桜を見ても、故院の花の宴の日のことが思われ、当時の中宮が思われた。「今年ばかりは」（墨染めに咲け）と口ずさまれるのであつた。人が不審を起こすであろうことをはばかつて、念誦堂に引きこもつて終日源氏は泣いていた。はなやかに春の夕日がさして、はるかな山の頂の立ち木の姿もあざやかに見える下を、薄く流れて行く雲が鈍色であつた。何一つも源氏の心を惹くものもないころであつたが、これだけは身に沁んでながめられた。

「#ここから2字下げ」

入り日さす峯にたなびく薄雲は物思ふ袖に色やまがへる

「#ここで字下げ終わり」

これはだれも知らぬ源氏の歌である。御葬儀に付帯したことの皆終わったころになってかえって帝はお心細く思召した。女院の御母後の時代から祈りの僧としてお仕えしていて、女院も非常に御尊敬あそばされ、御信頼あそばされた人で、朝廷からも重い待遇を受けて、大きな御祈願がこの人の手で多く行なわれたこともある僧都があつた。年は七十くらいである。もう最後の行をするといつて山にこもっていたが僧都は女院の崩御によって京へ出て来た。宮中から御召しがあつて、しばしば御所へ出仕していたが、近ごろはまた以前のように君側のお勤めをするようにと源氏から勧められて、

「もう夜居などはこの健康でお勤めする自信はありませんが、もつたいたい仰せでもございますし、お崩れになりました女院様への御奉公になることと思いますから」

と言いながら夜居の僧として帝に侍していた。静かな夜明けにだれもおそばに人がいず、いた人は皆退出してしまつた時であつた。

僧都は昔風に咳払いをしながら、世の中のお話を申し上げていたが、その続きに、

「まことに申し上げにくいことございまして、かえつてそのことが罪を作りますことになるかもしれせんから、躊躇はいたされませんが、陛下がご存じにならないでは相当な大きな罪をお得になるとでございますから、天の目の恐ろしさを思いまして、私は苦しみながら亡くなりますれば、やはり陛下のおためにはならないばかりでなく、仏様からも卑怯者としてお憎しみを受けると思ひまして」

こんなことを言い出した。しかもすぐにはあとを言わずにいるのである。帝は何のことであろう、今日もまだ意志の通らぬことがあって、その解決を見た上でなければ清い往生のできぬような不安があるのかもしれない。僧というものは俗を離れた世界に住みながら嫉妬排擠しつとはいせいが多くてうるさいものだそうであるからと思召して、

「私は子供の時から続いてあなたを最も親しい者として信用しているのであるが、あなたのほうには私に言えないことを持っているような隔てがあつたのかと思うと少し恨めしい」と仰せられた。

「もつたいない。私は仏様がお禁じになりました真言秘密の法も陛下には御伝授申し上げました。私個人のことと申し上げにくいことがございましょう。この話は過去未来に広く関聯かんれんしたことでございましてお崩れかくになりました院、女院様、現在國務をお預かりになる内大臣のおためにもかえって悪い影響をお与えることになるかもしれません。老いた僧の身の私はどんな難儀になりましたも後悔などはいたしません。仏様からこの告白はお勧めを受けてくださいます。陛下がお妊はらまれになりました時から、故宮はたいへんな御心配をなさいまして、私に御委託あそばしたある祈禱きとうがございました。くわしいことは世捨て人の私に想像ができませんでございました。大臣おとどが一時失脚をなさいまして難儀にお逢あいになりました。たころ宮の御恐怖は非常なものでございまして、重ねてまたお祈りを私へ仰せつけになりました。大臣おとどがそれをお聞きになりますと、また御自身のほうからも同じ御祈禱をさらに増してするようにと御下命がございまして、それは御位にお即つきあそばすまで続けました祈禱がございました。そのお祈りの主旨はこうでございました」

と言つて、くわしく僧都の奏上するところを聞こし召して、お驚きになつた帝の御心は恥ずかしさと、恐しさと、悲しさとの入り乱れて名状しがたいものであつた。何とも仰せがないので、僧都は進んで秘密をお知らせ申し上げたことを御不快に思召すのかと恐懼して、そつと退出しようとしたのを、帝はおとどめになつた。

「それを自分が知らないままで済んだなら後世までも罪を負つて行かなければならなかつたと思う。今まで言つてくれなかつたことを私はむしろあなたに信用がなかつたのかと恨めしく思う。そのことをほかにも知つた者があるだろうか」

と仰せられる。

「決してございません。私と王命婦以外にこの秘密をうかがい知つた者はございません。その隠れた事実のために恐ろしい天の譴がしきりにあるのでございます。世間に何となく不安な気分のございますのもこのためなのでございます。御幼年で何のお弁えもおありあそばさないころは天もとがめないののでございますが、大人におなりあそばされた今日になつて天が怒りを示すのでございます。すべてのごことは御両親の御代から始められなければなりません。何の罪とも知し召さないことが恐ろしゅうございますから、いったん忘却の中へ追つたことを私はまた取り出して申し上げます」

泣く泣く僧都の語るうちに朝が来たので退出してしまつた。

帝は隠れた事実を夢のようにお聞きになつて、いろいろと御一煩悶をあそばされた。故院のためにも済まないこととお思われになつたし、源氏が父君でありながら自分の臣下となつていているということももつたいたなく思召された。お胸が苦しくて朝の時が進んでも御寢室をお離れにならないのを、こうこうと報せがあつて源氏の大臣が

驚いて参内した。お出ましになつて源氏の顔を御覧になるといつそ
う忍びがたくおなりあそばされた。帝は御落涙になつた。源氏は女
院をお慕いあそばされる御親子の情から、夜も昼もお悲しいのであ
らうと拝見した、その日に式部卿親王の薨去が奏上された。いよいよ
天の示しが急になつたというように帝はお感じになつたのであつ
た。こんなころであつたからこの日は源氏も自邸へ退出せずにつづ
とおそばに侍していた。しんみりとしたお話の中で、

「もう世の終わりが来たのではないだろうか。私は心細くてならな
いし、天下の人心もこんなふうに不安になつている時だから私はこ
の地位に落ち着いていられない。女院がどう思召すかと御遠慮をし
ていて、位を退くことなどは言い出せなかつたのであるが、私はも
う位を譲つて責任の軽い身の上になりたく思う」

こんなことを帝は仰せられた。

「それはあるまじいことでございます。死人が多くて人心が恐怖状
態になつておりますことは、必ずしも政治の正しいのと正しくない
のによふることではございません。聖主の御代にも天変と地上の乱
のございますことは支那にもございました。ここにもあつたのでご
ざいます。まして老人たちの天命が終わつて亡くなつてまいります
ことは大御心おおみこころにおかけあそばすことではございません」
などと源氏は言つて、讓位のことを仰せられた帝をお諫めしてい
た。問題が問題であるからむずかしい文字は省略する。

じみな黒い喪服姿の源氏の顔と竜顔とは常よりもなおいつそうよ
く似てほとんど同じもののように見えた。帝も前から鏡にうつる
お顔で源氏に似たことは知つておいでになるのであるが、僧都の話
をお聞きになつた今はしみじみとその顔に御目が注がれて熱い御愛

情のお心にわくのをお覚えになる帝は、どうかして源氏にそのことを語りたいと思召すのであったが、さすがに御言葉にはあそばしにくいことであつたから、お若い帝は羞恥をお感じになつてお言い出しにならなかつた。そんな間帝はただの話も常よりはなつかしいふうにお語りになり、敬意をお見せになつたりもあそばして、以前とは変わった御様子がうかがわれるのを、聡明な源氏は、不思議な現象であると思つたが、僧都がお話し申し上げたほど明確に秘密を帝がお知りになつたとは想像しなかつた。帝は王命婦にくわしいことを尋ねたく思召したが、今になつて女院が秘密を秘密とすることに苦心されたことを、自分が知つたことは命婦にも思われたくない、ただ大臣にだけほめかして、歴史の上になつた例があるということを知りたいと思召されるのであつたが、そうしたお話をあそばす機会がお見つきりにならないためにいよいよ御學問に没頭あそばされて、いろいろの書物を御覧になつたが、支那にはそうした事実が公然認められている天子も、隠れた事実として伝記に書かれてある天子も多かつたが、この国の書物からはさらにこれにあたる例を御発見あそばすことはできなかつた。皇子の源氏になつた人が納言になり、大臣になり、さらに親王になり、即位される例は幾つもあった。りつぱな人格を尊敬することに託して、自分は源氏に位を譲ろうかとも思召すのであつた。

秋の除目じもくに源氏を太政大臣に任じようとあそばして、内諾を得るためにお話をあそばした時に、帝は源氏を天子にしたいかねての思召しをはじめてお洩もらしになつた。源氏はまぶしくも、恐ろしくも思つて、あるまじいことに思うと奏上した。

「故院はおおぜいのお子様の中で特に私をお愛しになりながら、御みく

位をお譲りになることはお考えにもならなかつたのでございます。その御意志にそむいて、及びない地位に私がどうしてなれましょう。故院の思召しどおりには私は一臣下として政治に携わらせていただきまして、今少し年を取りました時に、静かな出家の生活にもはいるうと存じます」

と平生の源氏らしく御辞退するだけで、御心を解したふうのなかつたことを帝は残念に思召した。太政大臣に任命されることも今しばらくのちのことにとしたいと辞退した源氏は、位階だけが一級進められて、牛車で禁門を通過する御許可だけを得た。帝はそれも御不満足なことに思召して、親王になることをしきりにお勧めあそばされたが、そうして帝の御後見をする政治家がいなくなる、中納言が今度大納言になって右大将を兼任することになったが、この人がもう一段昇進したあとであつたなら、親王になって閑散な位置へ退くのもよいと源氏は思っていた。源氏はこんなふうな態度を帝がおとりあそばすことになったことで苦しんでいた。故中宮のためにもおかわいそうなことで、また陛下には御一煩悶はんもんをおさせする結果になつていゝ秘密奏上をだれがしたかと怪しく思った。命婦は御匣殿みくしげとののほかへ移つたあとの御殿に部屋をいただいで住んでいたから、源氏はそのほうへ訪ねて行つた。

「あのことをもし何かの機会に少しでも陛下のお耳へお入れになつたのですか」

と源氏は言つたが、

「私がどういたしました。宮様は陛下が秘密をお悟りになることを非常に恐れておいでになりましたが、また一面では陛下へ絶対にお知らせしないことで陛下が御仏の咎とがをお受けになりはせぬかと御煩

悶をあそばしたようでした」

命婦はこう答えていた。こんな話にも故宮の御感情のこまやかさが忍ばれて源氏は恋しく思った。

齋宮さいくうの女御にょごは予想されたように源氏の後援があるために後宮しうきゆうのすばらしい地位を得ていた。すべての点に源氏の理想にする貴女きじよらしさの備わった人であったから、源氏はたいせつにかしずいていた。この秋女御は御所から二条の院へ退出した。中央の寝殿を女御の住居に決めて、輝くほどの装飾をして源氏は迎えたのであった。もう院への御遠慮も薄らいで、万事を養父の心で世話をしているのである。秋の雨が静かに降って植え込みの草の花の濡れ乱れた庭をながめて女院のことがまた悲しく思い出された源氏は、湿ったふうで女御の御殿へ行った。濃い鈍色にびの直衣ちうしを着て、病死者などの多いために政治の局にあたる者は謹慎をしなければならぬというのに託して、実は女院のために源氏は続いて精進をしているのであったから、手に掛けた数珠しじゆを見せぬように袖そでに隠した様子などが艶えんであった。御簾みすの中へ源氏ははいつて行った。几帳きちようだけを隔てて王女御はお逢あいになった。

「庭の草花は残らず咲きましたよ。今年のような恐ろしい年でも、秋を忘れずに咲くのが哀れです」

こう言いながら柱によりかかっている源氏は美しかった。御息所みやすどころのことを言い出して、野の宮に行つてなかなか逢つてもらえなかった秋のことも話した。故人を切に恋しく思うふうが源氏に見えた。

宮も「いにしへの昔のことをいとどしくかくれば袖そでぞ露れけかりける」というように、少しお泣きになる様子が非常に可憐かれんで、みじろぎの音も類のない柔らかさに聞こえた。艶えんな人であるに相違ない、今日

までまだよく顔を見ることのできないことが残念であると、ふと源氏の胸が騒いだ。困った癖である。

「私は過去の青年時代に、みずから求めて物思いの多い日を送りました。恋愛するのは苦しいものなのですよ。悪い結果を見ることもたくさんありましたが、とうとう終しまいまで自分の誠意がわかってもらえなかった二つのことがあるのですが、その一つはあなたのお母様のことです。お恨ませしたままお別れしてしまって、このことで未来までの煩いになることを私はしてしまっただかと悲しんでいました。が、こうしてあなたにお尽くしすることのできることで私はみずから慰んでいるものなおそれでもおおかくれになったあなたのお母様のことを考えますと、私の心はいつも暗くなります」

もう一つのほうの話はしなかった。

「私の何もかもが途中で挫折させつしてしまっただころ、心苦しくてなりませんでした。ことがどうやら少しずつよくなっていくようです。今東の院に住んでおります妻は、寄るべの少ない点で絶えず私の気がかりになったものですが、それも安心のできるようになりました。善良な女で、私と双方でよく理解し合っていますから朗らかなものです。私がまた世の中へ帰って朝政あすかに与あずかるような喜びは私にたいしたこととは思われないで、そうした恋愛問題のほうがたいせつに思われる私なのですから、どんな抑制を心に加えてあなたの御後見だけに満足していることか、それをご存じになっっていますか、御同情でもしていただかなければいかありません」

と源氏は言った。面倒めんどうな話になって、宮は何ともお返辞をあそばさないのを見て、

「そうですね、そんなことを言っただけが悪い」

と話をほかへ源氏は移した。

「今の私の望みは閑散な身になって風流一三昧さんまいに暮らしうることと、のちの世の勤めも十分にすることのほかはありませんが、この世の思い出になることを一つでも残すことのできないのはさすがに残念に思われます。ただ二人の子供がごさいますが、老い先ははるかで待ち遠しいものです。失礼ですがあなたの手でこの家の名譽をお上げくださって、私の亡なくなりましたのちも私の子供らを護まもっておやりください」

などと言った。宮のお返事はおおようで、しかも一言をたいした努力でお言いになるほどのものであるが、源氏の心はまったくそれに惹ひきつけられてしまつて、日の暮れるまでとどまつていた。

「人聞きのよい人生の望みなどはたいして持ちませんが、四季時々の美しい自然を生かせるようなことで、私は満足を得たいと思つています。春の花の咲く林、秋の野のながめを昔からいろいろに優劣が論ぜられています、道理だと思つて、どちらかに加担のできるほどのことはまだだれにも言われておりません。支那しなでは春の花の錦が最上のものに言われておりますし、日本の歌では秋の哀れが大事に取り扱われています。どちらもその時その時に感情が変わつていつて、どれが最もよいとは私らに決められないのです。狭い邸せしやの中ででも、あるいは春の花の木をもつぱら集めて植えたり、秋草の花を多く作らせて、野に鳴く虫を放しておいたりする庭をこしらえてあなたがたにお見せしたく思いますが、あなたはどちらがお好きですか、春と秋と」

源氏にこうお言われになった宮は、返辞のしにくいことであるとはお思いになったが、何も言わないことはよろしくないとお考えに

なつて、

「私などはまして何もわかりはいたしませんで、いつも皆よろしいように思われますけれど、そのうちでも怪しいと申します夕べ（いつとても恋しからずはあらねども秋の夕べは怪しかりけり）は私のためにも亡なくなりました母の思い出される時になっておりまして、特別な気がいたします」

お言葉一尻じりのしどけなくなつてしまふ様子などの可憐かれんさに、源氏は思わず規のりを越した言葉を口に出した。

「#ここから1字下げ」

「君もさは哀れをかはせ人知れずわが身にしむる秋の夕風

「#ここで字下げ終わり」

忍びきれないおりおりがあるのです」

宮のお返辞のあるわけもない。腑ぶに落ちないとお思になるふうである。いったんおさえたものが外へあふれ出たあとは、その勢いで恋も恨みも源氏の口をついて出てきた。それ以上にも事を進ませる可能性はあったが、宮があまりにもあきれてお思になる様子の見えるのも道理に思われたし、自身の心もけしからぬことであると思ひ返されもして源氏はただ歎息たんそくをしていた。艶えんな姿ももう宮のお目にはうとましいものにはかり見えた。柔らかにみじろぎをして少しずつあとへ引つ込んでお行きになるのを知つて、

「そんなに私が不愉快なものに思われますか、高尚こうしょうな貴女きじよはそんなにしてお見せになるものではありませんよ。ではもうあんなお話はよしましうね。これから私をお憎みになつてはいけませんよ」

と言つて源氏は立ち去つた。しめやかな源氏の衣服の香の座敷に残っていることすらを宮は情けなくお思いになつた。女房たちが出て来て格子などを閉めたあとで、

「このお敷き物の移り香の結構ですこと、どうしてあの方はこんなにすべてのよいものを備えておいでになるのでしょうか。柳の枝に桜を咲かせたというのはあの方ね。どんな前生をお持ちになる方でしょうか」

などと言ひ合つていた。

西の対に帰つた源氏はすぐにも寢室へはいらずに物思わしいふうで庭をながめながら、端の座敷にからだを横たえていた。燈籠を少し遠くへ掛けさせ、女房たちをそばに置いて話をさせなどしているのであつた。思つてはならぬ人が恋しくなつて、悲しみに胸のふさがるような癖がまだ自分には残つていたのでないかと、源氏は自身のことながらも思われた。これはまったく似合わしからぬ恋である、おそろしい罪であることはこれ以上であるかもしれぬが若き日の過失は、思慮の足らないためと神仏もお許しになつたのであろう、今もまたその罪を犯してはならないと、源氏はみずから思われてきたことによつて、年が行けば分別ができるものであるとも悟つた。

王女御は身にしむ秋というものを理解したふうにお返辞をされたことすらお悔やみになつた。恥ずかしく苦しくて、無気味で病氣のようになつておいでになるのを、源氏は素知らぬふうで平生以上に親らしく世話などやいていた。

源氏は夫人に、

「女御の秋がよいとお言いになるのにも同情されるし、あなたの春が好きなことにも私は喜びを感じる。季節季節の草木だけでも気

に入った享樂をあなたがたにさせたい。いろいろの仕事を多く持つていてはそんなことも望みどおりにはできないから、早く出家が遂げたいものの、あなたの寂しくなることが思われてそれも実現難になりますよ」

などと語っていた。

大井の山荘の人もどうしているかと絶えず源氏は思いやつていますが、ますます窮屈な位置に押し上げられてしまった今では、通って行くことが困難にばかりなった。悲觀的に人生を見るようになった明石を、源氏はそうした寂しい思いをするのも心がらである、自分の勧めに従って町へ出て来ればよいのであるが、他の夫人たちといっしょに住むのがいやだと思うような思い上がりすぎたところがあるからであると思ながらも、また哀れで、例の嵯峨の御堂の不断の念仏に託して山荘を訪ねた。住み馴れるにしたがつてますます凄（すこ）い気のする山荘に待つ恋人などというものは、この源氏ほどの深い愛情を持たない相手をも引きつける力があるであろうと思われる。ましてたまさかに逢えたことで、恨めしい因縁のさすがに浅くないことも思つて歎く女はどう取り扱つていいかと、源氏は力限りの愛撫を試みて慰めるばかりであった。木の繁（しげ）った中からさす篝（かがり）の光が流れの蛍（ほたる）と同じように見える庭もおもしろかった。

「過去に寂しい生活の経験をしていなければなら、私もこの山荘で逢うことが心細くばかり思われることだろう」

と源氏が言うと、

「#ここから1字下げ」

「いさりせしかげ忘れぬ篝（かがり）火は身のうき船や慕ひ来にけん

「#ここで字下げ終わり」

あちらの景色けしきによく似ております。不幸な者につきもののような
灯影ほかげでございます」

と明石が言った。

「#ここから1字下げ」

「浅からぬ下の思ひを知らねばやなほ篝火の影は騒げる

「#ここで字下げ終わり」

だれが私の人生観を悲しいものにさせたのだろう」

と源氏のほうからも恨みを言った。少し閑暇ひまのできたころであつたから、御堂みどうの仏勤めにも没頭することができて、二、三日源氏が山荘にとどまっていることで女は少し慰められたはずである。

底本：「全訳源氏物語 上巻」角川文庫、角川書店

1971（昭和46）年8月10日改版初版発行

1994（平成6）年12月20日56版発行

このファイルは、古典総合研究所（<http://www.genji.co.jp/>）で入力されたものを、青空文庫形式にあらためて作成しました。

校正には、2002（平成14）年4月5日71版を使用しました。

入力：上田英代

校正：kompass

2003年7月4日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫(<http://www.aozora.gr.jp/>)で作られました。入力、校正、制作にあたっては、ボランティアの皆さんです。

源氏物語

朝顔

紫式部

與謝野晶子訳

【テキスト中に現れる記号について】

〈 〉：ルビ

（例）噂うわさ

—：ルビの付く文字列の始まりを特定する記号

（例）御一叔母おば

「#」：入力者注 主に外字の説明や、傍点の位置の指定

（例）「#地から3字上げ」

「#地から3字上げ」みづからはあるかなきかのあさがほと

「#地から3字上げ」言ひなす人の忘れぬかな （晶子）

齋院は父宮の喪のために職をお辞しになった。源氏は例のように古い恋も忘れることのできぬ癖で、始終手紙を送っているのだが、齋院御在職時代に迷惑をされた噂うわさの相手である人に、女王にょおうは打ち解けた返事をお書きになることもなかった。九月になって旧邸

の桃園の宮へお移りになったのを聞いて、そこには御一叔母おはの女五にょごの宮みやが同居しておいでになったから、そのお見舞いに託して源氏は訪問して行った。故院がこの御一同胞はらからがたを懇切にお扱いになったことによつて、今もそうした方々と源氏には親しい交際が残っているのである。同じ御殿の西と東に分かれて、老内親王と若い前齋院とは住んでおいでになった。式部卿しきぶきょうの宮がお薨かくれになつて何ほどの時がたつていなくてもないが、もう宮のうちには荒れた色が漂つていて、しみりとした空気があつた。女五の宮が御対面あそばして源氏にいろいろなお話があつた。老女らしい御様子で咳せきが多くお言葉に混じるのである。姉君ではあるが太政大臣の未亡人の宮はもつと若く、美しいところを今もお持ちになるが、これはまったく老人らしくて、女性に遠い気のするほどこちこちしたものごしでおありになるのも不思議である。

「院の陛下がお崩かくれになつてからは、心細いものに私はなつて、年のせいからも泣かれる日が多いところへ、またこの宮が私を置いて行つておしまひになつたので、もうあるかないかに生きているにすぎない私を訪たずねてくださったことで、私は不幸だと思つたことももう忘れてしまひそうですよ」

と宮はお言ひになつた。ずいぶん老人としよりめいておしまひになつたと思ひながらも源氏は畏かしこまつて申し上げた。

「院がお崩かくれになりました以来、すべてのことが同じこの世のことと思われませんかような変わり方で、思ひがけぬ所罰も受けまして、遠国に漂泊さすらえておりましたが、たまたま帰京が許されることになりましたと、また雑務に追われてばかりおりますようなことで、長い前からお伺ひいたして故院のお話を承りもし、お聞きもいたしたい

と存じながら果たしえませんかことで悶々^{もんもん}としておりました」

「あなたの不幸だったころの世の中はまあどうだったろう。昔の御代もそうした時代も同じようにながめていねばならぬことで私は長生きがいやでしたが、またあなたがお栄えになる日を見ることのできたために、私の考えはまた違ってきたよ。あの中途で死んでいたらと思うのでね、長生きがよくなったのですよ」

ぶるぶるとお声が震う。また続けて、

「ますますきれいですね。子供でいらっしった時にはじめてあなたを見て、こんな人も生まれてくるものだろうかとびっくりしましたね。それからもお目にかかるたびにあなたのきれいなのに驚いてばかりいましたよ。今の陛下があなたによく似ていらっしやるという話ですが、そのとおりには行かないでしょう、やはりいくぶん劣っていらっしやるだろうと私は想像申し上げますよ」

長々と宮は語られるのであるが、面と向かつて美貌^{ひぼう}をほめる人もないものであると源氏はおかしく思った。

「さすらい人になっておりましたころから非常に私も衰えてしまいました。陛下の御美貌は古今無比とお見上げ申しております。あなた様の御想像は誤っておりますよ」

と源氏は言った。

「では時々陛下を拝んでおればいつそう長生きをする私になりますね。私は今日でもう人生のいやなことも皆忘れてしまいましたよ」
 こんなお話のあとでも五の宮はお泣きになるのである。

「お姉様の三の宮がおうらやましい。あなたのお子さんを孫にしておられる御縁で始終あなたにお逢いしておられるのだからね。ここのお亡^なくなりになった宮様もその思召しだけがあって、実現できない

かつたことで歎息をあそばしたことがよくあるのです」

というお話だけには源氏も耳のとまる気がした。

「そうなっておりますましたら私はすばらしい幸福な人間だったでしょう。宮様がたは私に御愛情が足りなかつたとより思われません」

と源氏は恨めしいふうに、しかも言外に意を響かせても言つた。

女王のお住まいになつていられるほうの庭を遠く見ると、枯れ枯れになつた花草もなお魅力を持つもののように思われて、それを静かな気分でながめていられる麗人が直ちに想像され、源氏は恋しかつた。逢いたい心のおさえられないままに、

「こちらへ伺いましたついでにお訪ねいたさないことは、志のないもののように、誤解を受けましようから、あちらへも参りましよう」

と源氏は言つて、縁側伝いに行つた。もう暗くなつたころであつたが、鈍色の縁の御簾に黒い几帳の添えて立てられてある透影は身にしむものに思われた。薫物の香が風について吹き通う艶なお住居である。外は失礼だと思つて、女房たちの計らいで南の端の座敷の席が設けられた。女房の宣旨が応接に出て取り次ぐ言葉を待つていた。

「今になりました、お居間の御簾の前などにお席をいただくことかと私はちよつと戸惑いがされます。どんなに長い年月にわたつて私は志を申し続けてきたことでしょう。その勞に酬いられて、お居間へ何うくらのことは許されていいかと信じてきました」

と言つて、源氏は不満足な顔をしていた。

「昔というものは皆夢でございまして、それがさめたのちのはかない世かと、それもまだよく決めて思われません境地にただ今はおり

ます私ですから、あなた様の労などは静かに考えさせていただいたのちに定めなければと存じます」

女王の言葉の伝えられたのはこれだった。だからこの世は定めがたい、頼みにしがたいのだと、こんな言葉の端からも源氏は悲しまれた。

「#ここから1字下げ」

「人知れず神の許しを待ちしここにこらつれなき世を過ぐすかな

「#ここで字下げ終わり」

ただ今はもう神に託しておのがれになることもできないはずです。一方で私が不幸な目にあっていました。時以来の苦しみの記録の片端でもお聞きくださいませんか」

源氏は女王と直接に会見することをこう言って強要するのである。そうした様子なども昔の源氏に比べて、より優美なところが多く添ったように思われた。その時代に比べると年はずっと行ってしまった源氏ではあるが、位の高さにはつりあわぬ若々しさは保存されていた。

「#ここから2字下げ」

なべて世の哀ればかりを問ふからに誓ひしことを神やいさめん

「#ここで字下げ終わり」

と齋院のお歌が伝えられる。

「そんなことをおとがめになるのですか。その時代の罪は皆一科戸しなだ

の風に追ってもらったはずです」

源氏の愛嬌はこぼれるようであった。

「この御禊を神は（恋せじとみたらし川にせし御禊神は受けずもなりにけるかな）お受けになりませんそうですね」

宣旨は軽く戯談にしては言っているが、心の中では非常に気の毒だと源氏に同情していた。羞恥深い女王は次第に奥へ身を引いておしまいになって、もう宣旨にも言葉をお与えにならない。

「あまりに哀れに自分が見えすぎますから」

と深い歎息をしながら源氏は立ち上がった。

「年が行ってしまふと恥ずかしい目にあうものです。こんな恋の憔悴者にせめて話を聞いてやろうという寛大な気持ちをお見せになりましたか。そうじゃない」

こんな言葉を女房に残して源氏の帰ったあとで、女房らはどこの女房も言うように源氏をたたえた。空の色も身にしむ夜で、木の葉の鳴る音にも昔が思われて、女房らは古いころからの源氏との交渉のあったある場面場面のおもしろかったこと、身に沁んだことも心に浮かんでくると言って齋院にお話し申していた。

不満足な気持ちで帰って行った源氏はましてその夜が眠れなかった。早く格子を上げさせて源氏は庭の朝霧をながめていた。枯れた花の中に朝顔が左右の草にまつわりながらあるかないかに咲いて、しかも香さえも放つ花を折らせた源氏は、前齋院へそれを贈るのであった。

「#ここから1字下げ」

あまりに他人らしくお扱いになりましたから、きまりも悪くなって帰りましたが、哀れな私の後ろ姿をどうお笑いになったことかと口

惜しい気もしますが、しかし、

「#ここから2字下げ」

見し折りのつゆ忘れぬ朝顔の花の盛りは過ぎやしぬらん

「#ここから1字下げ」

どんなに長い年月の間あなたをお思いしているかということだけは知っていてくださるはずだと思ひまして、私は歎なげきながらも希望を
持つております。

「#ここで字下げ終わり」

という手紙を源氏は書いたのである。真正面から恋ばかりを言われてい
るでもない中年の源氏のおとなしい手紙に対して、返事をせぬことも感情の乏しい女と思われ
ることであろうと女王もお思いになり、女房たちもそう思つて硯すずりの用意などしたのでお書きになつた。

「#ここから2字下げ」

秋はてて霧まがきの籬まがきにむすぼほれあるかなきかにうつる朝顔

「#ここから1字下げ」

秋にふさわしい花をお送りくださいましたことでももの哀れな気
持ちになつております。

「#ここで字下げ終わり」

とだけ書かれた手紙はたいしておもしろいものでもないはずであるが、源氏はそれを手から放すのも惜しいようにじつとながめてい

た。青鈍色あおにびの柔らかい紙に書かれた字は美しいようであつた。書いた人の身分、書き方などが補つてその時はよい文章、よい歌のように思われたことも、改めて本の中へ書き載せると拙つたい点の現われてくるものであるから、手紙の文章や歌というようなものは、この話の控え帳に筆者は大部分省くことにしていたので、採録したものにも書き誤りがあるであらうと思われる。

今になつてまた若々しい恋の手紙を人に送るようなことも似合わしくないことであると源氏は思いながらも、昔から好意も友情もその人に持たれながら、恋の成り立つまでにはならなかつたのを思うと、もうあとへは退ひけない氣になつていて、再び情火を胸に燃やしなながら心をこめた手紙を續いて送つていた。東の対のほうに離れていて、前齋院の宣旨を源氏は呼び寄せて相談をしていた。

女房たちのだれの誘惑にもなびいて行きそうな人々は狂氣にもなるほど源氏をほめて夢中になつているこんな家の中で、朝顔の女王だけは冷静でありになつた。お若い時すらも友情以上のものをこの人にお持ちにならなかつたのであるから、今はまして自分もその人も恋愛などをする年ではなくなつていて、花や草木のことの言われる手紙にもすぐに返事を出すようなことは人の批評することがうるさいと、それも遠慮をされるようになっていつまでたつてもお心の動く様子はなかつた。

初めの態度はどこまでもお続けになる朝顔の女王の普通の型でない点が、珍重すべきおもしろいことにも思われてならない源氏であつた。世間はもうその噂うわさをして、

「源氏の大臣は前齋院に御熱心でいられるから、女五の宮へ御親切もお尽くしになるのだらう、結婚されて似合いの縁というものであ

るう」

とも言うのが、紫夫人の耳にも伝わって来た。当座はそんなことがあつても自分へ源氏は話して聞かせるはずであると思つていたが、それ以来気をつけて見ると、源氏の様子はそわそわとして、何かに心の奪われていることがよくわかるのであつた。こんなにまじめに打ち込んで結婚までを思う恋を、自分にはただ気紛れですることのように良人は言つていた。同じ女王ではあつても世間から重んぜられてゐることは自分と比較にならない人である。その人に良人の愛が移つてしまつたなら自分はみじめであらう、と夫人は歎かれた。さすがに第一の夫人として源氏の愛をほとんど一身に集めてきた人であつたから、今になつて心の満たされない取り扱いを受けることは、外へ対しても堪えがたいことであると夫人は思うのである。顧みられないというようなことはなくとも、源氏が重んじる妻は他の人で、自分は少女時代から養つてきた、どんな薄遇をしても甘んじてゐるはずの妻にすぎないことになるのであらうと、こんなことを思つて夫人は煩悶してゐるが、たいしたことでないことはあまり感情を害しない程度の夫人の恨み言にもなつて、それで源氏の恋愛行為が牽制されることにもなるのであつたが、今度は夫人の心の底から恨めしく思うことであつたから、何ともその問題に触れようとならない。外をながめて物思いを絶えずするのが源氏であつて、御所の宿直の夜が多くなり、役のようにして自宅ですることは手紙を書くことであつた。噂に誤りがないらしいと夫人は思つて、少しくらいは打ち明けて話してもよさそうなものであると、飽き足りなくばかり思つた。

冬の初めになつて今年には神事がいっさい停止されて寂しい。

つれづれな源氏はまた五の宮を訪ねに行こうとした。雪もちらちらと降って艶な夕方に、少し着て柔らかになつた小袖になお薰物を多くしたり、化粧に時間を費やしたりして恋人を訪おうとしている源氏であるから、それを見ていて気の弱い女性はどんな心持ちがするであろうと危ぶまれた。さすがに出かけの声をかけに源氏は夫人の所へ来た。

「女五の宮様が御病気でいらっしゃるからお見舞いに行つて来ます」
ちよつとすわつてこう言う源氏のほうを、夫人は見ようとせすに姫君の相手をしていたが、不快な気持ちはよく見えた。

「始終このごろは機嫌が悪いではありませんか、無理でないかもしれない。長くいつしよにいてはあなたに飽かれると思つて、私は時々御所で宿直をしたりしてみるのが、それでまたあなたは不愉快になるのですね」

「ほんとうに長く同じであるものは悲しい目を見ます」
とだけ言つて向こうを向いて寝てしまった女王を置いて出て行くことはつらいことに源氏は思いながらも、もう御訪問の報せを宮に申し上げたのちであつたから、やむをえず二条の院を出た。こんな日も自分の上にめぐつてくるのを知らずに、源氏を信頼して暮らしてきたと寂しい気持ちに夫人はなつていた。喪服の鈍色ではあるが濃淡の重なりの艶な源氏の姿が雪の光でよく見えるのを、寝ながらのぞいていた夫人はこの姿を見ることも稀な日になつたらと思うと悲しかった。前駆も親しい者ばかりを選んであつたが、

「参内する以外の外出はおっこうになつた。桃園の女五の宮様は寂しいお一人ぼつちなのだからね、式部卿の宮がおいでになつた間は

私もお任せしてしまっていたが、今では私がたよりだとおっしゃるのでね、それもごもつともでお気の毒だから」

などと、前駆を勤める人たちにも言いわけらしく源氏は言っていたが、

「りっぱな方だけれど、恋愛をおやめにならない点が傷だね。御家庭がそれで済むまいと心配だ」

とそうした人たちも言っていた。

桃園のお邸やしきは北側にある普通の人の出入りする門をはいるのは自重の足りないことに見られると思って、西の大門から人をやって案内を申し入れた。こんな天気になったから、先触れはあっても源氏は出かけて来ないであろうと宮は思っておいでになったのであるから、驚いて大門をおあけさせになるのであった。出て来た門番の侍が寒そうな姿で、背中がぞつとするというふうをして、門の扉をかたかたといわせているが、これ以外の侍はいないらしい。

「ひどく錠が錆さびていてあきません」

とこぼすのを、源氏は身に沁しんで聞いていた。宮のお若いころ、自身の生まれたころを源氏が考えてみるとそれはもう三十年の昔になる、物の錆さびたことよって人間の古くなったことも思われる。それを知りながら仮の世の執着が離れず、人に心の惹ひかれることのやむ時がない自分であると源氏は恥じた。

「#ここから2字下げ」

いつのまに蓬よもぎがもとと結むすばほれ雪ふる里と荒れし垣かきね根ぞ

「#ここで字下げ終わり」

源氏はこんなことを口ずさんでいた。やや長くかかって古い門の抵抗がやっと征服された。

源氏はまず宮のお居間のほうで例のように話していたが、昔話の取りとめもないようなのが長く続いて源氏は眠くなるばかりであった。宮もあくびをあそばして、

「私は宵よしまど惑いなものですから、お話がもうできないのですよ」

とお言いになったかと思うと、駢いびきという源氏に馴染なじみの少ない音が聞こえだしてきた。源氏は内心に喜びながら宮のお居間を辞して出ようとする、また一人の老人らしい咳せきをしながら御簾みすぎわに寄つて来る人があった。

「もつたいないことですが、ご存じのはずと思っておりますもの私の存在をとくにお忘れになっていらっしゃるようでございますから、私のほうから、出てまいりました。院の陛下がお祖母ばあさんとお言いになりました者でございますよ」

と言うので源氏は思い出した。源典侍げんでんじといわれていた人は尼になつて女五の宮のお弟子でし分でお仕えしていると以前聞いたこともあるが、今まで生きていたとは思いがけないことであるとあきれってしまった。

「あのころのことは皆昔話になつて、思い出してさえあまりに今と遠くて心細くなるばかりなのですが、うれしい方がおいでになりましたね。『親なしに臥ふせる旅人』と思つてください」

と言いながら、御簾のほうへからだを寄せる源氏に、典侍ないしのすけはいつそう昔が帰つて来た気がして、今も好色女らしく、齒の少なくなつた曲がつた口もとも想像される声で、甘えかかろうとしていた。

「とうとうこんなになつてしまつたじゃありませんか」

などとおくめんなしに言う。今はじめて老衰にあつたような口ぶりであるとおかしく源氏は思いながらも、一面では哀れなことに予期もせず触れた気もした。この女が若盛りのころの後宮「しんぎゅう」の女御「にょご」、更衣「いひ」はどうなったかというのと、みじめなふうになつて生き長らえている人もあるであろうが大部分は故人である。入道の宮などのお年はどうであろう、この人の半分にも足らないでお崩れ「かく」になつたではないか、はかないのが姿であるからと源氏は思いながらも、人格がいいともいえない、ふしだらな女が長生きをして気楽に仏勤めをして暮らすようなことも不定「ふじょう」と仏のお教えになつたこの世の相であると、こんなふうに感じて、気分がしんみりとしてきたのを、典侍は自身の魅力の反映が源氏に現われてきたものと解して、若々しく言う。

「#ここから2字下げ」

年一経「ふ」れどこの契りこそ忘れね親の親とか言ひし一こと

「#ここで字下げ終わり」

源氏は悪感「おかん」を覚えて、

「#ここから1字下げ」

「身を変へて後「あと」も待ち見よこの世にて親を忘るるためしありやと

「#ここで字下げ終わり」

頼もしい縁ですよ。そのうちにまた」

と言って立ってしまった。

西のほうはもう格子が下ろしてあったが、迷惑がるように思われ
てはと斟酌して一間二間はそのままにしてあった。月が出て淡い雪
の光といっしょになった夜の色が美しかった。今夜は真剣なふうに
恋を訴える源氏であった。

「ただ一言、それは私を憎むということでも御自身のお口から聞か
せてください。私はそれだけをしていただいただけで満足してあき
らめようと思います」

熱情を見せてこう言うが、女王は、自分も源氏もまだ若かった日、
源氏が今日のような複雑な係累もなく、どんなことも若さの咎で
済む時代にも、父宮などの希望された源氏との結婚問題を、自分は
その気になれずに否んでしまった。ましてこんなに年が行って衰え
た今になっては、一言でも直接にものを言ったりすることは恥ずか
しくてできないとお思いになって、だれが勧めてもそうしようとさ
れないのを、源氏は非常に恨めしく思った。さすがに冷淡にはお取
り扱いにはならないで、人づてのお返辞はくださるといっているのであつ
たから、源氏は悶々とするばかりであった。次第に夜がふけて、風
の音もはげしくなる。心細さに落ちる涙をぬぐいながら源氏は言う。

「#ここから1字下げ」

「つれなさを昔に懲りぬ心こそ人のつらさに添へてつらけれ

「#ここで字下げ終わり」

『心づから』（恋しさも心づからのものなれば置き所なくもてぞ煩
ふ）苦しみます」

「あまりにお気の毒でございますから」

と言って、女房らが女王に返歌をされるように勧めた。

「#ここから1字下げ」

「改めて何かは見えん人の上にかかりと聞きし心変はりを

「#ここで字下げ終わり」

私はそうしたふうに変わっていきません」

と女房が齋院のお言葉を伝えた。力の抜けた気がしながらも、言うべきことは言い残して帰って行く源氏は、自身がみじめに思われてならなかった。

「こんなことは愚かな男の例として噂うわさにもなりそうなことですから人には言わないください。『いさや川』(犬上いぬがみのこの山なるいさや川いさとこたへてわが名もらすな)などというのも恋の成り立った場合の歌で、ここへは引けませんね」

と言って源氏はなお女房たちに何事かを頼んで行った。

「もつたいたい気がしました。なぜああまで気強くなさるのでしよう。少し近くへお出ましになっても、まじめに求婚をしていらっしやるだけですから、失礼なことなどの起こってくる気づかいはないでしょうのに、お気の毒な」

とあとで言う者もあつた。齋院は源氏の価値をよく知っておいであつた。愛を感じにならないのではないが、好意を見せても源氏の外がいほう貌だけを愛している一般の女と同じに思われることはいやであると思つておいでになつた。接近させて下にかくしたこの恋を源氏に看破されるのもつらく女王はお思いになるのである。友情で書か

れた手紙には友情で酬^{むく}いることにして、源氏が来れば人づてで話す程度のことにしたたいとお思いになって、御自身は神に奉仕していた間怠^たっていた仏勤^{ぶつごん}めを、取り返しうるほど十分にできる尼になりた^いとも願^{ねが}っておいでになるのであるが、この際にわか^わかにそうしたことをするのも源氏へ済まない、反抗^{はんか}的^{てき}の行^{ぎやう}為^ゐであるとも必ず言^いわれ^れるであろうと、世間^よが作る噂^{うわさ}というものの苦し^{くるしみ}さを経験^{けいけん}されたお心からお思いにな^なった。女房^{にようぼう}たちが源氏^{げんじ}に買^か収^{しゆ}されてどんな行^{ぎやう}為^ゐをするかもしれぬという懸^{けん}念^{ねん}から女王^{じゆうわう}はその人^{ひと}たち^{たち}に對^{たい}してもお氣^{いき}をお許^{ゆる}しにな^ならなかつた。そして追^おい追^おい宗教^{しゆじやう}的^{てき}な生^{せい}活^{くわく}へ進^{すす}んでお行^いき^きになるのであ^あつた。女王^{じゆうわう}は男^{おとこ}の兄^{あに}弟^{てい}も幾^{いく}人^{にん}か持^もつておいでになるのであるが同^{どう}腹^{ふく}でな^なかつたから親^{おや}しん^{しん}で来^きる者^{もの}もな^ない。宮^{みや}家^けの財^{ざい}政^{せい}も心^{こころ}細^{こま}くな^なつた際^{さい}に、源^{げん}氏^じが熱^{ねつ}心^{しん}な求^{もと}婚^{こん}者^{しや}として出^でて来^きたのであるから、女^めたち^{たち}は一^{ひと}人^{にん}残^{のこ}らず結^{むす}婚^{こん}の成^{なり}立^たつことばかりを祈^{いの}つていた。

源^{げん}氏^じはあな^ながち^ちにあ^あせつて結^{むす}婚^{こん}がし^したい^{たい}のではな^なかつたが、恋^{こひ}人^{にん}の冷^{れい}淡^{たん}な^なに負^まけてしま^まうの^のが残^{のこ}念^{ねん}でな^ならな^なかつた。今日^{けふ}の源^{げん}氏^じは最^{さい}上^{じやう}の運^{うん}に恵^{めぐ}まれては^はいるが、昔^{むかし}よりは^はいろ^{いろ}な^なこと^{こと}に経^{けい}験^{げん}を積^{たく}んで^できて^てい^いて、今^{いま}さら^{さら}恋^{こひ}愛^{あい}に没^{もつ}頭^づする^{する}こと^{こと}の不^ふ可^かな^なこと^{こと}も、世^よ間^{かん}か^から受^うける批^ひ難^{なん}も知^しつて^てい^いな^なが^がら^らし^して^てい^いる^ること^{こと}で、これ^{これ}が成^{せい}功^{こう}し^しな^なけ^ければ^ばい^いよ^よ不^ふ名^{めい}譽^よである^{である}と信^{しん}じて、二^に条^{じょう}の院^{いん}に寝^ねない夜^よも多^{おほ}く^くな^なつた^たの^のを夫^{つま}人^{にん}は恨^{にく}め^めしが^がつ^つて^てい^いた。悲^{かな}し^しみ^みを^をお^おさ^さえ^える^る力^{ちから}も尽^{つく}きる^るこ^こと^とが^があ^ある^るわ^わけ^けで^であ^ある^る。源^{げん}氏^じの前^{まえ}で涙^{なみだ}の^のこ^こぼ^ぼれ^れる^ること^{こと}もあ^あつ^つた。

「なぜ機^き嫌^{けん}を悪^{わる}く^くし^して^てい^いる^るの^のです^すか、理^{わけ}由^ゆが^がわ^わか^から^らな^ない」

と^と言^いい^いな^なが^がら、額^{ひたい}髪^{がみ}を^を手^てで^で払^はつ^つて^てや^やり、憐^{あわれ}んだ^だ表^あ情^{じやう}で^で夫^{つま}人^{にん}の^の顔^{かほ}を^を源^{げん}氏^じが^がな^なが^がめ^めて^てい^いる^る様^{よう}子^しな^など^どは、絵^えに描^かき^きたい^{たい}ほ^ほど^ど美^うし^しい^い夫^{つま}婦^ふと^と見^みえ^えた^た。

「女院がお崩れになつてから、陛下が寂しそうにばかりしておいでになるのが心苦しいことだし、太政大臣が現在では欠けているのだから、政務は皆私が見なければならなくて、多忙なために家へ帰らない時の多いのを、あなたから言えば例のなかつたことで、寂しく思うのももつともだけれど、ほんとうはもうあなたの不安がることは何もありませんよ。安心しておいでなさい。大人になつたけれどまだ少女のように思いやりもできず、私を信じることもできない、可憐なばかりのあなたなのだろう」

などと言いながら、優しく妻の髪を直したりして源氏はいるのであつたが、夫人はいよいよ顔を向こうへやつてしまつて何も言わな

い。
「若々しい我儘をあなたがするのも私のつけた癖なのだ」

歎息をして、短い人生に愛する人からこんなにまで恨まれているのも苦しいことであると源氏は思った。

「齋院との交際で何かあなたは疑っているのではないのですか。それはまったく恋愛などではないのですよ。自然わかつてくるでしょうがね。昔からあの人はそんな気のないいづう変わった女性なのですよ。私の寂しい時などに手紙を書いてあげると、あちらはひまな方だから時々返事をくださるのです。忠実に相手になつてもくだらないと、そんなことをあなたにこぼすほどのことでもないから、いちいち話さないだけです。気がかりなことではないと思ひ直してください」

などと言つて、源氏は終日夫人をなだめ暮らした。

雪のたくさん積もつた上になお雪が降っていて、松と竹がおもしろく変わった個性を見せている夕暮れ時で、人の美貌もことさら光

るように思われた。

「春がよくなったり、秋がよくなったり、始終人の好みの変わる中で、私は冬の澄んだ月が雪の上にさした無色の風景が身に沁んで好きに思われる。そんな時にはこの世界のほかの大世界までが想像されてこれが人間の感じる極致の境だという気もするのに、すさまじいものに冬の月を言ったりする人の浅薄さが思われる」

源氏はこんなことを言いながら御簾を巻き上げさせた。月光が明るく地に落ちてすべての世界が白く見える中に、植え込みの灌木類の押しつけられた形だけが哀れに見え、流れの音も咽び声になっている。池の氷のきらきら光るのもすごかった。源氏は童女を庭へおろして雪まろげをさせた。美しい姿、頭つきなどが月の光にいつそよく見えて、やや大きな童女たちが、いろいろな袖を着て、上着は脱いだ結び帯の略装で、もうずっと長くなっていて、裾の広がった髪は雪の上で鮮明にきれいに見られるのであった。小さい童女は子供らしく喜んで走りまわるうちには扇を落としてしまったりしている。ますます大きくしようとしても、もう童女たちの力では雪の球が動かされなくなっている。童女の半分は東の妻戸の外に集まって、自身たちの出て行けないのを残念がりながら、庭の連中のすることをを見て笑っていた。

「昔一中宮がお庭に雪の山をお作らせになったことがある。だれもすることだけれど、その場合に非常にしっかりと合ったことをなさる方だった。どんな時にもあの方がおいでになったらと、残念に思われることが多い。私などに対して法を越えた御待遇はなさらなかったから、細かなことは拝見する機会もなかったが、さすがに尊敬している私を信用はしていかだすった。私は何かのことがあると

歌などを差し上げたが、文学的に見て優秀なお返事でないが、見識があるというよさはおありになって、お言いになることが皆深みのあるものだった。あれほど完全な貴女きじよがほかにもあるとは思われない。柔らかに弱々しくいらっしやって、気高けだかい品のよさがあの方のものだったのですからね。しかしあなただけは血縁の近い女性だけあってあの方によく似ている。少しあなたは嫉妬しつとをする点だけが悪いかもしれないね。前齋院の性格はまたまったく変わっておいでになる。私の寂しい時に手紙などを書く交際相手に敬意の払われる、晴れがましい友人としてはあの方だけがまだ残っておいでになると言っていていいでしょう」

と源氏が言った。

「尚侍ないしのかみは貴婦人の資格を十分に備えておいでになる、軽佻けいちょうな気などは少しもお見えにならないような方なのに、あんなことのあったのが、私は不思議でならない」

「そうですよ。艶えんな美しい女の例には、今でもむろん引かねばならない人ですよ。そんなことを思うと自分のしたことで人をそこなつた後悔が起こってきてきてならない。まして多情な生活をしては年が行つたあとでどんなに後悔することが多いだろう。人ほど軽率なことはしないでいる男だと思っていた私でさえこうだから」

源氏は尚侍の話をする時にも涙を少しこぼした。

「あなたが眼中にも置かないように軽蔑けいべつしている山荘の女は、身分以上に貴婦人の資格というものを皆そろえて持った人ですがね、思いついてますますよく見えるのも人によることですから、私はその点をその人によけいなもののようにも見ておりますがね。私はまだずっと下の階級に属する女性たちを知らないが、私の見た範囲で

もすぐれた人はなかなかないものですよ。東の院に置いてある人の善良さは、若い時から今まで一貫しています。愛すべき人ですよ。ああはいかないものですよ。私たちは青春時代から信じ合った、そしてつつましい恋を続けてきたものです。今になって別れ別れになることなどはできませんよ。私は深く愛しています」

こんな話に夜はふけていった。月はいよいよ澄んで美しい。夫人が、

「#ここから2字下げ」

氷とど岩間の水は行き悩み空澄む月の影ぞ流るる

「#ここで字下げ終わり」

と言いながら、外を見るために少し傾けた顔が美しかった。髪の毛質、顔だちが恋しい故人の宮にそっくりな気がして、源氏はうれしかった。少し外に分けられていた心も取り返されるものと思われた。鴛鴦おしどりの鳴いているのを聞いて、源氏は、

「#ここから2字下げ」

かきつめて昔恋しき雪もよに哀れを添そふる鴛鴦をしのうきねか

「#ここで字下げ終わり」

と言っていた。

寝室にはいつてからも源氏は中宮の御事を恋しく思いながら眠りについたのであったが、夢のようにでもなくほのかに宮の面影が見えた。非常にお恨めしいふうで、

「あんなに秘密を守るとお言いになりましたけれど、私たちのした過失あやまちはもう知れてしまつて、私は恥ずかしい思いと苦しい思いをしています。あなたが恨めしく思われます」

とお言いになつた。返辞を申し上げるつもりでたてた声が、夢に襲われた声であつたから、夫人が、

「まあ、どうなさいました、そんなに」

と言つたので源氏は目がさめた。非常に残り惜しい気がして、張り裂けるほどの鼓動を感じる胸をおさえていると、涙も流れてきた。夢のまつたく醒めたさのちでも源氏は泣くことをやめないのであつた。夫人はどんな夢であつたのであろうと思つと、自分だけが別物にされた寂しさを覚えて、じつとみじろぎもせずに寝ていた。

「#ここから2字下げ」

とけて寝ぬ寝一覚めさびしき冬の夜に結ばほれつる夢のみじかさ

「#ここで字下げ終わり」

源氏の歌である。夢に死んだ恋人を見たことに心は慰まないで、かえつて恋しさ悲しさのまさる気きのする源氏は、早く起きてしまつて、何とは表面に出さずに、誦経すきょうを寺へ頼んだ。苦しい目を見せるとお恨みになつたのもきつとそういう気きのあそばすことであろうと源氏に悟れるところがあつた。仏勤ぶつごんめをなされたほかに民衆のためにも功德を多くお行ないになつた宮が、あの一つの過失のためにこの世での罪障が消滅し尽くさずにいるかと、深く考えてみればみるほど源氏は悲しくなつた。自分はどんな苦行をしても寂しい世界に贖罪じやくざいの苦しみをしておいでになる中宮の所へ行つて、罪に代わつて

おあげすることがしたいと、こんなことをつくづくと思い暮らしていた。中宮のために仏事を自分の行なうことはどんな簡単なことであつても世間の疑いを受けることに違いない、帝の御心の鬼に思召し合わすことになつてもよろしくないと源氏ははばかりられて、ただ一人心で阿弥陀仏を念じ続けた。同じ蓮華の上に生まれしめたまえと祈つたことであらう。

「#ここから2字下げ」

なき人を慕ふ心にまかせてもかげ見ぬ水の瀬にやまどはん

「#ここで字下げ終わり」

と思うと悲しかったそうである。

「#ここから2字下げ」

(訳注) 源氏の君三十二歳。

「#ここで字下げ終わり」

底本：「全訳源氏物語 上巻」角川文庫、角川書店

1971 (昭和46)年8月10日改版初版発行

1994 (平成6)年12月20日56版発行

このファイルは、古典総合研究所 (<http://www.genji.co.jp/>)

で入力されたものを、青空文庫形式にあらためて作成しました。

校正には、2002 (平成14)年4月5日71版を使用しました。

「どんなに長い年月の間あなたをお思いしているかということだ

けは知っていてくださるはずだと思ひまして、私は歎きながらも希望を持っております。」の部分は、手紙の一部であると判断し、他の箇所に合わせて一字下げとしました。

入力：上田英代

校正：kumi

2003年7月16日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。